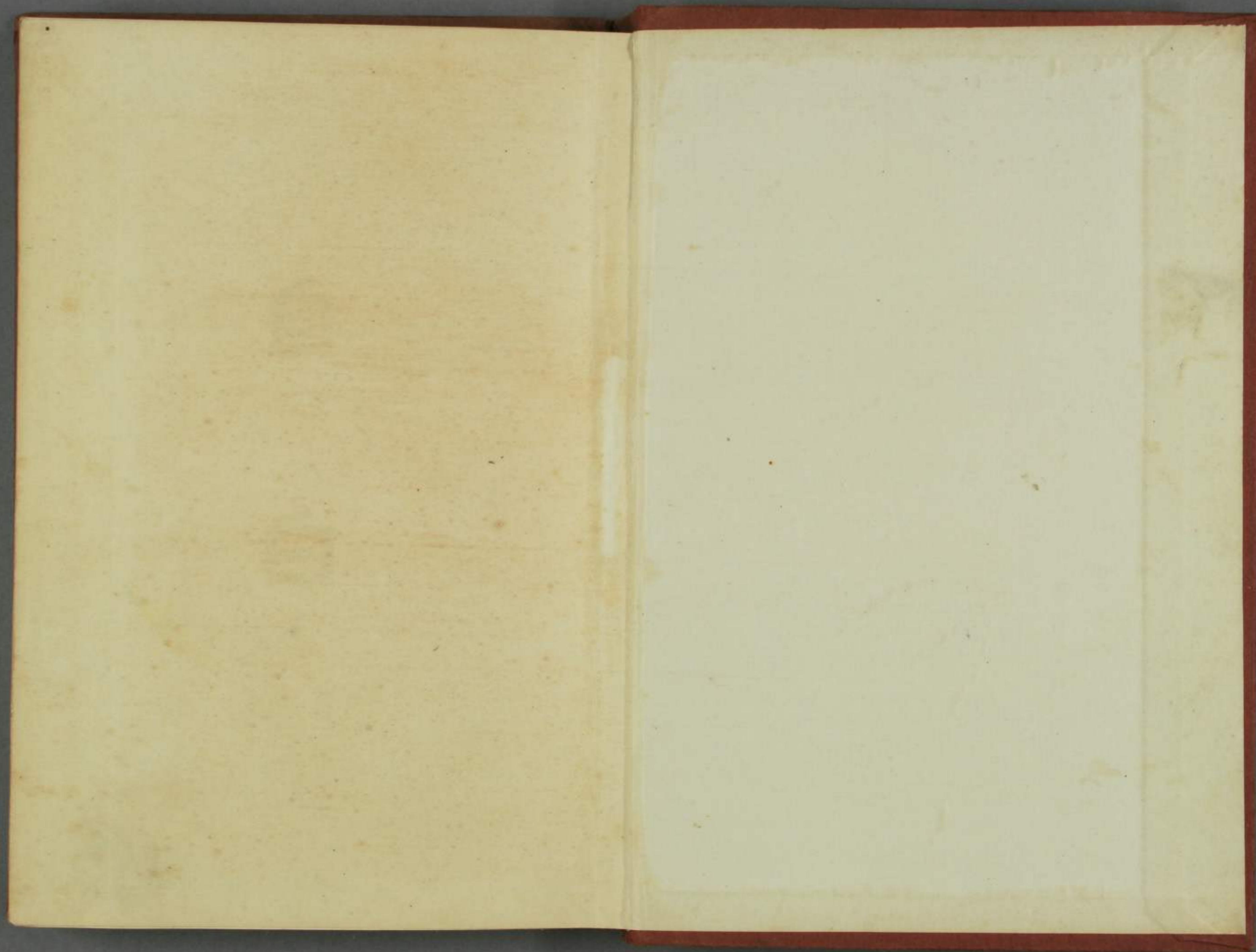


自白

湖處子著



自

白

自序

「自然に反れ」と叫んで、十年以前一たび文壇を退隠した我は、藝術が藝術を離れて自然に反りかゝつた晩近の思潮の上に、復活の機會を得たのである。此の『自白』即ち吾が復活の處女作である。

處女作と云へば無論小説であるが、實は作者自身の懺悔の一節の實録である。思ふに人の生涯は懺悔である、人は何時死ぬかも知れぬ、死ぬ前に一切を懺悔して置くのが必要である。此の一篇は此の精神から成つたのである。

従來作者と全く相識のない或る讀者、先づ此の作を一閱して曰く、初の數回は然ほどでも無いが、其からズツと面白く

なつて居ると作者自身は何うかと云ふと、其の主人公の過去を叙する首章は、涙で筆を駆つたのである。唯主人公自身が半宗教家であるだけに、讀者の中に、宗教趣味の有ると無いとで、興味を感ずる浅深の差が有ること、思ふ。是は萬々餘儀ない次第。

其から此の一篇は、作者の生涯中、正に「歸省」の前篇に當る。其れ故に「歸省」を愛讀して戴いた讀者諸君には、是非一讀を乞いたい。

明治四十一年春雨しめじめと降る書齋にて

宮崎湖處子識す





田中製版所製

なつて居ると、作者自身は何うかと云ふと、其の主人公の過去を叙する首章は、涙で筆を駆つたのである。唯主人公自身が半宗教家であるだけに、讀者の中に、宗教趣味の有ると無いとで、興味を感ずる淺深の差が有ることゝ思ふ。是は萬々餘儀ない次第。

其から此の一篇は、作者の生涯中、正に、歸省の前篇に當る。其れ故に、歸省を愛讀して戴いた讀者諸君には、是非一讀を乞いたい。

明治四十一年春雨しめじめと降る書齋にて

宮崎湖處子識す

自白

宮崎湖處子著

一

「其からね君、彼の家にはね君、別嬪が居るよ庇髪のが、あゝ。」
と一段聲を引下げて一段高い鼻を突出して、更紗の覆被を掛けた大きな机の端に
頬杖を衝いて、薬指の爪を啣へて居た馬面の、髪打ち蒙つた、口許に滑稽趣味を
有つた富岡澄男がニヤリと對手に向つて笑つた。對手の男は、顔面の輪廓、目鼻
の按排が好く整つて居て、美男と云ふには至らないが、端正な儀容である。然し
著しく厭世的表情を有つて居ると、體の至つて狭小なので、一見氣の毒なと

云ふ感を惹起さすのである。

机の片隅には雑多な手帖、筆記帖、雑誌、新聞の類が堆高く積まれて居る。其の一新聞の端に額は隠れて「訴訟法」と題した洋装の大冊の見えて居るのが、教科書らしい。四月號の「早稲田文學」は今買つて来たばかりと曰ふ體裁で、机の中央に特別な位置を興へてある。此處牛込榎木町何番地の一下宿屋の、勝手に接近した此の一室、是が此の下宿屋の主人、早稲田大學法科生富岡澄男の居間なので。

「成程」と和泉修三——對手の名——は毫も感じ無いかの如く、律義な面體を俯向けながら單に答へた。

富岡は猶語を繼いで、「なあにね、別嬪と言つた處で田舎の別嬪さ、東京にやあ彼の位なのは幾人でも居らあね。」

「成程」

「君が彼の家に往つたら加藤君許でなく其の妹にも英語を教へなさやならんかも

知れんが、何卒か教へて遣つて呉れたまへな、君」

「は、あ、何處かの學校にでも通つて居らるゝのかね」と和泉は聊か面を擧げた。

「然うだ、今は神田の里見女學校に居るがね、避暑になれば國に歸るからね。」

と、富岡は再び聲を引下げて、「然しね君、成るべく嫌疑を避ける様には爲てくれないとね、田舎の者あ直に何とか云ふ奴だからね、其に今言つた通り親爺が有名な頑固爺だからね、何様か其の積で居てくれたまへな君、其で無いと第一君の爲に爲らんからね。なあにさ君に如才は無いんだけれど、言つて見れば其様なもんさ、」と世辭で摩で、極惡さうに言を切つた、對手の痛所に觸れたかの如く。

「大きに然様」と和泉はサと差かんで俯向いた「いや、僕も一遍、非常な罪を犯して悉皆朋友を失つたけれど、今回は全く改悔の功を擧ぐる爲に往くんだから、決して君に心配を懸けるやうな事は……。」

「や、や、分つてる、分つてるよ君」と富岡は面を痛めて急に遮り「其から君の

期限の事だがね、八月迄なんて豫め申こむと、然んな短期では可けないつて初手から弾ね附けるんだからね君、黙つて往つて二年でも三年でもと見せかけて置いてさ、いざと云ふ時に突如に己むとを得ない一身上の事情とか何とか言つて足を抜くと然ら言つた様な事にした方が宜いよ、君。

『成程。』

『何様か然うしてくれたまへな君。』

と富岡は言を切つたが、又忽ち

『何様だらう今年も伸ばせないか知ら、伸ばせる物なら伸ばして貰いたいものだがな君。』

和泉は膝の上に組んで居た手を組み直して『然様さね僕も實は本年の九月には是非とも神學校に入りたいと思つて居るが。』

『何様でも耶穌教の御坊様になるんかなあ。』

『僕も今度非常な罪を犯して見て實際罪の恐しい事をも経験したし、又其の罪から救はれた神の恵と云ふ物も感じて居るので、是から生涯身を獻じて神に仕へたいと思つてる。僕は實際弱なんだから傳道の聖職を以て、再び罪を犯さない擔保としたいと思ふ。』

最後の一言には富岡も同情を感じざるを得なかつた。然し彼は直ぐ其を打ち消して、

『然し前途遠遠のお互だ、何も一蹶の爲に然う挫折する必要はないのさ、多寡が婦人との關係なんだ、非常の罪も何も有りや爲ないや、世間普通と言つても宜いのさ。然んな事を心配せずには是から實力を發揮して、社會に向つて奮闘するだあ。』

『其も然うではあるけれど』

『第一數年間修業した政治學の知識が役に立たなく爲るぢや無いか。』

『其は成るたけ利用する積』

『でも一年位は伸ばせさうなものだかな。』

『神學校と云ふ所は唯試験を受けて入れると云ふのでなく、推撰者を要するんで、其の推撰者に對して情誼上伸べる譯に往かんのでね。』

『然うかねえ、ぢあア爲方が無いなあ。』

と富岡は頰杖引いて腕を組んで體を反つたが、彼は二たび頭と聲を引き下げて、

『ね君其の耶穌教も秘すことは成まいが、成るべく甚しく行らん様にしてくれたまへ、例の頑固爺が熱心な御題目の凝塊だから。』

『然うさな』と和泉は力無げであつたが、思ひ切つたと云ふ所見で『宜し。』

『既う其位なもんだ、若先方に行て又何か不平不満な廉があつたら、早速言つて越したまへ、僕が何様にか談判するから。又何か君の勝手の不自由の事でもあるんなら、遠慮なく其の家の伯母様に言ひたまへ、成る事さへありや、何様な事

でも爲てくれる。非常に優しい人だから、遠慮でもしようものなら其こそ却て怨まれるよ。宜しいかね。』

『宜しい、其で何時でも行つて可いだらうか。』

『何時でも宜し、今日でも宜し。』

『實は午後出立しようと思ふが君の名刺か紹介状か要らんだらう乎。』

『其んな物は要らない、ちやんと通知してあるから、要るのは君の名刺だけだ。』

『托事でもあるなら。』

『いや既う何も無し。』

『ぢや是で暫く御目に懸らん。』

『巧く行つてくれたまへ。』

二人は是で立ち上つた

雷門で電車を降りて吾妻橋の前に来ると、右側の渡船場一杯人の頭が、うろうよと箱に詰められて苦しむかの様に蠢いて、言問に通ふ小蒸氣を待ちかけて居る吾妻橋から枕橋の方へと、眞黒く人が動いて續いて居る。中には自轉車や、腕車や、馬車で乗りこむ向もある。三圍の邊から向ふ、白髭の方面へかけて、櫻の匂と足駄の塵どが、バットと雜つて、今日土曜日の午後の花見の雑踏の盛を、限りもなく見せて居る。

枕橋を渡る雑踏の中を突と右に出外れた一挺の腕車、其の上には可なり大い柳行李を懷いた、鼠の中折帽子に、新調のセル地の背廣を被た、頬の殺けた、顔の青冷めた、生若い一紳士を乗せたのが、向島と直角に堀川に沿ふて、眞直に駆け出した。是は早稻田大學法科得業生和泉修三が賄附の月俸七圓で、千葉縣野田の。

一酒造家の、家庭教師に聘せられて、有り難く赴任するどころである。

彼は九州出身で其の父と曰ふ者は、其の郷里の地主、彼は其の三男であるが、虚弱な性質で、到庭鋤を執れないので中學校を卒業して、暫く教員と爲て居たが、何等か一科の學問を以て一身を立つると云ふ方針で、父兄の許諾を得て、五年前上京して、早稻田大學の豫科から入つて、本年七月首尾好く得業證書を握つた、早稻田大學法學士である。早稻田大學法學士、決して豪くない稱號では無いはずである、然るに其の豪いはずの法學士當人が、自分で悄然肩身を狭めて居る、是には理由のあることである。

彼は上京の當座、科業大事に、身を固めて、入學以來、優等を以て學級を登つて來たが、卒業の間際に至つて、終に一婦人の誘惑に陥り、醜名を流したので、彼は其の競争者の爲に手痛く攻撃と侮辱を受け、深く自ら悔恨んで新に生れ更ると云ふ精神を發して、其の區内の一教會に没式を受けて基督教信者となつたのであ

る。其は極めて善かつたが、自分一人を救つて潔白な身になつて、罪の對手を救はないのは獨善主義、否、利己主義だと、斯様考へて再び其の犯罪の家に、他の同士でも依頼すべき處を、傳道の爲とはいへ、自身で出入し初めたので、今度は郷友中の激烈な基督信者が怒り立つて、彼奴は傳道の美名を蒙つて、奸姪を行ふ者なりと、普く基督信者の名、否神の聖名を汚す者なりと憤慨し、協議の上、一夕彼を其中の一人の下宿に呼び付け、神の審判を行ひ、彼に白状せよと迫つた、彼が白状すべき新しき罪なきを述ぶるや否や、其の中の一人で、雲衝くばかりの大男なるが、猛然起つて彼の髪毛を引攫んで、鐵拳を其の左頬に食はし、傍から神の審判だぞと叫ぶ者があつた。彼は臍膈の外へ、かどばかり思つたが、其でも他の頬を之に轉ずることを忘れなかつた、此時隣室から、「何を爲さるんです」と咎むる宿主の老婆の聲が無かつたならば、彼は二たび三たびも其の鐵拳を喰つたらう。彼は涙を呑んで自分の下宿に歸つて、机の上に突伏して、思はずワツと

絶叫しようとした。涙は雨の降るが如くであつた、彼は犇と腕を拱んで、齒を嚙切め、叫び立つ鋭い聲を喉に殺して、唯嘯歎るのであつた。己は弱者だ、何故に弱者に生れて來た。一婦人に誘はれて墮落したのも弱者だからだ、雲衝く男に此の頬を、親にも打たれぬ此の頬を打たれて、抵抗一爲さらずに、設基督の命とは云ひながら、他の頬を向けたと云ふのは、無念とも、口惜とも、腑甲斐なしとも、情ないとも、何故打つて打つて打ち返して怨を晴らさ無かつたか。何故をめめと打たれて來たか。何故大男に生れて來ぬかと、彼は徹夜悲憤の爲に寝きらないで石油火對手に聖書を開いて、柱時計が三時を打つて、始めて場合に匹適した聖句を讀み當てた。

吾が愛する者よ其の仇を報る勿かれ、退きて主の怒を俟て。蓋は録して主の曰ひたまひけるは。仇を復すは我に在り、我必ず之を報んとあればなり。是故に爾の仇若飢なば之に食はせ、若渴かば之に飲せよ、爾此くするは火の熾を彼の

首に積なり。爾惡に勝る、勿れ、善をもて惡に勝つべし。

之を讀み畢つた彼は、神の知遇の有難さに伏し拜んだ。涙は再び泉の様に机に流れた。「我は弱者だ、仇を報ふることは出来ぬ、反つて敵の爲に祈ることならば出来る、善を以て惡に勝つ、是が弱者の本分だ」と。泣いて泣いて泣き盡して始めて起つて布團を布いた、不思議な事には、神の審判と云ふので彼に鐵拳を喰はした男は、其後社會主義の書籍に對する秘密出版の件で監獄に下されて、獄中で其の雲衝く大男は死んだ。

斯様な次第で彼は己が肩身を我から狭く感じて、早稻田大學法學士の肩書を究らなく考へ、寧ろ帝國大學の専科にでも入つて實力を附ける考へで、兎に角赤門を潜る光榮を有つては見たが、其も學資の不給で二三ヶ月で引いて了つて、難澁な年の暮に向つて。彼は牛込から本郷に轉するとき一人居ると又何んな誘惑にか、らんにも限らないと、自分で自分を危ぶんで、彼と同時に没式を受けた堀田幾太

ど云ふ青年が、神田の三崎町の里見女學校の前に下宿して居たのを頼んで、一所に元町に轉じたのである。此の男は別段學校に通つて居ると云ふのでも無く、唯親戚が立派に行つて居ると云ふので、のらくらと貴重の時間を過して居て金が有れば道具を買ふと云ふ人間であつた。和泉は其でも猶自分の様な罪人よりも、遙に上等な人間と思つて居た。年の暮に彼は五個年間買ひ溜めた書籍の大部分を持ち出して、賣る物は賣り、質に入る者は入れて、十圓許の金を作つて下宿料七圓若干拂つた、殘金を其の晩盜難に没はれた。彼は匆々大晦日に再び春木町に引轉して、堀田の羽織を借りて一月の年始を濟した。二月になつて丹波の笹山に三十五圓の教師の位置があると聞いたので、其方に幹施を頼んで、既や成る物と信じて、郷里から支度金三拾圓許を取り集めて、虫が知らせたか、其の内八圓の前金を出して安ッばい背廣の上一揃を先づ依頼して歸つた。其晩又盜難に遇つて、其餘金も悉皆取られた。同時に笹山の方は成ない事になつた。彼は茫然として

感覺を失つて了つた。年の暮から人知らず泣き通して暮して來たが、茲に至つて
既う涙も出なくなつた。泣いて可いのか、笑つて可いのか些しも分らなくなつた。
其の内に親戚に云つて遣つた他の方面の二十圓の爲替が届いたので、其で辛つと
生き返つて、殘金の五圓を拂つて、注文の背廣を取つて來た。すると彼是する内
又其の殘金を盜難と云ふ始末。乃で他の同宿の書生が騒ぎ出して、是は同居して
居る堀田なる者が怪しいと云ふことになつた。其で彼も始めて心づいた。此迄三
回とも泥棒呼はりをして自分を叩き起したのには此男であつた。『我が唯一の友は盜
賊であつたのだ』と彼は茲に天を仰いで浩嘆した。其の男も終に居たゝまらずに、
其の姉婿と云ふ人の家に遁げ歸つた。彼は他の勸告に由つて其の姉婿と云ふ人に
言ひ附けて、其の賠償を爲て貰ひに往つた。其姉婿なる人は、早速當人を巢鴨の
瘋癲病院に入れたが、賠償は爲てくれ無かつた。『あゝ是は皆神の罰だ』と彼は泣
いて諦めた。

母に打たる、稚兒が、打たるゝほど母に取り附くやう、神に打たるゝほど猶神に
依り纏るのが、弱い彼の性質であつた。今日此頃の彼の唯一の慰藉は、斯う云ふ
人の聲であつた。

吾が子よ爾主の懲治を輕する勿れ、其の譴責を受るとき、心を喪ふ勿れ。蓋は
主其の愛する者を懲めたまふ、又凡其の納る所の子を鞭てり。誰か父の懲めざ
る子あらん乎、凡の人の受くる懲治も爾等に無くば、其は私子にして實子に
非ず。凡の懲治今は悦しからず、反りて悲と意はる。然れど之に由りて鍛鍊す
る者には、義の平安なる果を結ばせり。是故に爾等瘞たる手、弱りたる膝を健
にせよ。足蹇たる者の迷ふこと無く痊されんが爲、汝の足に平直なる徑を備ふ
べきなり。

彼は夜々布団に入つて、此の聖句を默讀しては、坊主枕を濡して居た。『神は我を
知つて居て下さるのだ、』と其様言つて眠に入つてゐた。

『我は神に知られて居る、』此の一事が、彼が此一年の悲惨な歴史の中に握り得た自覚であつた。彼は此の自覚に導かれて、終に神學校入學を決したのであつた。一月以來翻譯に従つて居た、トルストイ伯の成る短篇が脱稿したので、或る人の紹介で、某新聞雑誌に持つて往つた所が、其が好い値に賣れたので、深く神の恵と云ふことを感謝して、其で二月三月の下宿料を拂つて、三月末に野田の位置が見附つたのである。

而て野田から神學校と、其様事が極つて見ると、不思議と又好位置が降つて湧いて来る。北海道の或る商船學校から三十五圓の位置を提出して来る。群馬の或る私立英學校から、二十五圓の招聘を受ける。然し孰も短期では可けない、向ふ三個月乃至五個月など云ふのである、彼は急に運の開いた氣がして、神學校の決定が早まつたと思つた。今でも其方を止めて何方へも行けぬことは無いが、其では牧師へ濟まぬと思ふ、否神様に濟まぬのだと、痛く此の不慮な考へを罰して、双

方へ自分の親友を周旋した。中に就いても群馬の方へは彼の審判の晩『神の審判だぞ』と叫んだ其人を推選した。丁度雲衝く男が死んだ後、審判者等が彼に和睦を申し込んだ曉であつたので。✓

三

枕橋から五六丁往つて、野川の堤に突當つて、又直角に轉ずる途端に、車の上から彼方、青空に塵烟の立ち騰つた東京、此方、混合つた雑踏の聲の湧く様な向島に面するのであつた。然し其も又車夫の一足一足、段々と遠ざかる。茲に始めて『自分は今東京を去りをるのだ』と云ふ感が、彼の胸に浮んで来る同時に、涙で出て行く東京が、今更懐しい心地がして、五年以前始めて新橋の停車場から足踏ごんだ當時から、今其處を出て来た迄の自分の過程、希望、絶望、罪惡、刑罰の過程が、鮮かに目の前に顯はれて、種々様々に涙を溢して行いた土地が今更離れ苦

いのであつた。其して又失敗の爲に成功の希望を捨て、我から世の日蔭者となつて東京を去る身の不幸を悲む、同時に向島に對しても、唯獨り花見群の落武者として、ポツトリと背いて來る身を、氣恥かしく思ふのであつた。

向島も東京も既に見えなくなつて又新しい感が起つて來た。東京に居た此の五年間、嬉しいに附け、悲しいに附け、故郷ばかりを慕つたものだが、今斯うして東京を去るとして見れば、更に第二の故郷に別る、心地がして、是から先は何んな處に往くのだらう、何んな人に出遇ふだらう、人間社會は何處まで廣いものだらう、と限も無い人間社會に、ポツトリと唯一人居るやうな、彼は心細い感も惹いた。同じ様な青穂の麥畑の間をうねりくねつて、意外な大河の端に出た。橋を架けずに渡船で以て渡して居る。有名な利根川だ。隅田川原で遙々來ぬる旅をしぞ思ふと詠じた古人の旅情を、彼は此處に於て感じた。郡書記と云つた様な古びたいシバチスの羽を擲げた役人に、赤子背負つた百姓婦に、口の開いた大靴を横抱にし

た郵便脚夫が向ふから乗つて來た。其と摩れ違つて直先に彼が乗つた、跡から車夫が車を引きこむ、其の後に十二三の小娘の、風呂敷包の薬瓶を下げたのが跟いて乗つた。大きな渡船に唯た三人、船頭は必ず老人に極つて居るかと思へば、此は又十三四の小供であつた。

岸を上つた堤の上の田舎町が、何とか云つた。其から其の町を外れて、堤から下りて、水戸往還と云ふ田中の小道に引こんだ。前と同様な麥畑の中を往くので、彼は退窟を瞑つて過ぎた。

眠らうとしてはコトリと尻から車に突き上げられて目を覺すことを、幾回ともなく繰り返した揚句春の日に照られた所以か、衝かうとうと夢に入つて居て、ガタリと轍を石に引かけた拍子に、ガツクリと目を覺ました。口に涎が附いて居た、此んなに睡つて居たのか知らんと、身邊を陶すと、自分は堤の上を通つて居て、正面に、建ち並んだ人家の裏面が見えて居て、此方の方に白壁造の土藏を建て廻

した、豪家と云ふ面附の一構がある。兩側の麥田の上がポーツと霞んで、空には雲雀が揚つて居る。四時の日影が、猶眩しく照り輝いて、麥田の中の芥子畑が全で陽炎の騰昇に揺いで居る。堤の嫩草が風の煽ぎにバツと香つて、其の上をば白羽の蝶が即かず離れず飛んで居る。

「此處は何處？」と思はず車の上で叫んだ。

「野田です」と片手で汗を拭いて車夫は答へた。

「然うか」と彼は郷里に歸つた様な氣がして居る。

猶一町がほども行つたと思ふと、右傍の堤下に縁に、菰の尖の出かけた池があつて、其中に田舟が一艘浮けてあつて、何處から來たのか、青鼻垂れて紐の帯を締めた乞食の子かと思はるゝ小兒が、其の舟を占領して、巧く棹で操つて居る。

「おい、おい兄さん、加藤てえ内は何處かね」と車夫が問ふと、其小兒が怪訝な顔して車夫の面から和泉の面まで仰いで見て居る、

「加藤てえ内お前知んねえけ。」

「知つてる、此の白壁藏の家だ。田圃道からでも往けらあ、でも對ふから往つた方が宜いや、眞直に川端に出て、右に折れて些べえ往つて、又右にひよろひよろ下りるだあ。」

「う分つた有り難う。」

車夫は新規に元氣を起して駆け出した。

四

檜垣を三間許も峙て、眞四角に圍んだ凡十坪餘の表庭に舍利を地面から二寸ばかりも敷き平して石灰した二階の屋の棟には銀柱の避雷針の尖が日に煌めいて、人の目を射て居て田舎には威張た家だ。「清酒五千石製造」と打つた戸柱の標札は、此の小男の膽を奪つた。

「豪い家だ」と和泉は先氣怏れして、砂礫の上に引入れようとする車夫を制して、外で降りて、先づ半榻を取り出して胸の邊の塵を拂つて、就々靴の裏で礫を踏んで進むと、内では餘程大層な計算をして居ると見えて、読み上ぐる強くて然し引かゝる癖のある聲に應じて、四五挺の算盤を弾き立てゝる最中である。彼は戸口に當つて暫時躊躇して居たが、やをら勇氣を振り起して、突と内に入りこんだ。

帳場の真中には、年の頃三十ばかりの眉の薄い、目の柔和な若旦那が、舊式の危然たる大帳簿を繰つて讀んでゐる。衆星の太白に朝すると云ふ格で、老年の番頭が二人、若輩のが二人坐向かつて、机の上で算盤を弾いて居る、其に心を取られて居て、人が來ても構い附くる場合で無い、満更氣の附いて居ない風でも無いが、些とも願みないのである。

「此が此家の客を待遇する方か知らん」と、心中に不平を懷きながら、手持無沙汰に立つて居ると内庭からからりと足駄を鳴して出て來た、髪の毛の粗い、凹み顔

の、前垂した丁稚が和泉の前に突立つて一寸辭儀して、「何の御用。」

「お宅の主人に取次いで貰いたい。」と和泉は車を下りる時から手にして居た名刺を出した。

丁稚は其を受けて、読み読み店に登つて主人の前に差出した。漸う段が來たと見えて、主人は受け取れた名刺を手にして、張場に立ちて、前へ出て來た。主人は丁稚に會釋して。

「貴方が和泉様で。」

「は、貴方が加藤様でお出になりますか。」

「う、へへえ然様で。」前とは代つて案外に頭が低くかつた。

「富岡君からの紹介で参りましたので。」

「然様でムいます乎、今月からとは申しましたけれど、然うお急ぎ下さるにも及びませんでした。然しお疲れてげしたらう、先お上りなさいまし、あコレ健、二

階の御居間を掃除せる。定、貴様お荷物ぞ。」

「は、」と健と云ふ前の丁稚、聲に應じて二階へ駆け登り、定と云ふ若者は、外に飛び出した、主人の權威は豪勢な物だ。

「入つしやいまし、」と主人に對坐する和泉に向つて、二人の番頭も揃つて辭儀した。『彼等も流石に自分の主人の師を敬ふことは知つてるんだな』と和泉は腹の中

で満足に思つた。

時候の挨拶、富岡の消息など云つてる間に、二階の掃除が出来たので、郷造は和泉を請ふて二階に上つた。十二疊二間の二階座敷、彼をして先づ其の廣濶いのに喫驚せしめた、梯子段の上、突當りに一間建て切つた、丁稚の寢室が造つてある。奥の一間の正面に、床の間と袋棚の附いたのが、彼の居間だ。真中の隔の唐紙の傍に、素木の桐の机と、紫メリスの座布團が彼の爲に備へてある。其の座布團には彼は満足過ぎて恐れ入つた。

郷造は袋棚から神田文典の第四と、ユニオン第四讀本とを出して、自分の科程を報告し、猶時間割の打合を爲して下りた。彼は自宅研學の分際には、随分進歩し過ぎた物だと思つた。或は是は前任者原元が、館を嘗めさせて居たのでは無からうかと、思はざるを得なかつた。

『もし旦那』と唐紙の外で呼ぶので、自分か知らと振り回ると例の健が彼に向つて今度は膝折つて手を着いて居る、『車夫が待つて居ります。』

『然様だ、ぢや是を遣つて貰はうと』、紙入から一圓紙幣を出して與つたが、梯子を下りようとする彼を呼び返し、更に廿錢銀貨一個を遣つて、『之は酒手だと云つて遣つてくれたまへ。……へッへッへ旦那様と云つてらあ。』

彼は俄に金持に爲たんぢや無い、兎に角位置に有り附いて、心が樂になつたからだ。

『さあて何様したもの、』と彼は其の前に越されて居る柳行李に手を着くでもな

く、唯まじまじと室内の内を胸して居たが。風と松の丸木の床柱に気がついた。
『希しい大木が使つてある。びかびかと光つて居る、金砂の壁が光つて居る、文
晁の墨畫の富士の大幅と云ふ物が懸けてある、驚いた物だ。見る物毎にあつと目
の潰れる物ばかりだ。餘程大きな家だらう、何の位の身代だらう、已に些分けて
くれれば好い。』

彼は再び座に復つて、其のふうはりとした座布團の上に、跌坐を掻いて暫時好い
氣持を感じて居たが、又徐つと障子の開放してある机の前の板椽に出て見た、其
の板椽の端が又梯子段となつて、樓下に通ずるやうに出来てる。

『は、あ成程』と感じ入つて、彼は窺つと梯子段の下を窺いて見て、小窓に泳ぐ
手拭を見て、『は、あ成程』
又引返して板椽の隔の、是も障子を開放してある窓から窺と見下せば、直下に十
坪ばかりの小庭があつて、前方半面は噴水有つた泉水が出来て居て錦魚が澤山泳

いで居る。後方半面は假山になつて居て、所々に陶器の四阿屋などが装つてある。
其の假山を隔て、新築の坐敷が見えてる。

『はあ是が例の雷親爺殿の隠居屋か』と彼は思った。すると忽ち其の反對に思ひ
出した、富岡が別嬪と云つた其人の室は何れ乎、矢張其の同じ坐敷乎、但しは泉
水の前の椽側の見えてる室か、但しは此の二階の真下か。

彼は犬が人の足跡を匂ふ状態を連想して、懼然として已を責め其して唯噴水の末
が風に揺られて動く様にうつとりとして見入つて居た。

『然うだ』と彼は愕然と夢から覺めたかの様に、『對面、對面。』

斯う思つて、彼が窓の縁を離るゝと、梯子段に黒い物、廂髪の若い女の顔が上つ
た。女中が茶と菓子とを運ぶのであつた。彼の視線に射られたので、女は顔を横
に外らした。和泉は自分の坐に返つて、端んと坐つて待つて居る。女中は彼の前
に坐つて、律義に辭義して、茶を飲んで、『粗茶でムいですが』と俯いて差出した

和泉も避て挨拶に困つて、

「是から暫時御厄介になります。」

女中の面は赤味ざして、

「何う致しまして何にもお構ひ申しません。」

「大旦那は今お在かね。」

「いえ東京の方へ。」

「奥様は。」

「お出になりませぬ。」

「然うですか……其からお前さんの名は何と曰ふの。」

「春。」

「お春さんか。」

「はい。」と女中は眞赤になつて彼を見た。

「幾歳ですか。」

「十七。」

「矢張此の村の人ですか。」

「はい」と俯向いた、耳も眞赤だ。

「然うですか」と遽と和泉は語を切つた。其を潮にお春は、

「田舎の産で、お口には合ひますまいが、何様か一個召し上つて下さいまし」と

坐に居たくまらず、遁るが如く辭儀して行つた。

「何か未だ聞く事があつたッけ」と彼は拍子抜がした、然し旨さうな「かすてい

ら」だ今日だけはお交際に一片食べよう。

彼は茶菓を濟した後に、お春の茶盆を引きに来るのを待つて居た。お春を媒介に

奥に對面の儀を申し込まうと思つたからである。

お春が幾時まで待つても來ない。

「案内無しに推参して見よう乎、冒險だ、冒險だ、奥向に案内無しなんざ冒險だ。然し何時まで待ても女中が来ないから、寧冒險行つて見よう乎。」

五

彼は戰戰梯子を降つた、直向は障子、其の内は勝手らしい、之と直角に板戸が締つてる、丁度二階の真下の室だ。其内を侵撃して見ようと窺と近よつて身を屈めて、板戸に手を掛けて開けて見ると、スーッと開いた。顔を揚げて見て、吃驚仰天、

「や是りや失敬。」

狼狽周章で、板戸を締めて、匆々に梯子段に通けついで一息吐いた「果して冒險、大失敗いや何とも恐れ入つた。」
隻脚梯子に懸るより早く、後の障子がサと開いた。さあ追兵かと愈困つて縮まつ

てると。

「先生此方へ入つしやいませ。」

「へ」と答へて、彼は此の柔い救拯の聲に取り絶つて、開いた障子の内に入つて、唯いさなりに額づいた。

此の室は障子越しに臺所に續いた食堂の又可なり廣い室であつて、此方の障子を背に、長火鉢の前に坐を占めて居たのが柔い聲の主であつた。面長の、頬肉腴かな、口許に婦人の仁を湛へた、而して金縁の眼鏡を掛けた上品な柔和な、而して又丸鬚には聊か白髪が雜つては居るが、比較的若々しく見えた婦人で、名を豊子と云ふのであつた。豊子は急しく眼鏡を取つて應對した。

「是から御厄介に相成ます、書生上りの武骨者、御遠慮なく御叱を願つて、置いて頂きたらうございます。」

和泉は出来得る限卑く出た。先刻の他方面の失禮を、此方面に詫て置く積である

ので。

豊子は何も感附か無いかの如く見せて、「此度は不思議の御縁で、此様な田舎に御出を願ひまして、先生には無萬事御不自由で居らっしゃいます。何卒、何か思召します事がございましたら、御遠慮なく仰しやつて、此處を吾が家と思し召して一日も長く御逗留遊ばして戴きたう存じます。」

「不思議な御縁、……此處を吾が家と思し召して」と云ふ睦ましい此の言葉が、二個の耳から、乾いた腸に膏を注さるゝ様に融けこんだ。彼が父母の家を出てから五年の間飢え渴いて居たのは、此の温かな慰藉の言葉に就てであつた。

「其は私から願ひます事でございまして。」

と和泉は眼を濕したのであつた。彼は今此の婦人に就て富岡は「涙の結晶」だと言つた言を思ひ起した。其の慈顔が同情の摸型に見えてならなかつた。

其から豊子は先づ主人の豪岸なことの前の教師の高慢なのを痛く厭つて居た事、今

度の教師は至極温和しい方と云ふことを富岡から聞いて喜んで居たこと、其に附けて彼の來るのを、豊子自身毎日心待ちに待つて居た事など語つて、

「而て御國は何處で居らっしゃいますですか。」

「九州筑前。」

「筑前と申しますと。」

「博多織の出ます處で。」

「あ然うですか、帯では既う昔から博多と申したもので、上州博多など賈が賈にもならない位でございまして。で茲處から幾里ほどございましてですか。」

「三百里以上です、私共の國の諺で、是から御江戸が三百里、跣足で道中が成るものか」と申したものです。

「へーえ、夫あ随分とお遠いこと、其で東京に何年お在遊はします。」
「今月で滿五年になります。」

『まあ。』と豊子は愈驚いた様子で、『其でも毎年夏休には御下向になりますでせう。』

『未だ一遍も歸りません。』

『まあ。』と豊子の驚は絶頂に達した、『學問遊ばします方は中々御氣丈で居らつしやいますこと。其でもお國に在しやいますお母様が、嘸御心配で居らつしやいますでせう。妾などは、女を東京に出して居ましてさへ、案じません日は一日もムいせんのに、三百里の遠方に、五年間もお出になつて居らつしては、嘸まあねえ。』

和泉は枯骨に肉を附けらるゝ様な思で、何とも答のなくて居る際、背面の泉水に向つた板椽から、人の足音、女のらしい足音がして、妝し立てた二十四五らしい婦人が見えた、ぱつと得ならぬ香を立てし。

『御免遊ばしませ。』

と婦人は窃と長火鉢の前に進んで坐に就いた。

『是は宅の嫁でムいます。』と豊子は和泉に紹介した。

『は、始めまして』と坐を退つて、兩手を突いて、此から御厄介に相成ます、何分宜しく願ひます。』

『何う致しまして、私共こそ反つて、』と咫尺を隔て、和泉と辭儀の頭を合はした。

和泉は空を装つては居れど、流石に忸ちて面を俯せて居る。蓋前刻彼が隣室へ入らうとして、狼狽て飛び退つたのは、宛然に此の婦人の湯上りの、血色吹いた、ふつくらと膨れた小腹が、肌襦袢を衣ようとする矢先を冒したからであつた。彼が自個の不敬に驚いたのは無論であるが、今一驚いたのは、其の瞥と彼を視下した其の顔が、東京でも見たとは思ふほどの美さで、疲肉の清らかな眉毛と、涼しい眼の均齊が、如何にも慧こさうな相好を示して居たことなので、彼

は此の希しい容貌に對して、一倍自身の不敬の罪を感じた。而して猶更に一個條の不敬の、グサと彼の良心を貫いた物は、其のふつくらと膨れた小腹が、もし妊娠の兆候では無からうか、其を自分が門外漢で居て、内の人より眞先に看破したので無からう乎、彼は今何と曰つたかを知つて居る、『初めまして』と云つたことを知つて居る。然して痛く自ら責めて居る。而して自ら咎を他に嫁そうとして居る、富岡が此の婦人に就て、何とも謂はなかつたものだからななどと。

英子——嫁なる婦人の名——の方でも、何だか極り悪るさうに、二の句が繼げずに困つて居ると、際好く勝手口から駈けこんだお春が申し上げた。

「奥様お風呂が空まします。」

英子は茲に活路を得て、

「先生はお風呂は如何でせう乎。」

と姑に聞く様に言つた。豊子は其の語尾に結着けて、

「先生お風呂召しませ、嘸御疲勞遊ばしましてせうから。」

「は有り難う存じます、」と和泉も茲に走路を得たが、先餘裕を見せて、「先づ何方か御入に成りましたら。」

「既う皆御先に失禮致しましたから何様か御遠慮なく、實は跡を御勧め申して失禮でまいりますか。」

「何様仕りまして、其では頂戴致しませう乎。」

和泉は固く辭儀して坐を立ち、障子を閉めて、始めて巳を恢復した。内には豊子の聲として、

「春やお前好く流してお上げ。」

『は。』

と元氣の好いお春の返辭が聞えて居る。

『傷める葦をも折ること無く、烟れる麻をも消すこと無し、』とは物の哀れを知つた句だと、聖書を読むたびに思つて居たが、彼は今日此の傷める葦が吾が身の上で、其さへ折らぬ人の情を、有り難い物だと思つた。彼は手早く行李のからげ繩を解いて中から、多年難艱辛苦を與にした、茶色の染が黄色に剝けた袖の袷羽織を取り出して、着替をして下りれば、お春は浴具を手にして履物を玄關に廻して、疾うから待つて居たと見えて、裏の戸を急いで出た。

『先生此方へ。』

裏庭の廣さ二百坪もあるやう思はる、其の真中に、親子の桶屋が山のやうな酒桶を逆立て、梯子を懸けて、上から繩を入れて居て、槌拍子で打込んで居る、庭の境に幾戸前とも知れず、戸を並べた酒蔵が立ち並んで居る、豪勢な物だ。其の

戸を開け放した或る一の内面の闇黒い中に、眞裸になつて、雲齋の前垂をした、節骨飽くまで逞ましく、恰も地獄の獄卒の畫を見るやうな酒師等の恐しい状態が際見ゆるかと思ふと、又何處からか其の裸鬼の一人が龜の様な大徳利を片手に引提げて、其の藏の中に入ると同時に、羅生門で渡邊綱が切り取つた怪物の其とも云ふべき怪腕が、闇黒な中から斗し出て、其の大徳利を受け取る體爲を見て、豆の様な和泉の膽玉が潰れて了た。彼は愕として心に叫んだ、『魔國だ、魔國だ、恐しいベルセブルの王國だ。』

右側の風呂場にお春が駈けこむ、折返して中から出て来たのは、六歳許の、前髪蒙つた女の子の、父親に好う似た顔の、湯に熱つたのが、乳母らしい四十恰好の女の肩から、薄暮の空に、満月のやうに差し出て居て、人懐こく和泉を見下して呼ぶのであつた。

『ちエンちエイ、ちエンちエイ、お湯を召ちまちエ。』

『其様な片言利くんちやありません、先生がお笑ひになります、』と乳母に諫められて、

『せんせい、せんせいお湯を召しませ。』

『はい有り難うございます、利巧なお嬢さんで居らつしやいますね、』と和泉も和やかに半分乳母に會釋する。

『何う致しまして、お我儘で好けません、』と云ふ乳母の言を終らせず、

『せんせい御緩くりお入んなさい。』

『お入り遊ばせでなくちや可けません。』

『お入り遊ばせだわ。』

『まあ、始末に可けないお子さんだ、此のお子さんは。』

『へいへい有り難うございます、』と和泉も笑つて内に入る。

『へいへい有り難うございます。』

『お止し遊ばせ其様な失禮な言を。』

『へいへい有り難う存じますちゆ。』

内も外も一緒に笑つた。

衣服を床に脱いで、眞裸で湯槽に即くと、髓を吹き立て、居たお春が追かけて、白い手を湯の中に差しこんで、搔き廻して、

『湯加減は如何ですか、お熱ければ温ませうです乎。』

『好い、好い、丁度好いです、』と少しは熱いのを我慢して入つた。

『お常さん可けないわ、斯んなに消しちやつて、』と聞ゆるやうな獨語を言つて、頻りと煙る寵を吹き起して居たが、和泉が上つたのを聞き着けて、火吹竹を其處に置いて、

『先生お流し致しませう。』

『ちや其には及はなすです。』

と和泉は是迄、湯屋に流させたことは殆ど無かつたので、餘り有り難過ぎて氣が退けて居る。又自分の體をお春に見らるゝが、恥しくも思つたので、サツサと自分擦りかけた。お春は小桶に湯を汲んで、

『先生其の御手拭を拜借致します。』

『好いよ好いよ。』

『でも奥様の御命令でムいませすから。』

『然うですかいそれぢや。』

と和泉は豊子の好意を以て逼るを辭るを得なくつて、尋常に手拭を渡した。

『御免遊ばせ』

とお春は冷たいが、然し柔かな掌で背の片脇を抑へる、手拭に垢擦かけて擦りかける。

『お痛うムませすか。』

『も少し烈くても可い。』

『然様でムいませすか、お痛くはムいません乎。』

『其の位で結構、久しく流さないから酷い垢でせう。』

『いゝ些とも。』

然しぼろぼろと背の垢が膝に落ちて来る、和泉は黙つて恥ぢ入つてる。

『あゝ既う宜いです有り難う。』

と和泉は二回まで言つたが、お春は止めず、十二分に擦つた上で、石鹼を附けようとする處に、誰か來て、カラリ薪を落した。

『お春さんお氣の毒さま、私代つてよ。』

とお春の引締つた口調に反對で緩ッこい聲であつた。

『好いよ、既うお了ひだから。』

『でも、お奥様がお前さんと代れつて。』

『奥様が代れッて。』

『あゝ』

『ちや代りませう、今既う擦つて了つて、石鹼を附けましてあげるところ。』

『あいよ。』

とお常と云ふ下女が、お春の手から石鹼を受け取つて流してくれた、が動もすると冷やりと氣味悪く肩を摩る物が有つた。彼が冠つて居た濡手拭の端であつた。流を濟して、好く温つて、而て體拭く拭く彼はお常なる者を觀察し初めた。お常は例の濡手拭を翳しながら、正に竈の前に跣で薪を加へて火を吹き立て、居る。火に向つて居る所爲か、面が眞赤で、其の面が馬面だ。正か富岡の親戚でも無からうが、と思つて見ると忽ち泉と焼え立つて、お常の面を全く照した。和泉は思はず笑つたが、實は同情に堪へなかつた。無論醜婦と云ふでは無い、彼の馬面に醜婦は無いもの、然し彼はお常の面から開闢時代の女の面を想像せざるを得な

かつた。

七

『嗚呼愉快、』と獨語を言ひつゝ、二階坐敷の、己が新しい机に頬杖ついて、色濃く、眠るやうに暮れゆく夕空を眺むる彼は、日頃の苦痛が、一切何處にか消えて了つて『今生れた産兒の心持は、此様なか知らん』など思ひ廻はして居る。頓て又今朝自分の身は東京に在つて、富岡の宿を尋ねて、其から午後東京を立て來た、向島を後に見なして、國を出るとき思ひもかけぬ土地を通つて、有名な利根川を渡つて、『はるばる來ぬる旅をしぞ思ふ』と言つた古人の心を偲んだこと、其から此處まで來つたことを思ひ返すと、僅か一日の中に五里ばかりの距離を隔てた吾が身ながら、殆ど一世紀も隔てたかの加く思はるゝのに驚くのであつた。東京を出離れて、遙に顧みたときは、何様な客地に往くことかど、心細く思つて居たが、

来て見れば、野邊の景色も、人の情も、依然として變りもない、吾が故郷に歸つた様な心地がして、吾が身ながら五年前の我に返つた氣持もした。奥様も善い、お嫁様も善い、お春も善い、お常も善い、皆善い、皆自分を愛してくれると、何だか自分が人の愛の焼點にでもなつてる様に想像して、恍惚として空を見つめて幽冥の奥に星一點見つかるまで見入つて居て、風と我に返つて謂つた、「何だか夢を見て居るやうだ、我は。」折しもお春は晚餐の膳を運んで來た。

『御夕飯を召し上がれ。』

お春の聲は、氣の立つて居るだけに、調子は物柔かに習つて居るが、中には自づと張がある。手強かつた流の腕前も今更思ひ反さるゝのであつた。和泉は悪くからぬ心地で、

『や大層な御馳走ですな。』

自分が褒められたかの如く、お春はサと笑顔を羞ちて、

『今晚何か致さなくては爲りませんが、何も無くて、唯有り合せのものばかりでムいます。』

其の有り合せと云ふのが有り難いのだ、鯉濃汁に鯛の鹽焼、川幸の頭に、海幸の王、其に鶏の煮染め、好物な奈良漬が副はつて居る。御馳走でなくつて何だ、而して膳の端に杯が乗つてる、お春は燗瓶を執つて、

『御酒お宜しければ、毎晩召し上つて戴きたらムいますッて、奥様のお言ひ附けでムいます。』

『有り難い思召ですが、僕は酒は徒目です。』

『でも一杯召し上がれ。』

『御免蒙りたいです、往けないですから。』

『でも一杯位お宜しいでせう、折角奥様のお心づけでムいますから。』

「然う、ぢや一杯戴きませう。」

彼は断じて辭するを得ないで一杯受けて呑み干した。

「もう一つ召し上がれ。」

「も澤山、も十分戴きました。」

と辭しては見たか、終にお春に負かされて、又一杯繼がしたのであつた。

彼は二杯の酒にほろつと酔つた、春の日長の所爲でもあり、湯上りの空腹の所爲でもある。彼は氣が面白くなつて、食事の際に、種々な事をお春に聞き初けた。

彼は先づ宅の隠居は東京の出張所に妻を置いて、毎月半個月以上其處で暮すと云ふが果して然うか、お嫁様は何處から來たのか、前刻見た女の子の年は何歳、名は何と云ふかなど、聞いて、さて、

「女中は幾人使つてあるですか。」

「私共に三人でムいます、二人はお仲居で一人がお勝手でムいます。」

「お春さんと、今一人の仲居の女中は何様な人。」

「お村と申しまして是は近在の好い家の子で、見習奉公に上つた者でムいます。」

「お村さんか、年は、」

「私に一歳上でムいます。」

「十八か。」

「は。」

「今一人は。」

「勝手の方ですが、お政と申します、随分肥つた人でムいます。」

「いや勝手元は其で無くては。」

お春は何う思つたか、にっこり笑つた。

「お常と云ふ女中は何處から來たの。」

「小金ヶ原の些手前。」

「成程、成程、然うですかね。」

「何故でムいますか。」

「何故でも無いが、小金ケ原は馬の名所だつたツけな。」

お春は突と盆を擧げて面を隠した、其の盆の裏が又赤かつたので、自分も又同じ盆の影で吹出して居た。

際から健太か竹洞の石油燈を持つて来た、薄闇かつた室が朶と明つて、疊が清へて、夜の光景を見せた、お春の面も鮮明に見えた、彼は其の面が自分の郷里の親戚の女の一人に、好く似た面だと、初から思つて居た。

八

食事を済して、二階を下りて、店に買ひ置の葉書を又買して、彼は其の東京の教會、朋友等總て肝要な交際向に巳の轉居を通知し、富岡には封書を以て禮狀を出

し、郷里と親戚へは、此も封緘書で丹波の笹山が外れた爲に、當分當地に腰を懸けること、當家の人々から親切な待遇を受けることを報じた。

彼は茲に一事の不便を感じた。此の二階に呼鈴の附いて無い事である。此は此の二階が餘り重要でない證據であると、稍不愉快な感も起つた。其して用ある度に手を鳴すか、一一自分が梯子を降りて往かねばならぬ。手を鳴して其の都度一家の耳を驚かすのも氣の毒だと思ふので、彼は今書き済した葉書と封書を持つて、又もや梯子を降るのであつた。何事にも道理を附けて満足するのが、彼の樂天主義な處で、彼は茲にも又忽ち思つた、「運動になるわい。」

「三十五圓で笹山に行くと云つて遣つた揚句、給料も言はずに、人の家に傭人同様厄介となつて居ると云はぬ許の手紙が着いたら、父や兄は何様思ふだらう乎。否金にもならん生涯ヒィヒィ云て暮さにやならん耶穌教の傳道師となると云つたら、何様云ふだらう乎。」

彼が梯子を登る拍子に、風と腹の底から起つたのは此の疑問であつた。疑問と云ふよりも寧父兄の譴責として、耳から響く心地がしたのだ。彼は今腕拱いて座に座つた。今迄の快感は夢と消えて、俄に現實の眼が覺めた。「何うも郷里に對して濟まない」。

「親から中學校を卒業させて貰つて、田舎であつても十八圓の給料を受けて首坐教員をして居た身が、今日一科の専門科を修めた曉、其の半額の給料にも當らない、將來とても甚だ覺束ない眺望だ、貴様が東京に上つて學問した所で、處世の才が無いから、今に見る扇子でも叩いて、假色でも使つて、流れて來るだらう。其よりも分家を建て、女房も持たして遣るから、田地をば小作に入れて、自分は教師で金を取つて、安穩に暮して往け」と懇々と諭した親の言をも聞き入れず、田地をば學資にしてと、強請つて、運好く上京つて學問した揚句が、的然親の意見の然り、今となつて郷里に歸らうにも歸られぬ、と云つて將來とても同じ事、既

う早三界無宿の身だ。嗚呼子を見るは親に如かずだ、自分が生んで、這わせて、立たせて、懐いて、育て、長い間頭の頂邊から兩脚の爪端まで、見抜いて見抜いて見抜いた目だもの、見損なをう筈がないと、今更感服した處で、後悔は先には立たぬ。

「我は弱者だ、飽まで弱者だ。郷黨の代議士崇拜に浮かされ、性質らしく文學でも學ぶべき所を柄にも無い政治學を學んだのが、既に弱者の誘はれた弱所であつた。學資を取り盡して、卒業證書を握つた曉、政治と罪惡、代議士と盜賊と區別の附か無い今日の政治界に居たまるべき物で無い、自分の様な小膽者が社會に出るのは、狼の中に羊の雜るやうな者で、唯他の狼の喰物になるには過ぎぬと分つて見れば、自分は立派に方向を失つた者だ。其でも構はぬ、既う此うなれば百年目だ、代議士になり得なければ、新聞記者の椅子に據つて、英國のタイムス記者の如く、内閣の作者と歌はれて、他人の手足を器械的に動かして、自個の政策を

行はしむるのも、否行はしむるのが、寧ろ政治家の能事である。其様方向を進むれば善かつた、其を富岡も言つた通り、他人ならば蹉跌とも何とも思はぬ、多寡が一婦人との關係の爲に挫折して、遂に三年の修業を水に抛つて、耶穌教の傳道師となると云ふ、是が弱者の再負だ、意氣地が無いなあ、此の我は。

『政治家となると云ふのも間違つて居る然り傳道師となるのも間違つて居る。前の決心は客氣の沙汰で、後の決心は挫折の揚句だ。孰も本心本能の默示で無い。坊主となるのは猶更だ、有體に告白すれば、弱者は女に持てる者だ。郷里でも然うであつた。東京でも然うであつた。其故に墮落をした。墮落！、郷里でも同じ事を爲て居たのだ。宗教より云へば墮落であるが、文學上から見れば自然主義だ。二十世紀の新人道だ。自分は生れながら自然主義者だ。新人道の實驗者である。自分の様な弱者は、實際是から何れほど此の新人道の犠牲とならねばならぬかも知れん。吾が血管には其の自然主義の熱血が流れて居る、否湧いて居るのだ。一夫

一婦の窮屈な舊式倫理の羈縛などに到底堪ふる者でない。耶穌教の傳道師たるより、自然主義の傳道者たる方が、我は餘程手腕があるのだ。自分が傳道師をやると云ふのは、猫を被ぶることであるが、自然主義は自個の特色本能だもの、お春でも、お常でも、基督教では到底も度せまいが、自然主義なら直ぐに度せる。ひとつ試みてんかなである。

『實際傳道者となつた曉、斷じて自然主義の手足が出ないとも限らん、其時には既う忽ち教職から放逐されて、妻子を抱へて路頭に立たなければならぬかも知れん。あゝ危ない、危ない、好く過去を推して將來を考へ、彼を知り己を知つた其上で決すべき事である。彼を知らず己を知らざれば百戦して百敗す。ハッハッハッハ、婦人に落こつた墮落者が、聖職に坐つて人を救ふ、是が何ふして正氣の沙汰か、我は既う惡魔の係蹄に籍つて居る、劔呑、劔呑。

『其様な危ない針線の綱渡をして、墮こつて、身の破滅を見ようより、正直に自分

の本能と相談をしてだ、此の最近十年五年の間に、是非とも一回成功してだ、下のお嫁様のやうなのを、自分も一遍持ちたいのだ。之が有り體な國を出るときの本願だつた、其に相違ないのである。

『然様だ、然様だ、巧く此の家に取り入つて此の家の養子になるこつた、若し其様なやうな事にでも罷り間違つて成つた日にあ有り難いな、一體此の家の娘てな何様な女だらう。』

『あ、良い心持だ、併し寂寞に耐えんな。乃であのお春が又來さうなもの床取りに些と擲擲でも興りたいが』待つ程でも無く、梯子に足音、屹と然うだと、思ひの外な大男が上つて來た、定が來たのだ。

『先生お床取りませう。』
と跣いで、起つて、床の間と直角に出來た押入から、さつさと夜具を取り出して展ぶると其儘、

『お息みなさいまし。』

と云ひ棄て、さつさと往つた。和泉は暫くアツケに取られて、茫然として居たが、何を思い注いたのか、ハタと膝打つて、

『は、あ、成程、有り難い。』

九

昨晚グッスリ寝こんで覺めた今朝、太陽は隣の寺の墓地の森の梢に昇つて、斜に明け放した窓に温かく射しこんで居る。朗かな空には香の様に霞が盈ちて居る、得も解はれぬ長閑である。森の中には雀が數多囀つてる、心空しければ、其すら耳新しく聞ゆる。

彼は今新約聖書の今日の日課に當る、『彼得前書第一章十三——十節九節を讀んだ、彼は亦鉛筆を執つて末尾の二節に條を引いた。』

蓋汝等贖はれて先祖より傳りたる徒き行より離れしは、銀や金の如き壞る物に由るに非ず。疵なく汚なき羔の如きキリストの寶血に由れることを知ればなり。

魑魅魍魎が、太陽の光を見て消滅するが如く、昨晚彼が肚裏に往來した雑多の連想は、盡く晃めく良心の前に消滅して、今は何等の痕迹を留めない。然し彼は其の連想の鎖の端を捉へて、之を手繰つて、吾が肚裏の底まで下つて、是非とも此の連想を根こぎにせねばならぬと考へた。彼は思つた、斯様な惡臭が吾が腹の中から、動もすれて蒸發し來るのは、吾が心底の何處にか汚穢の溜池があつて、其處から蒸發し來るのだから、此の溜池の所在を發見して、悉皆其の汚水と醜骸とを吐露して、其の土底から此の溜池を乾し涸して了はなければならぬと、彼は此の溜池が何處に在るかと思つて、暫く觀念の眼を瞑ちて、内面を觀じた。彼は際々斯様して宗教上の問題を考察する癖を成して居る。朝飯前で、腹に障が無くて、頭が澄ん

で、内觀の眼が何處までも見徹せる心地である。

『見えた』と彼は的然思つた。『此の溜池は外では無い、此の肉體で包んで居る心臓が其であつた。此の鮮しい血液、此の温かい血液が、取も直さず其の汚泥、別言すれば惡魔の誘惑に墮落したアダム以來の形質遺傳の體毒である。毒血である、此の生命の血潮が、取も直さず死の毒液だ。肉慾も本能も、自然主義も、新人道も、此の毒血から進し來る潮だ。』と彼は斯様判斷を下したのである。

『此の生命が自我の内非我である。本我を踏附けて罪惡を實行する所の非我である。此の生命の死が、眞の生命、即ち本我の生だ。』と斯様思つた。

『自我とは何か、自我即生命である、生命とは何か、生命即意志である。活くべき意志だ、宇宙は進化する生命である。自我は發達する生命である。自我ある人類の最初の義務、及最後の義務は何であるか、『生くる』と云ふ是である。此の『生くること』の前には、國家の義務も、社會の義務も、子の義務も、親の義務も、

何にも無い。『生るること』是が自我の不可抗の要求である。強者も弱者も生きねばならぬ、生くべき意志、是が吾が意志で無くてはならぬ、否我自身で無くてはならぬ。

『悔改めよ、是は非我の死と本我の生を命ずるのである。非我が死んで本我が生るゝ、是が基督教的更生だ。我は既に生れて居る、今更死んで、再び非我に生れ返る乎。非我に生るゝのは死に生るゝのだ。既に罪に死にし我、何ぞ復其の中に生くべけん乎』である。

彼は更に外に向つた『自然主義とは何物だ、文藝が自個の醜體を装ふ爲に、自然科学から假り來つた美名に外ならぬ。彼等は自然主義が科學に根した物だと云ふ、然し科學は何と謂ふか、彼は無感覺の礦物が進化して感覺ある動植物が出来、感覺ある動植物に進化して智力ある動物が出来、智力ある動物が進化して理性ある人間が出来たと云ふのだらう乎。然り、其から人類が靈化して天使となり、天使

から神になると云ふのだ。果して然らば無感覺な礦物から發達して有感覺の動植物が、再び無感覺な礦物に降落したらば何であらう乎、取も直さず退化であらう。感覺的動植物から發達した智力的動物が再び動物の感覺境界に降つたら、取も直さず退化であらう。之に同じくだ、智力的動物から向上し來つた理性的人類が、再び彼の猿だとか人猿だとか云ふ動物智性の中に降落したら、其は何だ、退化である、非常な退化で、人間が動物になると云ふほどの退化だ。自我を拒絶し、自我を非定し、理性も良心も一併に閉鎖して、單に汝の肉慾に返れ、自然に返れ、本能に返れと吠ゆる所の自然主義は抑も何だ、進化して天使となり神となるべき人間に向つて、犬猫に返れと吠ゆる退化論者だ。進化論は進化論、自然主義は退化論だ。何等の關係も無いのである否進化論の反對者である。自然主義は弱者の主義だ生くべき意志を有たぬ者の爲る事だ、生くべき意志、是が自分の意志でなければならぬ。我は弱者だ、自然主義の産物だ、然し何様がなして此の意志の結晶

體になりたいたいものだ。」「我喜びて自己の弱に誇らん、是れキリストの力、我に寓らん爲なり。蓋は我弱き時に強ければなり、」と曰つた様に、其様云ふ様に自分もなりたい。

『熟昨日から昨夜の我を考へて見ると、何様も弱い、全つさり人に致され、自我を没して、何方向いても頭ばかりペコペコと下げて居た。神に盟つて酒を禁じて、奥様の爲に一杯飲み、お春の爲に二杯飲んだ、我は又しても一婦人、一少女の爲に致されて居る。人が我に親切だつて、其の親切に轉けてはならぬ。人が我を愛するからつて、其の愛に溺れてはならぬ。心にも無い世辭を言つて、初心な少女の情を弄るのは、愈以て怪しからぬ。』

『既に一步を誤つた、如何とも相濟まぬ。然し未だ遠くは往かぬ、今や吾が意馬の首を立て直す秋である』

斯様考へて、未だ祈ることを爲て無いので、机上で彼は黙禱しかけた。

祈禱の間に、お春は朝飯を運んだ。彼は餘儀なく祈禱を切り上げて膳に向つた。お春は唯嬉しさうにニコニコして、時々和泉の面を見上げては、彼の言を承けようとして居る。和泉は確と意馬の手綱を引締めて、氣の毒には思ひながら、終まで真面目に待遇つて濟ました。

彼は今唯小事に打ち克つたに過ぎないが、其でも非常に愉快を感じた。而して更に其の愉快が昨日の愉快と異つて、羞辱の念を伴はぬ、純粹の快感なると感じた。彼は心の底から叫んだ、

『是が本我の生命感だ。』

十

朝飯が七時に濟んだ、彼は直ぐと外に出て、昨日通つて来た池の邊まで散歩して、歸つて見ると、郷造が二階に在つて待つて居たので、早速二時間打ち續けに、其

の英語の教授を行つた。其が濟ひと、其から直ぐと彼自身の科業に取りかゝる。彼自身の課業は、英文の舊約聖書を讀んで、其の梗概を握ることであつた。約二時間。

お春で無い、外の女中が午餐を運んで來た。色は硝子見た様に綺麗に透き徹つては居るが、皆が下つて居るのと、顔が杓子打つてるのとで、稍滑稽の感を與へるのであつた。

「は、あ是がお村と云ふ女だな。」

彼は其様悟つたので、別段にお村に向つて聞きもしなかつた。唯大家には種々様々な人が居る物だと思つひつゝ、無言で對つて、例の通二腕の代を差出して、「茶を」と一言曰つた限、唯其限で濟した。

而て又散歩をする、此の度は新しい路を取つて見ようと、家の軒に屬して右に轉じ、未だ名を知らぬ寺の墓地を左に視て、其の森の下道を出抜けた、麥畑がある。雲

雀が空に鳴いて居る、彼は風と五年前の田園詩人の己に返つて、

揚雲雀揚りて見えすなりにけり、

空に囀づる聲ばかりして。

と行つて見た、唯其れだけである、其は善とも惡とも思はなかつた。足下に一條の野川が蛇の様に曲つて野中を下つて居て、ポーツと氣を吐いて居る様である。其に架けた石橋を渡ると、路は二條に分れて居る。眞直に行けば七八丁彼方の岡に突當る、銳角に右に折るれば野川と共に例の池に溯るのである。彼は猶野池の方へと心牽かれて、麥畑の菜筆、川岸の蒲公英など見つけて、興の荒みに道草喰ひつゝ野池へと向つた、野池は昨日も今朝も見えて來た然り、水はタツブリと満ちて、菰の若葉が漣波に揺いて居る。船は有れども昨日の小兒は今日は見えぬ。彼方の隅に膠着いて居る。自分が一番行つて見ようかと思つたが、主でもないにと氣に咎められて、手も足も出せなかつた。堤を横ぎつて其の傾斜を下ると、野

池の水が堤の底をザーと此方に落ちて来る。昨日車の上から見下した一坪の大根
畠が、其の流の淀に臨んで、真白い花の影を水の面に浮して居る。
彼は此の田園の明媚な風景を蝶々に残して吾が書齋に返つた。彼は午後から夜分
の放課を宗教上、文藝上の新刊書籍雑誌を涉獵して、有らゆる思想を捜すること
に勉めて、際に觸れては批評文、反對論をも書いて、新聞なり雑誌になり投書す
る考も持つて居る。此外辯證學、教會歴史、二約釋義など云ふ専門書類を隨意科
として研究することに極めて居る。
稍三時を過る頃に、今度はお春が茶と餅菓子とを持つて來た、彼は今朝お春に恥を
搔かせたから、羞ぢてか怒つてか、既う辭退して二階に來ないかと、神經を廻し
て居たが、又來たので安心した。然し別段愛想を言ふでも無かつた。然しお春が
茶を汲んで出したので、禮を云つた、其の聲が柔かであつたので、お春は満足し
て去つた。

餅菓子は東京のと、喰て見なければ、外觀は些とも差別が無い、餡の色が濃くつ
て、如何にも旨さうに見える、然し彼は今日は其の一にも箸を着けなかつた、
茶を二杯飲んだ限だつた。
茶を引いた後二時間もすると、又晚餐になる、其が濟むと又散歩。
而て此が一日の生活であつた。此の生活を一週間も繰り返して往く間に稍内部の
事情も分つて來た。氣の毒なのは奥様の身で、生家は東京で維新前までは相應な
資産家であつたさうであるが、維新の瓦解で家は潰れて、今は細かな生活に世
を侘びて、親戚の交際と云ふことも絶えて居る様子。其して此の家に縁づいて來
られたのは、十六の年であつたさうだが、其の所天と仰ぐ今の隠居と云ふ人は、
當時博徒の首領であつて、内を外に出歩いて居られたと云ふこと。漸う精神が
固まつて家を持つと云つた處で、其の荒々しい氣象は中々失せぬ、酒を飲むで酔
加減が善くないと、刀を引抜いて奥様を切ると云つて追ひ廻る、傍の者も危くて

手の着け様の無いと云ふ始末であつたさうだ。其が漸々年の所爲かして薄らぐと
今度は妾を東京の出張所に蓄へて、一個月の内二十日は其方に暮すと云ふ事になつた
奥様の境遇は愈果無くなつたのである。夫に其性質が彼の通り温順しい方だから、
一倍痛ましく思はるのであるさうだ。大家の内には、色々な事情があるもんだと、
和泉は今更世相の複雑なのに感じ入つた。

十一

斯うして日が経つ内に、段々と家内の人々とも、樓上樓下と隔たりながら、呼吸
の通ふほどになつて、遂には御機嫌伺と云ふ様な口實で、老母の居間に親しむや
うになつた。或る朝彼は主人の稽古に来るのを待て居たが、一向に見えないので聊
か待ち疲れの氣味で、我から二階を下りて店に出て見て、主人が外出して居る
ことを番頭に確めて、又二階へ上ろうとする後から、若い光澤のある聲に呼れた。

『先生入つしやいませいな。』

『有り難う存じます。』

『入つしやいませ』と、今度は老母の聲であつた。

『御邪魔では無いませんか。』

『まあ御話し遊ばせな。』

『ぢや御免蒙りませうか』と、及び腰に障子を開けて、遠慮めかして窺と入つた。
長火鉢の鐵瓶には、「ツーンツーンと湯氣が鳴つて居て、豊子と英子と例の如くさ
し向つて居た。英子は恒する如く、左の口端を引下げて、笑ひながら、和泉の面
を遠と見て、又火鉢に向いたのであつた、其を見て和泉は既ら自分の棚下が初まつ
て居たのだなど、胸に思ひつゝ、眞面目な顔してキッチンと坐つて、

『不斷御無禮ばかり致して居ります、』

豊子は持て居た煙管を置いて、

「相變らず御忙しくて在ッしやいますか。」

「へー先日から少々書き物を初めました處が、此節は何だか身が入り過ぎましてツイ碌々伺ひも申しませんで。」

「何様致しまして、恐れ入ります。ですが、先生は大層勉強家で在ッしやいますので、忤も大層感心致して居ります。然し餘りお凝遊ばしたら、お體に毒でムいませう、偶には御酒でも召し上つた方が。」

「先生些も御酒を召し上りませんですのね、全くお厭て在しやいますか」と、英子は母の言の畢るも待たず口を開いて、「變ですわねえ若い方の……。」英子の刺戟に興の注した和泉「イエ全く厭ではありません、是でも宴會の席などでは無理に吞めば、二合や三合は行りましたものですが、少し譯がムいまして、唯今禁酒致して居ります。」

「何様云ふ譯で、」と英子は直ぐに突込んだ。

「實は」と酒の害を説き出さうとして和泉は不圖此の家の職業を思ひ起して、「然うです、腦病を患ひましたので。」

「何だか怪しいぢやありませんかねえ阿母さん。」

「イヤ實際一昨年腦病を患ひました、其は事實でムいます。」

「其うですか、」猶何うだか信せられんと云ふ顔附。

「イエ御酒上る方はいけません、妾はモ一モ一大厭ひ、」と和泉の辨護を兼ねた豊子の述懐。

「僕の母も然様申して居ました、酒飲は女泣かせだッて。酒の座の夜深しをしみじみと怨んで居ました、父初め親戚が皆飲みますんで。」

「阿母様の仰しやる然り、宿でも随分長座でムいますから、困りますよ。其に飲べますほど當りが酷くなりますから、本當に女泣かせでムいますよ。然う申せばね先生、宿の氣前を好く御存知遊ばして戴きたいんですよ。知ら無い方にや實に

氣の毒なやうでムいましてね、言葉をかけられても空ばツクれて、些とも相手に
なりませぬの。彼様情なく作なくともと、傍から黙つて見て居られない程でムい
ますの。其様いふ人でムいますから、決してモウねえ、何んな無禮を働きました
も。御氣にお留め遊ばさない様にして下さいませよ。』

『ねえ先生、御酒を上ると陽氣になつて好いちやありませんか。』

『夜分少しづゝ位お上り遊ばす位は、御身體の薬でムいませう。』

『實に御厚意に背きますやうでムいますけれど、』と和泉は困つたと云ふ面相で、
『酒と云ふのは、昇昂性と申しまして、一盃が二盃、二杯が三杯五杯となるもの
だから全ツきり止した方が可いと、醫者に申されましたもんで。何、是で體格さ
へ宜しければ、随分辭さない方でムいますけれども』と、差し障りのないやうに
答へた。

『既う其に越した事はムいませぬ、酒は本當に善くムいませぬ。』と身にしめて豊

子は答へた。

『先生其ならお菓子宜しいでせう、』と英子は忽ち問題を取り替へた。

『ほゝゝ、色々お怨がムいますのよ。』

『え』と和泉は驚いたと云ふ體。

『イエね、實は何を差上しても、一個も召し上つて下さらないんで、勿論田
舎の産でムいますからと思ひまして、東京便に頼んで、彼地から取よせまして上
げましても、其でも些とも召し上がりませんから、何を差し上げたら召し上るか
ツて、毎日其で困つてますの。』

『先生何がお好で在らッしやいます、』と云ふ英子の語が、柔かく出た積で骨が立
つた居た。是は意外と云ふ面相で和泉は、『是は相濟みませんでした、實は僕は胃
が弱いで、小兒の時から一番好きな餅菓子を、國を出ます時からサツバリ禁じて
居ますので、其で何も戴か無いのでムいます。而して御親切は既う毎日戴いて居

ますどころでは無いと。然し其の實を前以て申し上げませんでしたので、實に相済みませんでした。」

『あら然うなんですか先生。』

『其う云ふ譯で無いと。致方も無いと。然し本當に然様で無いと。』

『其の證據には毎日三度の食事を戴きました後に、必と散歩に出かけるので、店の人にお尋ねになれば分ります。』

『本當に然うで無いと。必と三度降つても照つても、』と、英子も言色を改めて、母に語つた。

『感心で在ッしやいますのねえ貴方、お若い方の儼と其うお極め遊ばしました然りに、其の然に遊ばして、御身體を大切に御持遊ばすのはねえ。既う既う決して御無理を申しません、御安心遊ばしませ。……でもねえ先生、女と云ふものは究ら

ないことを心配する物だと、可笑しく思し召しますでせう、』と豊子は和かに笑つて、光つた眼鏡を仰向けて和泉を見た。

『何う致しまして、』和泉は痛み入ると云ふ體で、『種々御深切にして戴きますので、僕は國へ歸つたより猶嬉しいと存じて居ります。』

最後の一言が、極めて眞摯であつたので、二人の婦人は、満足以上の感動を示した。豊子の如きは眞實氣の毒な方と思つて、眼の濕んだほどであつた。

『既うお歸りの頃で無いと。二階に還つて待つて居ませう、』と和泉は尻を擡げようとする。

『まあお宜う無いと。』と豊子は和泉の飲み干した茶碗を執つて、『何様で今日は正午までは歸りますまい、人と伴れ立つて出ましてすから。今日こそ緩くりお話し遊ばせ。』

『御差支は無いと。』と氣つかはしげに他の面を見る。

『え、へ些ども、先生さへ御宜しければ、』と豊子は煮花を再び和泉に出した。
『御差支さへムいませんければ、』と擡げかけた尻を和泉は再び下した。

十二

和泉が煮花を戴いて飲んで居る間に、英子と豊子は互にホ、ラ笑つて語つて居る。
『彼事を次にお聞き申して見ませう乎。』

『何事。』

『彼事です、彼の、其れ前刻の彼れを。』

『あゝ』と答へて豊子は面を和泉に向けて、『でも餘り先生をお攻め立て申すやうで、お氣の毒ですわ。』

『何ですか』と和泉は何だか氣味悪るさうな、面白さうな、而して嬉しさうな感が、一時に胸に躍つて、早我から應戦しようといふ覺悟で、他を誘ひ出すのであ

つた。

『お聞き申して見ませうね、』と英子は母の面から和泉の面に眼を轉じて、『あの先生、どニヤリと例の口端を笑つて、『先生は土曜日には必と東京に御返りになりませぬ。』

『へえ』と和泉は何んな疑問が湧き出ると、十分心構をして居る。

『先生其様初終中東京に御用がお在なさいませうか。』

『へえ。』と和泉は畧當を附けた。

『いつそ原本さんの様にお連れなすつた方が善いぢやありませんか、ねえ阿母さん。』

『何でムいますか。』と分らぬ態で澄して居る。

『何で在ッしやいます方をさ。』

『仰しやる事が僕に一向分りませんです。』

「お分りになりませんか、困りましたねえ。ぢや申しませうか。」

「何様ぞ」と和泉は飽まで謹聴の體。

「あら先生厭でムいますわ、彼んなに空を切つて居らしつて。……先生、東京に奥様を置いて在ッしやませう。」

「又始まりましたせう、」と豊子も機嫌よく笑つて見て居る。

「何うです然うでせう、」と英子は愈詰めかけて居る。

「是はしたり」と和泉は始めて疑問が分つたと云ふ態を見せて稍面を赤く笑つて

「何事かと思ひましたら、其様な物は何も無いです。」

「何だか何様もお在りなさりさうですね、」と豊子は煙管を取り上げた。

「お在りなさいませうとも、妾既う儼と知つて居ますッ。」

「然様でムいますか、僕些とも存じません。」

「ぢや然様ですか、御存知ないんですか先生、可笑しいねえ阿母さん、……ぢや

妾申しませうか。」

「えへ」と平氣に答へながら、若や前に婦人と關係した事でも既に知れて居て、其の婦人の名前でも、公に提出せらるゝので無いかと、胸の中はヲドヲドして居る。

「先生、先日東京から婦人の手紙が参りましてせう。」

「コーッ」と和泉は一寸頭を傾けた。

「ほらねえ、阿母さん怪いでせう。」

「然うだねえ」と豊子もブツと煙草吹き出して笑止だと云ふ面附。

「先生其れ、麴町、三番町の。」

「うむ、うむ、あの箱田鐵子と云ふ女ですか。」と和泉は實際始めて氣附いた。

「其の方、貴君の御許約でせう。」

「成程、其のお疑は御最、彼れは僕の朋友……、」

『でせう、御交際になつてる。』

『然うです。』

『だからいつそ呼んでお上げなされた方が、幾何お嬉しいか知れやしませんわ、時々お出になるよりはさ、ねえお母さん、然うぢやありませんかねえ。』

『然うだともね。』と豊子の相槌。

『恐れ入りました。其の箱田鐵子と云ふ婦人は、唯僕の親友です。』

『其して交際して居らつしやるのでせう。』

『然様。』

『ですから何うせ既う御一所にお成りなさいますんでせうもの。』

『ヤ是れは弱りましたな、僕の申します交際は、普通の意味の交際でムいませうので、當時男女の學生間に流行して居ります、深い意味の交際ではムいませうので。』

『おや然様でムいますか、何様だか分りませんねえ。』

『勿論僕等は基督教信者ですから、』と云ふ言は咽まで来て居るが、富岡の一言が耳朶に在るので、其が言へない。随つて潔白な交際の證明が、遽と出来かねるので和泉も大に困つたと云ふ體で、

『然うですな、御疑になれば辨解の作様もムいませんねえ。』

英子も『其ぢや其うかも知れん』と、胸の中に言つてる様であつたが、忽ち又口を開いて、『其でも先生、其の目的で御交際なすつて在ッしやるのでせう』と得意な面を笑むのであつた。

『然うですな。』と和泉は愈眞面目に考へこむ體、『若し僕に誰も来て與れ人が無く、彼の婦人も縁遠くて居るのでムいしましたら、終局は其様云ふことになるかも知れませんけれども。』

『でも其の方は手もお立派ですし、定めて學問も澤山と出来て在ッしやる方なんでせう。』

『勿論其の方では申分は無いですがね。』

『何處かお厭と思し召す所でもお在りなすつて。』

『面と心が餘り男優りでムいしますので、何様も僕には元氣がありませんな。先方でも然うでせう。』

此の時まで和泉の辨解を、氣づかわしげに、黙つて聞いて居た豊子の面が微笑を畫いて、『如何に學問がムいまして、女と云ふ物はヤハリ女らしくムいませんではねえ。』

『然うですとも、』と答えた和泉は忽ち自ら心に愧ぢた。彼の頭腦には、墮落の記憶が未だ鮮しいので、婦女の是非など言ふ資格は無いと感じたので。

『ぢや先生全く奥様は在つしやらないんですか。』

『然うです。』

『ぢや妾が御周旋致しませうか。』

『宜しくお願ひ申します。』と和泉は笑ながら丁寧に辭儀した。

『ぶツム、宜しうムいます。』

『難しい物ですね』と、豊子も黒い齒の見ゆるまで口開いて笑つた。

此時表に『ゆうびーん』と言ふ聲が聞へて、バタと疊の上に音がした。同時に健が其を奥に取り次いで、『へい郵便でムいます。』

『あ、寫真だ、吉野さんのですか。』

『吉野んぢやない、蠣殻町からだよ』

十三

『吉野』と云ふ一語の勢力が和泉の腦髓に電火のやうに閃いた。此の名前の女が富岡が前以て話して居た神田の里見女學校に居る、『庇髮の別嬪』であらうと、斯様思つたのであつた。然し『吉野』で無い、蠣殻町から』とは、言はずと知れ

た東 京出 張の隠居を云ふのだらう。其にしても可い、此の寫眞を潮に、お近附の爲と云ふやうな理由で以て、一家族の寫眞拜見を願ひ出ようと、咄嗟の間に心を極めた。

其の間に豊子は丁寧に封緘の紙捻を解いて、中身を引出して、表被の薄葉を披いて、『どうも相變らずだねえ』と其を英子の手に渡した。

『まあ』と英子は白い額に眉皺を寄せて『何故斯う恐くお寫りませう、寫眞だけにでも猶と柔和になれさうなものですのにねえ。』

『寫眞屋だつて、闇魔様を地藏様にすることも出来なからうから、』と豊子の口から始めて狂言らしい言を聞いたと、和泉は思つた。

『模型が模型ですからねえ』と英子の相槌もハイカがつて居た。

『一寸拜見、』と和泉は英子の手から、手に觸らぬ様に寫眞を受けて、『へへえ成程。』

『随分嚴い面です』と豊子。

『成程へへえ』と、和泉は何様頭を役しても御世辭の出ないのに困つて居る。『へへえ。』

『何様でいます先生』と、英子に追窮的に問ひかけられて和泉は愈困逼して、

『何とも何うもお豪いお面です。』

『ッ、』と舌打して英子は『豪いでせう。』

『どうも豪くて困ります、』と豊子が後を引き取つたので、和泉はヤツと重負を卸した心地がした。

『春や、居ないか、』と豊子は優しく呼んだ。

『は。』

『寫眞函を持って来てお與れ。』

『は。』

『占めた』と和泉は胸で語つて居る。

千代紙張の手函を持って来たお春は、膝折つて其を差出して退つた。

『一ツ、前のと比べて見ませう、』と豊子は函を膝の上に取りつて、中に堆高く重なり合つた寫眞の中から、一葉を擇り出して、其の函を英子に渡す、英子は自分と和泉との間に置いて例の引下口をして。

『先生、一如何です御覽なすつては。』

『澤山なお寫眞でムいますな、拜見しても宜うムいませうか、』と勿論彼は其の快諾を豫期して聞いて居るので。

『え、え』と豊子は嬉しさうに、『瓢男だの御多福だの、展覽會でムいますけれど、何うで一度は御覽に入れる積でしたから、何うか御笑覧なすつて戴きます。』
『ぢや今少と廣がりませう、』と英子が少し坐を退く。和泉も應じて後に下がる。
函が覆されて寫眞が一堆疊の上に出て顔る。豊子も長火鉢の前から擦り出し

て來ると云ふ騒であつた。

知らぬ人の寫眞と云ふ物は、一向興味の無い物である。然し和泉は然う思はなかつた。彼は東京を出て此の地に來たのが、非常に遙に故郷を隔てた心地をして居る。此の地に來て、未知の人を見る毎に、人間世界は何處迄廣ひ物か、人は一代の中に、何程多數の人と接觸する物であるか、と云ふやうな感が胸に斷えぬのであつた。今更に此の寫眞に打ち向つて、取り上げて見るほどの面が、皆無縁の他人ばかりであるので、他郷他人の感慨か、又一層嶄新に湧くのであつた。其から又此の多數の無縁の面の中に、其の目的の一葉が必ずあると確信して居るので、其の一葉の爲に、無数の寫眞が凡て意味を持つて居ることも事實であつた。然れば此はと取り出て、曰ふべき顔面に出會へば、一々煩を厭はず、英子の説明を求めて居た。其處に他の女の聲が遠慮なく挿しこんだ。『まあ大層なお寫眞だこ

是は此家の通番頭六助の妻、お山と云ふ四十年増、毎日二度位は此の家に出入する女であるので、和泉は好く知合つて居た。其の面の皮剥いた様な光り方から言葉使のぞんざいな事から、到底素人ではあるまいと和泉は見居た。

『おや是は今度参りましたのですか、まあ恐ろしい畏いお目附、新しく光つて居る所爲か、一等お睥睨が利いてまさあハッハッハ。』お山は唯一人元氣で、取つて見る寫真毎に、何とか批評を試みて居る、人の管はないのも管はない。

『是は如何です、』と英子は一葉を和泉に與へた。

豊子は前刻から面を寫真の堆の上に下して、一葉一葉見ては棄て、一向に搜して居たが、辛う見附出して、『茲にあつた。』

お山は忽ち頸を其の方に轉じた、

『其のお嬢さんの好いことつたら、女だつて惚々しますわ、目が嬌やがて、口許が緊つて、何とも云へない笑顔して在らしつて、今にも何とか仰しやりさうなの

而して今が御嫁盛で在らッしやるわ、此の方の御智様は、何處にニコニコして在しやるでせうねえ。此様な奥様を持つ方には、澤山と奢らせたいものでムいませわねえ。』

豊子は其に乗つたでもなく、靜かに笑つて、『もつと別嬪だと善いけれど、親が悪

いから作方が無いさね。』

『アレ、アレ先生さんは前刻からお嬢さんの寫真に見されて在ッしやる、ソレ涎が落ちますよ先生さん。』

『ハッ』と和泉は面から耳まで燃えたつ様に感じた、『是がお嬢様で居らしつて。』

『おや、おや先生さん空はツくれが御上手なこと、何でも先生で在ッしやる。』

『いえ御存じないのも御無理はない、まだ一寸も御目にかゝら無いから』と豊子は氣の毒さうに和泉に向つて『いえねえ是が忤の妹で、今學校に居るのでムいませ。今妾も此の子の寫真を見て居ましたところ、お山が妙な事申し上げたもの

だから。先去愕りなすつて在ッしやる。」

『何と仰しやいます方で、和泉は心に察して居ながらも素知らぬ體。』

『吉野と申しますの。から一向の寐ん寐でムいます。』

和泉は此の婦人に就て、富岡と語つた當時の状態が目前に浮んで、思はず留息漏したのである。

『おや、おや先生さん留息して在らつしやる、』とお山の脱がさぬ攻撃に遇つて、胸の秘密が丸抜きに見出された心地で、危ふく立場を失はうとする處を、英子が巧く間を合はせて『是が其の人の姉で、東京の小石川に參つて居りますのです、別嬪でせう。』

英子の手から寫眞を受けて認めると、眼附に劍があつて、頬肉が殺けて居る。美しい面ではあるが、愛嬌が乏しいのであつた。而るとお山が、又『先生さん其のお寫眞と下のお寫眞と一寸何方が宜うムいますウ。』

和泉は全くお山に看破られて、愈手痛く攻め附けらるゝので、大弱りに弱りこんだ。

『然うさねえ。』

『お多福の兄弟だもんですから、先生がお擇取に困つて居らッしやる。』

『先生梅と櫻でせう。』とお山の一言評畢るや否『アレ、アレ』と、毛立たましい須摩子の聲。『アレ』黒が錦魚を喰べて、アレ、誰か』と乳母の聲。和泉は素早く飛下りて、猫を追かけた、猫は驚いて錦魚を置いて、新座敷に向つて遁げこんだ。其の錦魚を手早く掬つて池に入れると其の錦魚は今の危難も知らず顔で、尾を振つて泳いで居る。

『何様も有難うムいました。』と豊子が謝辭を述る尾に附いて須摩子、『何様も有り難うムいました。』

英子は早速お春に命じて、金盃に水を取らせ、和泉の前に差し出させた、豊子は

氣づかわしげに、「貴方御み足をお痛になりや爲ませんか。」

『どうも致しません。』

英子は足を拭いて上がる和泉に禮を曰つて、

『厭な猫だねえ鼠は捕らずに、』

『錦魚を捕つてねえ』と須摩子は乳母と入つて來た。

十四

其の三日の後であつた、和泉が例の午飯を食へ濟まして、お春が丁度膳を引かうとする途端、門内の砂礫を碎いて、氣立たましく駆けこむ車の響に、お春はピツクリして、膳を置いたまゝ、駆け下りた。

『お歸り』と帳場から臺所まで、一同出迎つて居るらしく、其の聲が駭雜であつた。尋て家鳴のするやうな足音が店から主屋の方に越くと、又ゾロゾロと多勢が

其に續く様子。和泉も無論家の隠居が歸つたのだと思つた、忽ち突如の大聲。

『こ、こ、此の然の汗だ、日中は既う到底も徒目だ。』

成程、破鍋を敲く様な音聲、雷の激した様な調子、是が彼の老偉人が語る方法だと彼は思つた。

其の内にお春が再び膳を退に來たので、問ひて見ると果して、「大旦那の郷歸でムスませす。』

『いやあもう何奴も此奴も河童の屁だ』と、度外れた大聲「海陸軍が彼れほど立派な勝利を爲て居て、其で談判でスツカリ行られて、鑓錢一文の償金の取れねえで、賞與金ばかり出すは出したが、與れる金が無えてんで、増税とけつかる。内閣だあ、帝國議會だあ、政友會だあ、進歩黨だあ、大きな面しやあがつて、何奴も此奴も河童の屁だ、何の役にも成りくさらねえ。造酒家一般大迷惑だ。ええ』と正に政府の増税に對する餘憤を漏して居るのであつた。

其の内に段々感情も和らいだと見え、老偉人の聲も段々と低うなつて、遂には一日の挨拶も濟んだと見えて、全く窶りとなつて了つた。

『今度は自分の番である』と斯様思ふと一種不愉快の感が和泉の胸に起るのであつた。彼は前刻砂礫を引いた車の音に、既に小膽を抜かれて居る、其癖人に屈することが厭である、彼は先づ斯様思つた、『自分は此の家に養はれては居る。然れども是は給料として食つて居るので、何も此家の恩義を受けてる譯では無い、番頭や店員とは譯が違ふ』と斯様思つた。

然れども又『然し番頭や店員と何様違ふか、彼等が雇人なら、自分も雇人では無いか。彼等も給料で食つてるし、自分も給料で食つて居る。何も違ふ所は無くないか。』と理つて見て『否然様で無い、店員と教師とは、天地霄壤の差がある。自分は此の家の主人の師である。主人は即ち吾が弟子である。主人が吾が弟子であつて見れば、老偉人だつて誰だつて吾が弟子の父だ。彼より來つて我に敬禮

を加ふべきが當然である。我は此の家の賓師である、然り我は賓師である。

『然し彼より來つて其の子の賓師たる我に敬禮を加ふるか何様であるか、勿論來ないに極つて居る。來無ければ其で可い、彼は賓師を遇するの道を知らぬのだ。』と彼の胸中が俄に激し昂つて來た途端。

『ハツクシヨ』

土臺から震動しさうな嚏が下に聞えた。和泉の勇氣がケロリと抜けた。

『困つたな、我が彼に屈する何等か好い口實、否道の有りさうなもの。』

『はッはッはッは何も然様理窟張る事は無い、有り様が雇人である、番頭は下等の雇人で、自分は高等の雇人である。恰も其の置かれた居間に上と下との差のあるだけである。唯其だけの差あるのみで、均く雇人であるだから、雇人らしく、唯高等なる雇人として、其の雇主に挨拶すれば可いのでは無いか。其が平たい當然では無いか。否、否、自分は其様な俗論で此の頭を屈することは出來ぬ、師道

を辱しむるのである。師道を辱しむる、此れ吾が忍びない所である。……コーツと何か他に自分が彼に下るべき切實至當な道理は無いか知ら。……いや有つた、犬に有つた、彼が老人であると云ふ此の一個の大理由があつた。確か聖書にも教へてあつた。』と彼は聖書を開いて前後に繰つて、茲處だ茲處だ、「老人を責むること勿れ、之を父の如くし云々。」是だ、老人は父である、父として尊むべきである老人の前には師道も賓師も無い。唯子たる義務の存するのみである。此が我が彼の老偉人に下るべき至當の道理である。

『然様だ然様だ』と俄に起つて往うとして、『待て然様狼狽へて往つた處で、何と言ふか此方から、何様丁寧に出ても、空ばツくれて構ひ附けぬ時は何様するか。ペコ、ペコと二三度も頭を下げて退き下がる迄のこと乎。然し何故然様此の頭をペコペコと下げねばならぬ乎。彼は唯其の富を誇つて居るのだ、「不義にして富み且貴とからんは丘が恥つる所なり」と孔子は曰つて居る。彼の老偉人は何である

か。之あつてより以來、國も亡ぼし、家を滅し、身を滅し、魂を滅したる者擧げて數ふべからざる所の、彼の狂水を造つて、其を賣つて利を儲けて、而して富貴に傲つて居る。彼は果して何物である乎。

『惡魔だ、惡魔だ、惡魔即ち彼の名である。彼若し基督に遭遇したらば、眞先に其の詛を受けて、彼を十字架に釘くべき者だ。眞に然りだ、彼若し其の營業を以て人の靈魂を滅す罪惡の恐しさを知つたら、胸を打つて悔ひ改むべきものである。眞に然りだ。……然し我は其惡魔に食はれて居る一個の寄生蟲では無いか。』

『あゝ世の中が熟く厭だ。』

『何、然様ぢや無い。自分は惡魔に食はれて居る。然し惡魔の爪牙ぢや無い。自分は何も彼等の道に阿つて、一毫も取つた覺は無い。なかに我は吾が道を以て彼等に臨むで居るのである、何の疚きことか有るツ。我は文字の師としては來て居れど、若も機會があつたら、基督を傳へようとして居るでは無い乎。我は惡魔の爪

牙でない、決して悪に負くるを用ひぬ。善を以て悪に勝つべき者であるのだ。彼は不義の富貴を以てし、我は基督の道を以てする、吾が低頭が徒勞になつても、何等管することでは無い。我は吾が道を盡して居る、宜し。』

彼は慨然として起つた、やをら梯子段を下りようとする矢先、

「ハツクシヨ」

彼は再び度膽を抜かれた。彼は周章して、坐に返つて太息吐いた。

『我は餘程の馬鹿である。我は原來罪の爲に社會を失ひ、往き所の無いのに困窮して居た身では無いか、其の困窮の間から拾ひ上げて、此様な屁理窟の云へるやうな、有り難い身分に爲して與れたのは、皆此の家のお蔭では無い乎。此の家とは誰である、即ち此の老偉人で無い乎。此の大恩人を捉つ掴まへて、惡魔呼はりすると云ふのは、勿體ないとも、空恐ろしいとも、言はうやうも無い忘恩者である、人非人である。あゝ神よ罪人なる我を憫みたまへ。……全體我は人を見れば

敵と思ひ、已に勝る者を見れば、強ち之を忌ふたり、然も無ければ強ち之を凌がうとする。何様も是が胸の狭い、膽の小さい、心の弱い何よりも證據である。恩人を恩人と崇がめて、其の恩義を感謝して、恩人が誇るなら誇らせようし、高ぶるなら高ぶらせようし、對手を對手の爲るまゝにして置いて、自分の分を盡すに於て、何の疚しい事があらう、又眞實人の恩義を感じて謝しようとする者に、誰か然様非禮を加ふる者があらうか。人の懐から鬼を出すも佛を出すも、皆此方の心一にある、我は何たる馬鹿なんだらう。

『本當は自分が面會を乞ふと云ふことを通じて、先方の都合を聞いてか、若くは老母からでも紹介して貰つて、其上面會すると云ふのが順序でもあり、自分の利益であるでもあらうが、何も然様廉目を立つるに及ば無い。雇人の一の如く、往つて挨拶を爲て來よう。其で自分に澤山だ』斯様卑だつて正直に神妙に梯子を下りた。

「御免」と静に主屋の障子を開けた。老偉人は直ぐと鼻先に大極柱の根に曲膝かいて、金魚に鉄を裂いて與つて居る。和泉はハツと其の尻に向つて額いた。實は此の坐で都合好く老母の紹介を乞ふ積であつたが、忽ち度を失つて了つたのである。老偉人は錦魚に氣を取られて居たのか、聞ても聞か無い態して居たか、更に省みないのであつた。火鉢に附いて居た豊子は、此の體を見て氣の毒と云ふ面して、

「アモシ、先生が御挨拶に見えました。」

此の聲が耳に入つたかして、漸う此方向いたので、和泉は再び辭儀をして、

「僕が和泉と申します未熟者で……此の間御不在中から御厄介になつて居まして

……」

老偉人は和泉の頭の頂邊から、膝小僧まで見下して、小ばけな男だなあと云ふ面相だ、

「御前さんが先生さんですかい、」と言つて、暫くして又「未熟な倅ですから宜しく頼みます。」

と云つたッ限り、又錦魚を見て居たが、再び突と振り回つて、

「何様です御前さん酒飲みますか。」

「至つて不調法で。」

「然様ですか、ふうむ。」

老偉人が未だ何とも二の句を繼がぬ内に、裏口から乳母に負はれて歸つて來た須摩子が、

「オ、お祖父ちゃん、お祖父ちゃん。」

と疊の上に降るや否、ガラガラと金着の音急がしう老偉人の前に駈け附けて、バツタリ膝と手を附いて、「お祖父ちゃんお歸り遊ばせ。」

「オ、須ウちゃん、須ウちゃん、どれ祖父ちゃんが懐こしう、どうれ、」と老偉

人が打つて代つた猫撫聲で、『お、重くなつたぞ、音無しかつたの、そら錦魚が
麩を食つて居ますよ。』

『あ、面しろい面しろい、乳母も来て御覽、錦魚が小さい口開いて、麩を食べて
る、佳愛いこと……お祖父ちゃん、此の間ね、家の『黒』がね、あの『一番大い錦魚
を取つてね、食べようとしたところをねえお祖父ちゃん、彼の先生が『黒』を追つ
て、錦魚を助けて下さつたの、だから好い先生でせうお祖父ちゃん。』

『うむ然様か好い先生。』

『お祖父ちゃんお土産は、』

『お嬢さん可けません、御行儀の悪いお子よ。』と乳母が笑つて額で睨める。

『須ウちやんのお土産が新座敷に澤山待つて居ます、さ新座敷に行きませう。』

『はい、はい、さ新座敷に行きませう。』

と須摩子と老偉人と、手を取つて、和泉に管はず新座敷に往つて了つた。後に豊

子は汲んだ茶を和泉に出して、老偉人の摘んだ後の甘味を、一摘んで當がつて、
媯やかに、

『失禮ですが一つ召し上りませ、ねえ先生、あの然の吾儘者ですよ。でムいます
から先生無御立腹でもムいませうが、彼様云ふ人だと思し召して、御氣に留め無
いで載きたいのでムいませう。其でもねえ先生、彼れで先生に餘程優しかつたん
でムいませう、前の原本さんにツたら、其れは其れはお話にならない位、痛く當
つたものですよ。』

『ほんとにねえ奥様』と乳母の相槌である。

『然様でムいませうか』と和泉も今重荷を下して、好い疲勞心地と云ふ體。

『妾も今日は本當に安心致しました。』

和泉は今鬼の首でも取つたと云ふほどの誇を抱いて、吾が坐に返つた。「全さ愛は懼を除く、」と云つてある然り、愛する者に敵の無いと云ふ感が、心の底から湧いて居る、二十分間の苦勞は、消えて跡形も無いのである。

彼が満足の眼星は酒造家である老偉人が、「酒飲みますか」と云ふ壓制的質問に對して、決然たる非定的答辭を與ふことが出来たと云ふ、此の一事であつた。勝利の勝利、新生活の門出の功名は是だと、自ら十分誇つたのであつた。

彼は彼の老偉人が、既に吾が物の様な氣がするので、其の言貌を眼の中に畫き初めた。彼は前に此の老偉人の「何とも何うも豪い」面を、寫真では見て居たが、其の實物の己に對するのを見た所で其の面が始めて本當に見えたのである。彼は先其の長面に驚いた。富岡君と云ひ、此の老偉人と云ひ、此の地方に馬面の多いのは妙だ。而し此の馬面と云ふものは、決して馬鹿を意味して居らん。昔希臘の黄金時代に、第一等の政治家であつたペリクルスは、實に馬面の尤である。往に劇

界の雄であつた市川團十郎、彼も亦馬面であつた。馬面は其自身に於て非凡を意味して居る。吾か卿里の鹿吉——左の耳に似た物何かと云ふ謎を自ら懸けて、右の耳だと自ら解いた鹿吉——の如きは、同じ馬面でも例外である。此の家の風呂場のお常の如きも、其に相違ない。又其の眼光の恐しく人を射るのも、何様しても凡人では無い、其の鈎鼻も、あれは優等人種の記號である。其の面が宛で大痘癩であるかの如く、肌理の粗いのが心理を其の儘表はして居る。而して又同時に其の面に赤銅色を呈した多血が、彼の渾身が鐵の様な意志であることを語つて居る、彼は既に六十を越えて居る、尙且其の眉と眉との間に虹の様な現代の青年を愧死せしむるほどの意氣を示して居る。我等後進は實に此の如き奮闘界の成功者に學ぶべき所が多いのである、と前刻に惡魔と詛ふた老偉人を、摸範として崇め立て、居る。感情の變化ほど變妙な物は無い。

此から和泉は際々老偉人の許を訪ねた。老偉人は彼に向つて、好んで自分の手柄

譚を爲るのである、其を和泉は飽く面を見せず聞いて居る。時には同じ手柄を二回も聞かすことが有る。其も忍んで聞いて居る。而して老偉人の經驗に就て學ぶべき所を求むるのである。老偉人は此の和泉の謙遜で而して修養心に富んだ精神を見て、感心は無ないが褒めて居る。此の老偉人が感心する者は、日本歴史上下二千六百年の中、大閣秀吉唯一人である。其餘は盡く『河童の屁』である。

此の老偉人の手柄譚の主眼は、斯様云ふのである。彼は其の青年時代に遭遇した新日本の端緒に於て、熱心な攘夷論者であつた。彼は水戸黄門の崇拜者であつたのである。當時江戸に出羽の産で、清川八郎と云ふ有名な劍客があつた。彼は此の清川の門に入つて擊劍を學び、業成つた曉、郷里に歸つて博徒を嘯聚し、自身之が首領となつて、攘夷軍の一團を組織し、スワと云はゞ江戸に駆け上つて、父祖傳來の三尺四寸の新刀を、洋夷の血祭に飽かさなければ承知が出来ぬと云ふので、毎日毎日腕を擦つて江戸の空を睨んで居つた。其の内に外國交際が愈開け

て、其の目算がガラリ外れた。『エツ糞、究らねへッ、西郷隆盛だあ、大久保利通だあ、木戸孝允だあ、何奴も此奴も河童の屁だ。』

此の老偉人の面相と意氣込から見ると、其の血氣旺盛の時代に、博徒の一群を引卒して、亞米利加三界まで攘夷で推し通しかねまいと、何様しても想像せらるゝのであつた。

所が又此様云ふ風變りの手柄譚もある。『自分は若い時俳諧が好で行つて見た事もあるです、其の時巻頭を取つたのが此様云ふ句です。』

葉から葉へ譲るや蓮の一葉。

斯くて二週間も立つて、老偉人は又東京に出張した。

十六

老偉人が發つた二日目の晩であつた、終日曇つて蒸した揚句が細雨となつた。和

泉は夕飯後の散歩にしつとりと濡れて歸つた。

羽織を着替へて、窓に立つて見下すと、薄闇くなつた主屋の椽側に顯れたお春の面が、特別に白く見えてゐる。彼は今戸袋に手を挿しこんで、自分を視下した和泉の顔を見て、微笑つて一枚の戸を引出す途端、ドツプと池が水を跳ねた。

『おやッ』とお春は雨戸引く手を留めて、和泉を見上げて『可けませんですよ先生。』

其様言つて何だつたらうと、池の面を見ると、對岸に拳よりもすつと大きい蝦蟇が如つこりと蹲まつて、お春を後目にかけて居た。お春は膽を潰して。

『アレ彼奴だ、畜生、叱、叱。』

と足踏み立て、威嚇して居る。

『何だつた。』と和泉が訊ねた。

『蝦蟇でムいました、御免なすつて。』

『うわッはッはッは』と和泉が笑へば、お春も耐らず笑い出した。

和泉は猶茫然と肺病の面見た様な、不愉快な空を眺めて居ると、足音を先に立て、お春は二階に上つて来て、和泉の立つてる背後を廻つて、戸を繰つた。『お、聞いて』とお春は足で模る模る歩いて、押入からランプを取り出して、机に乗せて、机の上のマッチを手探ぐる。待ち設けて居た和泉が、サツと點火木をお春の面の前に擲つた。

『お、危い、』とお春は愕りして飛び退き、『厭な先生さんッたら。』

『御免なさい、闇くて分らなかつた物だから、』と和泉は火屋を抜いて燈心に着けやうとして、火が指先に逼つたので『アッアッアッ。』

『そら御覽なさいましな、今の罰でムいますよ。』

『うわッはッは』と二人真闇の中で笑つた。

和泉は再び點火木を擲つて、ランプを點くる、其を相圖にお春は立ちかけて、又

「お床を展べて置きませうか。」

「然よう、後で宜しい。」

お春が下りて往つた、梯子を、ポトリポトリと小さな足音が緩たりと上つて来る。ハテなと思つて居ると、前髪蒙つた須摩子の面が瞥と見えて又引こんだ。而して今度は窃と梯子を上つて、拔足の後退却、一封の書簡を後手に持つて来る。自分に見えないので、人にも見えぬ積である。

「おや何方」と、和泉が擲揄ふと「可けません、可けません、見ては可けません、と須摩子は和泉の坐間で退却つて、突と身を轉へして書簡を出して『へー先生御手紙、何持つて来たか分らないでしたらう。』

「へー有り難う、些ども存じませんでした。利巧な子だねえ須ウちやんは。」
須摩子は頗ぶる得意な口調で、「あのー、先生。」

『へーい。』

「お手紙を御覽なすつて、直と下にお遊に入らしやいて、お祖母ちやんとお母ちやんが。」

「へーい有り難うムいませう。」

「さあ行きまぢよ、さわ、」と須摩子は和泉の手を取つて引き立つる。

「一寸御待ち。ねえ須ウちやん、今此の手紙を読みませうから。」

「ぢや待つて居ませう、」と須摩子は机の側に素直に坐る。

「お、御利巧、今直ぐと讀んで了いますから。」

和泉は封筒の端を擘いた、富岡の書簡である。粗麤つかし手の走り書である。

前略御免、本日加藤の老人に面會したるに、先方より今回は良師を聘しくれ、満足に存ずなど、例の御前風を吹かされ候。何はともあれ、貴兄が、巧く行つてくれたので、僕も老人の手前頗ぶる面目を施し候。
老人は君を『善い奴』と申し候、驚く勿れ、是れ飼犬を呼ぶ語に似て、實は然

らず。彼は元來人間を人間と見て居らず。西郷、大久保、伊藤、大隈、總て是れ『河童の屁』なり。『善い奴』とは人をば河童の屁以上、稍人らしく見たる物の言ひ振に外ならず候。然れば『善い奴』なる内容が、『河童の屁』の内容に優りたるだけ、其だけ、君が西郷、伊藤に優りたる譯なり。有り體に云へば僕の如きも亦同じ『河童の屁』の一に外ならざるなり云云。

『うわッはッはッは』と、和泉が突如に噴き出したので、須摩子は膽を潰して、『何あに先生、其様に可笑しい事が書いてあるの、えい。』

『えへ、河童の屁と云ふ事が書いてあるの。』

『あや、其はお祖父ちゃんのお手紙い。』

『富岡さんの手紙なの。』

『富岡さんも『河童の屁』ッてと云ふの。』

『お祖父ちゃんかね、富岡さんの事を河童の屁だッて云つたよ。』

『お祖父ちゃん誰でも『河童の屁』だことねえ。』

『お祖父ちゃん何だらう。』

『お祖父ちゃんも『河童の屁』だわ。』

『はッはッはッは、お祖父ちゃんも、須うちやんにや敵はないからねえ。』

『先生、さ行きまぢやう、行きまぢやう。』

十七

頭痛持の頭は晴雨計である。空に雨が催すと頭が痛み出して来る、雨が晴ると又カラリ氣が晴れると云ふ工合。

豊子は今朝から臍臍の上を兩指で押へて暮した、不愉快に耐えぬのである。初は唯氣が重いと云ふのであるが、其から段々と考へ事を初むるのである、返らぬ過去の不幸を繰り返し、未だ見ぬ將來の苦勞を取り越すのである。抑も豊子の頭

痛の種は、第一が生家の落魄、第二が主人の善妾、第三が嫁女との暗闘、第四が老後の絶望と云ふのである。初の二條に伴ふ不幸は云ふまで無い一家の主婦たる位置も権利も既う過去の一夢となつて了つた。謂はゞ家庭の亡者である。然れども第三條は外から見れば羨ましい嫁姑の間柄であるのに何を豊子が苦しむで居るかと云ふと、唯一の家庭の味方と頼むべき嫁の英子が、自分よりもずつと立ち勝つて利發で、而して當世の教育を受けた女であるだけ、其の性質が温順い自分の性質と一致せぬ、其が不安の原因である、表面では自分を尊敬して居るけれど、内心では輕蔑して居るのでは無いか。彼は段々元氣と権力が増して来る、自分は既う衰ふるのみである。行末何様云ふ待遇を受くるかも知れないと云ふ、餘所目には其と知られぬ、其と言はれぬ、胸の中の苦勞がある。第四條の事實と云ふのは、當主郷造の弟に三郎と云ふ子があつた。豊子に好う似た、心の細かな性質であつたので、非常に豊子の氣に入つて居た。今の英子を郷造に貰つた後、豊子の

唯一の望は、此の三郎にもつと温順い嫁を貰つて、此の夫婦に懸らうと云ふのであつた。然るに英子の來た明る年、三郎が十八歳を一期に熱病で死んだので、豊子はガツカリと力を落した。老いては子に従へ、既う何も彼も諦めて、善くも悪くも英子に懸つて死ぬることに決めて居た。其が衝い此の二個月前まで其様であつた。

然るに此の二個月以前、始めて和泉を見た當坐から、一遍死んで了つて居た希望が、再び頭を昂げて來た。最初は唯彼の非常な悲觀的容貌に打たれた限であつたが、段々と其の言語を聞き、其の性質を見るにつけて、三郎の事が恒に胸に浮んで來る。勿論、死んだ三郎が、活きた和泉として還つて來た者とは思はない。顔と言つても聊も似ては居ない。然れども其の細かい處に同情があると云ふ一點は、浮世の憂き節を、富岡見たやうにゲラゲラ笑つて過すで無く、しんみりと身に引當てゝ感ずるところが、死んだ者即くりである。和泉が勉強家であること、儼と

極めた通りに散歩をすること。決して如何はしい所に寄り附かぬこと、何日かの晩も、彼が利根川に沿ふた、外の野田の巷を散歩して居ると、或る船宿の白首が、前後から抱き附いた、其を怒つて「何を爲るッ」と一喝したので、白首等が膽を潰して遁げ退いたと云ふことを見聞いて、愈其の氣性に感心して、三郎が生きて居たら、彼様もあるだらう、此様もあるだらう、而して年配が丁度同じであると思ふと、死んだ子に懸けて居た希望が、何時ともなく和泉の上に復活して居るのである。

彼は今斯様云ふことを考へて居る、三郎が此の世に居るとき、或る方面から養子に望まれたことが有つたけれども、父は其を承知しない、彼は郷造の相談相手として、是非分家さすべいと云つて居た。今や其が死んで了つて、郷造の相談相手と云ふ者が、永久に缺けて了つた。其處に丁度三郎見た様な養子、例へば和泉さんと云ふ様な人を貰つて、家の吉野に配せて、分家を立つると云ふことにしたら、

丁度好い本家の相談役も出来、又吉野を泣せて、本人の否がる田舎などに縁附ける必要も無くなる、謂はゞ一舉兩得である。其して自分が其に懸かつて死ねれば、實に既う世の中に思ひ置くことは無い。唯此の儀に就いて、唯一の苦勞、唯一の瀬越と云ふのは、和泉さんが隠居の氣に入るか入らぬかと云ふ其であつた。此には豊子も頗ぶる氣を揉んで居た、所が案ずるよりは生むが易いと云つた様に、和泉の第一の謁見が、希しく上首尾に經過して、其からと云ふ者は妙に和泉の覺が目出度い。「好い奴だ」「好い奴だ」と褒められて居る。乳母などは彼は先生さんか中々に巧くつて、丁度大旦那の機嫌の好い際を見濟して、御相手に下りて見えるからだと評して居れど、豊子の考では、和泉さんが宅の氣に入つて御出るから、何時見えても宅の機嫌が好いのだと言つて居る。英子は其處は何とも言はぬ、唯不思議だ、妙だ、と言つて居る。理由は何處にあるとしても、和泉が老偉人の氣に入つてると云ふ一事實は確實である、此の一事實が今更に豊子の希望の光、又

同時に新しい頭痛の種となつたのである。

豊子が今朝から頭を痛めた種々雑多の問題の最後の歸着は、此の希望を成就する手は何様云ふの乎、であつた。一つも無い。否澤山の手がある、が、豊子自身一も實行することが出来ない、唯心に念ずると云ふ許である。其を誰に告ぐることも出来無い、隠居には無論である、今其様な建言をする位置に居らぬ。郷造にも英子にも然様である。彼等に不利益な事件であるから。乳母にも然様だ、禍は下からと云ふことがある、彼が何時他に漏して事を未然に敗るかも知れぬ。和泉には何様であるか、和泉だけには句はせて、望ませて、置きたい物だと思つて居る。『此の間寫眞を御覽なすつた時の模様では、強ち吉野をお厭なすつてる様子でも無かつたから』と、其様思つて居るので。然し若し句はせ頼ませて置いて、萬一事成就しない曉、何れ程悲しい目を見せるか、何れ程自分が怨まるゝか、自分が怨まるゝのは未だしもであるが、彼様な心の優しい人を泣かすのが實に痛い、其で

彼の方だけにはと、胸までは思つても、何様も其と打ち明くることが出来ぬと云ふのである。

豊子は茲まで考へて来て、忽ち問題を一轉した、萬一彼方を此の家に貰ふことが出来ぬとなつたら、自分の生家に貰ふことにしたらと考へた。自分の生家には兄に姉妹の女があつて、姉は實に自分や彼の方見たやうな苦勞性、妹は陽氣な質である。姉が實に可愛さうだから、彼様云ふ優しい方を持たせたいものである、其でも妹でなければとあれば其でも可い、兎にも角にも彼の方を取り逼したくない物である、斯様思つて、其の取り留もない考を結んだ。

所が終に又一事心配が起つた、と云ふのは往に和泉に書簡を越した其の女の事である。彼は其の女を妻には眞平御免だと言つて居た。けれども其の女の方で若し彼に付き纏つて居はせぬか、『彼様な優しい人だから』と思ふのである。實は又前刻富岡からのと一所に、彼の女からの書簡が来て居るのである。豊子は其が氣が、

りでならぬので、是非一遍其の内容を見て安心したいと思ふのである。英子も好奇心に駆られて、是非とも其の手から、文體から、内容まで見て満足したいと思つて居る、女から男に遣る書簡と云ふので、其で實際押附がましい作方とは思ひながら、其の方の書簡を抑へて置いて、和泉を呼んで、自分たちの前で讀ませよう云ふ装置にして、須摩子に富岡のを持たせて、呼出を掛けたのであつた。

十八

須摩子を先立て、和泉が入つた。

「何様も御勉強遊ばす所を、お呼び立て申しまして済みませぬ」と豊子も英子も居住を直した。

「ねえお祖母ちゃん、お祖父ちゃんか富岡さんの兄さんの事をね、「河童の屁」だつて」と須摩子は得意氣に語つた。

「何だねお前其様な馬鹿な事を」と英子は笑ひながら叱る。

「でも富岡さんの兄さんのお手紙に、然様書いてあるつてよ。」

「あ、富岡さん其様な事を言つて参りましたか」と豊子は茲に話頭を捉へて。

「然様です」と和泉は富岡の書簡の要領を摘んで話した。

「ですから何様も先生へ耳は不思議でムいますよ、彼様な頑固な人の癖に、」と豊子はホクホクと唇を笑んだ。

「何様したてんでせうねえ」と英子もお交際を言つてる。

「何が何様したんですつて、えへお母さん、」と須摩子も中に交つて聞く。

「何でも宜いよ、お前に分らないこつた、お前既う乳母やお休み。」

「お嬢さん入つしやい、乳母や既う寐みますよ、」と隣の室から乳母が呼ぶ。

「須うちやん、まだ眠か無くつてよ。」

「じゃお話ししませう、お約束の松山鏡。」

「あ其が宜い、其が宜い、」と傍から勸められて須摩子も直と氣が向いて。
「乳母や松山鏡話してお興れ、ねえお約束だから。」

「來つしやい來つしやい、」と乳母の誘ふ聲に呼ばれて、須摩子は往つた。

「でもねえ先生、」と豊子は楊枝を灰に突こみながら、此様な田舎で、何にもお目に留る物も無いから、既う倦厭して在つしやいませう。」

「何様致しまして、」と和泉は例に依つて例の如く卑つて居る。

「船宿の白首に懲々して在つしやるでせう、」と英子は試に戯れて見る。

「やあ是ばかりには閉口しました、晩方に迂路ついでると、正でも無い網に引かゝりますんでなあ。」

「先方では引かけようと思つて張つてるんですもの、」と英子は笑つて「一遍位は懸つて御覽なすつたら何様です、何様な事を致しますか。」

「經驗の爲にですか。」

「然様、」と、英子は口を引下る。

「可けません、可けません、何様なお土産を與れるかも知れませんが、」と豊子の老婆心は警告する。

「先生早く一人お呼びなすつたら好いでせう。」

「然様です、呼びたいです、然し僕の様な者にでも來手が有りますでせうか。」

「有りますッて、其は御困りなさるほど。」

「實は困つて見たいのですが、有りさうもムいませんな。」

「若し有つたら何様なさいませ、」と豊子は念を押すと云ふ面相。

「若し僕のやうな者にでも來手があつたら、決して唯は置きませんな。」

「何様なさいませるか」と英子は挿しこむ。

「然様ですな、先づ毎朝一所に散歩位は致したいものですな。」

「其から。」

「然様ですな、僕の書いた物を細君に見て貰ひまして、悪い所を直しますな。」
「其から。」

「其で一日の業が済みますと、夕飯になりますな。一膳に差し向つて食べて見たいと思ひますな。」

「成程、其から。」

「夕飯後でムいますか、妻君に琴なり、ワイオリンなり、オルガンなり弾いて貰つて僕のチト拙い聲でも其に合はせて歌ひたいと思ひますな。」

「其から。」

「其から月でも美ければ、一所に月見でも爲たい物です。」

「全く西洋流でムいますのね。」

「然様ですな、何様せ世間は相持でせうから、互に佳愛がる、佳愛がられるで、面白く暮した方が徳だらうと思ひますが、如何な物でせう。」

「本當に結構なお心掛、先生の奥様にお成りなさる方は本當に幸福者でムいますよ。」と豊子は何様か然様ありたいものと云ふ口吻。

「でも既うち極になつてませう。」

「誰をですか。」

「此の間の方をです。」

「うゝえ。」

「でも度々御手紙が来るぢやありませんか。」

「唯だ一度です。」

「其様な事は無いでせう、」と豊子は稍作り面である。

「今晚も来たんぢやありませんか、」と英子も右同断であつた。

和泉は些も氣づく様子で無く、「いゝえ来やしません、來ましたか。」

「おや先生空ばツくれて在ッしやる」と、豊子は更に空々しく出て見た。

「先生何と曰つて参りました。」と英子も鎌をかけて見る。

和泉は稍悲れ氣味で、「でも來ないですから、何とも御答が出来ませんです。」

「唯今二通持たして上げましたはづでしたか。」と英子は故と不審がる。

「富岡君の一通です。」

「おや」と英子は驚いた風をして、「おや唯今持つて参りませんでしたか。」

「うゑ。」

「一寸お待ち下さい。」と豊子は火鉢の抽出を抽いて見て、「あ、先生御免下さいまし、前刻先生の御散步の節、参りましたので、大事に收つて置ましたので、衝い一本のを差し上げるのを落して居ました。」と一封を和泉に手渡して、「確かにお渡し申します。」

「何様も恐れ入りました。」と和泉は何氣も無く受け取ると、英子は早速、

「先生いつそ此處で御讀みなすつたら可いでせう。」

「お邪魔でムいませうもの。」と和泉は一寸頭を掻く。

「ねえ先生、中々此處で御讀みになるほどお安くないんでせう。」と豊子も希らしく皮肉に笑ふ。

「何其様な手紙ぢやありません。」

「ぢや御讀みなすつても可いぢやありませんか、而れば悉皆疑が晴れますんですわ。」

「折角好い奥様をお世話致したいと思つて居ましても、其様云ふ方が在しつては張合が御坐いませんわ、ねえ先生。」と意味の無い様な、ある様な豊子の言に、和泉は忽ち乗りかけて、

「ぢや讀みませうか。」

「無理に御勧め申したんぢやねえ、」と豊子は辭した方がと云ふ面を見する。

「何様でも好いぢやありませんか、早く聞きたいわ。」

「ぢや御免蒙むつて讀まして戴きませう、」と和泉は手疾く封箴を開き、巻紙を披ひて、『讀みますよ。』

過ぎぬる日曜日に聊か障る節ありて、御目にかゝるを得ざりしこと、いとも遺憾に存候ひき。愛兄の信仰御變りも御坐なく候や、近時青年諸氏の信仰の動搖は、唯々驚くばかりに候。世の常の學生たる人々の上に就ては、然のみにも思はず候へども、苟くも將來神の聖僕として、天國の福音を宣べ給ふべき神學生の身にして、猶ほ今の世の懷疑不信の潮流に巻きこまるゝ方々の多きこと、實に口惜しども口惜しき限に候はずや、昨日夕方、久しぶりにて篠崎兄弟に訪はれ候。近頃は同兄の病も怠りたる方なる由なれど、未だ全快には至らざる由、御同様實にお氣の毒に堪へず候。何卒同兄の爲御熱禱のほど妾よりも願上候。其席にて妾は何氣なく不斷の信仰のまゝ、神をば、アブラハムの神、イサクの神、ヤゴブの神の如く、客觀的實在として談話し居候ひ

しに、同兄の應對甚だ異様に覺え候まゝ、問ひ確かめ見候處、思ひきや、然までに單純偉大なりし同兄の信仰の、何日しか某某氏一流の主我的信仰となりはてたりとは。同兄は神は外に顯れて在るに非ず、神はアブラハム以下の信念の中に在りと申され候。其の變化の餘りに意外なるに、妾は殆ど絶望せんばかりに落胆いたし候。篠崎兄弟すら此の如くなる上は、其の他の神學生諸氏は推しても知らるべく候。神の國の本營に侵入いたして、神の子たちを擲にする惡魔の力の大なるに、今更驚く外なく候。今は唯愛兄の信仰の堅實ならんことを望むのみに御坐候。妾の如きはいつもながら男子と生れざりし不運を慨き候へども、去ればとて神をも怨まず、人をも咎めず、神の許したまふ限に於て、此の世と奮闘いたすべき覺悟に候。篠崎兄弟の言を聞き、餘りに口惜しさの餘り、此くは思ふところを陳じ候。あら／＼かしく。

『斯う云ふのです、全て男子の書翰です。』

『何だかちんぷんかんで、些とも妾に分りませんわ。』と英子は當が外れたと云ふ面相。

『でも艶いた文句の無いのは、御分りになつたでせう。』

『一體何の事でせう。』

『神と云ふ者が、人間の外に在るか、人間の心に在るかと云ふ話です。』

『基督教か、神道の方の事なんですか。』

『まあ其様な物です。』と和泉は曖昧を言つて遁げようとして居る。

『一寸拜見しても宜うムいませるか。』と英子は何か自分に発見したいと思つて居るのである。

『さ御覽なさい、』と和泉は些とも厭な面を爲ない。

英子は其の手紙を取つて読みかけた、『過ぎぬる日曜日、』是は何でせうと、和泉の前に其の片端を差し出す。

『聊か障る節ありて』です。

『あゝ成程、聊か障る』ですか、へえ、何様も妾どもの様な無學者には、學者の手紙は些とも読めやしませんわ。』と英子の英氣も聊か惜れかけて居る。

『何、其は學者だからと云ふ譯で無く、英語の筆法でやたらと曲げてあるんです。だから讀みつけなむと分らないです。』と云ふ和泉の辨解に、自ら恥を雪がれた英子。

『成程ねえ、だから何だか英語見た様な書振だと思つてましたつけ。』

『どれ一寸拜見』と豊子も好奇心に駆られて右手に其の手紙を受けて、左手で眼鏡を衝き上げた。

『へーえ、成程、些とも妾にも分らない。』

『英語曲ですからね。』と和泉は豊子の爲にも辨する。

『お收いなすつて、』と豊子は手紙を和泉に返して、

『何様も金釘流だの、蚯蚓流だの、英語曲だの、昔者には徒目ですわ先生。』と英子は衝と思ひついたかの如く、『一寸束髪の名見た様ぢやありませんか、英吉利曲だのS巻だの、英語曲だのと、ねえ先生。』

『尤です、束髪見た様な字體ですからな。』

『ねえ先生、』と豊子は更に語調を改めて、『先生は何様云ふ奥様が好うムいますか。』

『然様ですわ、お恥かしくて申し上げられません。』と和泉は羞しさに笑つて居る。

『何故羞しいです先生。』と英子は早進撃しかける。

『困りましたわ、他ては無いですわ、此様な僕の様な究らない者でも、細君に對する望にはヤハリ人並の慾がありますので。』

『先生の様な好い方ですもの、何様なにお慾張りになつても宜うムいますわ。』

『然様でせうか、僕は餘り慾張つて來手の無い方では無いかと思つて居ますが。』
『其様な事があります物か。』と英子は斷然と保證して、『だから仰しやつて御覽なさいまし、若し相當なのが何處にか無いとも限りませんからねえ。』

和泉が薄弱な精神は、斯様なはか無い世辭にも乗らうとして居るのである。『ぢや申して見ませうか、お笑ひなつちや可けませんよ。』

『何様しまして、』と豊子は謹聽したいと云ふ心構。

『然様ですな、先相應の學問があつて、體格が好くて、性質が音無しくて、而して面が何様でも可いと申したいが、まあ十人並ではあります。』

『御尤でムいますね』と豊子は一應同情を表して、『然し女と云ふものは學問が有ればですけれども、然ほどに無くても可うムいますわ外の所が好くさへあれば。』

『然様です、學問は足らなければ足らないで、又仕こむことが出來ますから、外の條件さへ揃つて居れば、』と云ふ和泉の心は、面さへ美ければ云ふのである。

「先生、でも今の若い方には、器量は何様でも可いと云ふ方が多いなやありませんか。」と英子は聊か擦つて見ようと云ふ氣色。

「僕は何様も其様云ふ人の心が解らないです、僕自身は何管いませんけれども、生るゝ小兒、格別娘が佳愛さうでムいますもの。」

「全くですわねえ、」と英子も之には同感の趣、尋て又豊子に向つて小聲に、「ねえ丁度好いですけれどもねえ。」

「誰に、」と豊子も小聲で聞いている。

「彼の其れ、はあちやんの方にねえ。」

「いゝえ到底も先生のお氣には召さない、お多福だから、其に學問が無いから。」

「誰ですか、」と和泉は身も魂もソ、リ出るばかり、「はあちやんとは何方ですか。」

「其は一寸申し上げられませんの、到底も出来ない御相談ですから、」と豊子はちらすと云ふのでは無い、唯大事を取つて居るのである。

和泉は待ちかけて居た船が、忽ち霧隠した様な氣持、勿論はあちやんと云ふ以上、學問が無いとある以上、家の芳野で無いことは彼にも甚だ明白である。然れども此の一家親類の娘ならば、美人系の結合であるから、誰でも管はぬ、皆有り難いと思つて居る。

「僕の様な者を持つて下さるのなら、何様な方でも有り難いと思ひます。」

「琴が上手で、手も能く書いて而して氣前が御注文通り極々静でムいますの。」と

英子が執持面の紹介。

「可けません、可けません、」と豊子は故と打ち消して、「でも琴はね、免許こそ取ませんが、腕前だけはね、一寸恥しくないだけの事はムいます、氣前だつても今の女學生の方の様で無くね、温順い方ではムいますの、でも先生には更と好い方でムんせんぢやあねえ。」

「其の方で澤山、然し其の方が僕では不満足でせう。」と和泉稍失望の體。

「何に其様な事は無いませんよ、」と豊子は確に請合つて居る。

「ぢや何様か宜く其の方を、」と和泉は既う明日にも貰はうと云ふ意氣ごみ。

「いえ到底も、徒目でムいますよ、屹と後で後悔なさるですから、」と豊子は益辭退をする。和泉は握つた鰹の尻尾を、是れ放してはと云ふ工合で、「先方では後悔なさらうとも、僕に就ては其様な御心配は御無用です。」

「ぢや先生 妾 橋渡を致しませうか。」と英子は戯談半分眞實半分に笑つて語る。

「何様ぞ宜しく、」と和泉は眞實八分、戯談二分と云ふ配合を笑つて答へた。

「既う其の話は是で止しませう、何様せ出来ない御相談でムいますから、」と豊子は惜い處で談話を切つた。

和泉は何だか擔がれて居た氣がして、頗ぶる不愉快に感じたが、豊子の眞意が多少此處に在るだらうと云ふ一點を押へ得たとも思ふので、思ひ返して感情を直した。

彼は猶ほ雜談に十分間程も盡して、其から辭して二階へ返つた。跡にお春が跟いて來て、

「先生床展へませう」

「何卒」

お春は冷々押入を開き、夜具を取り出し、例の如く其を展べて、和泉が寝るばかりにして、

「お休み遊ばせ。」

と氣障な辭を遺して去つた。

十九

翌朝、布団の上で目を覺まして、未だ何の思緒を起らない空しい心鏡に、ポツと影像が浮いて見えた。其は此の家に來てからの自分の思想と境遇との變遷であつ

た。

彼が此の家に來たのは、名譽回復の爲であつた。彼は此の家に來た當坐、周囲の歡迎に自個を取り放さうとして、大に活くべき意志を振ひ興し、自個を警戒したのであつた。然して一度緊き締めた燃が漸漸戻つて、又豊子英子の情愛に致されて、他の胸中に好んで自個を没しやうと爲て居る。彼が老偉人に取り入つたと云ふのも、彼は己を誇る者は他の誇るを惡むことを知り、又現在原本が威張つて老偉人に憎まれたことを聞いて、下から手を附いて、御機嫌取と云ふ手を使つたのであつた。而して其の目的と云ふものは、苟も此の家の娘と、其の財産とを狙つて居るのであつた。自分の醜い心術が、今ハッキリ自分の心鏡に寫つて見えるのである。

『自分は吾が一身を捧げて、傳道に獻じて居る。傳道者は世の望を絶つて居る。財産は云ふまでも無い、場合に由れば無妻主義でも取らねばならぬ。其の自分が

今何様であるか、全く前の然である。自分の鴈は全く腐敗して了つて居る。箱田のお鐵さんが、篠崎君の信仰が變化したのに驚いた、殆ど絶望したと云つて、自分の信仰を警戒してくれたが。自分の變化は其れ所では無い、傳道者の觀念が悉無消滅して居るのだ。ヤ是ではならぬ。』

ガバと彼は蹴ね起きた、拍子に力揚げがした、斯様云ふ考が起つたのである。

『熟自分の性質を観するに、傳道者になると云ふのは虚偽である。其の證據には、傳道者になると云つて居る間に、吾が精神は反對な方向に傾向して居る。此の反對の傾向、即ち財産を慾念し、戀愛を渴望する傾向が、取も直さず本心である。一時風に吹き立てられた波濤が、忽ち又元の水平に歸るが如く、一時事に激して起つた決心と云ふ物が、忽ち崩れて本來の本心に返るのは當然である。自分が傳道者になると云ふのは、自ら欺いて居るんでは無い乎、苟も自ら欺いて傳道者となる、最初から罪人である。自分が罪人で居て人を拯ふ、此の如きは既に自ら欺

いて、更に他を欺かうとするのである。其様な虚詐をして罪に罪を重ねようより、正直に自分の本心に返つて、ヤハリ巧く老偉人の機嫌を取つて、彼の吉野と云ふ娘ど、其の財産の幾分を握ることの出来るやう、運動した方が本當では無いか。而して其の方は既に老偉人の寵愛を得て居る今日、寧ろ前途有望である。

『何、是が弱者の誘惑である、自分は既う一切を捨て、居る唯神の聖僕である。』
『然し一切を捨てた云つたペテロも、猶傳道生活に妻を携へて居たでは無いか
『金錢は我に無し、』富は勿論捨てた物だ、名聞功利は捨てた物だ、唯妻を携ふるのは此の限に非ずである、男と女とは唯半分づゝである、其の半分づゝが、ピタリ合はなければ、一體とは爲らぬ、不具である。不具では傳道は出来ぬ。基督やパウロの様な聖人は格別、我等凡夫の分際で、其様な真似は到底も出来ぬ。ペテロもルーテルも皆有妻であつた。自分も其の有妻黨である。苟も有妻黨であつて見れば、妻を求むるのは當然である。其の妻が設んば富豪の女であると云ふのも、

若し愛から起つた夫婦であるんなら、餘儀ない譯ではあるまいか。又其の女に財産が附いて来るのも己むを得ないさ。此方から狙ふんで無く、先方から狙つて来れば、来る者は追はずさ。其を以て傳道費に供するのみだ、慈善費に供するのみだ。

『いや其が誘惑と云ふ物だ、富豪の婿となつて傳道する、其様な事は不可能である。寧ろ多分老母の生家の女でもあるらしい、其のはあちやんの方なら未だしもである。然るに自分の頭脳には、何日か見た二重瞼の、目の優しい面が、執着い居て離れない。此が一切の誘惑の根である。此の誘惑の根を断たねばならぬ、此の『右の目を抉出して捨て』ねばならぬ。否、此の頭脳を柱にでも打ち附けて毀して了はんければならぬ。』

『いやいや其様な愚を演ずる必要は無い。自分の本心は何も吾が妻が此の人で無ければならぬと云ふ理は無い、自分の眼が不斷彼の寫眞の容貌を見て居ると云ふ

のは、何も自分が二十年來吾が物と定まつた物に出會つたと云ふ譯では無い。唯富岡が「別嬪が居ると」云つた語が、吾が腦髓に先入主となつて居て、而して其の寫眞を見るとき、傍から頻りと焼きつけたものだから、斯様なに思いこんだのである。若し此れがはあちやんであつたら、ヤハリ同じである。

「然様だ、然様なると又其のはあちやんの面が見たいな、寫眞は無いかしらん、見たい物だ。而して何方か善い方を擇り取りたい物だ。」

「馬鹿！富豪の聲たることを辭して、寧ろ貧者の聲となつて傳道しようと思つて居る矢先で無いか。」

「然様だ、是が既に誘惑であるのだ。我は茲に正眼を開かなければならぬ、此の家は「此の世の主」即ち此の俗世の成功者である。其の一家一門は皆此の世の物である。自分は既に此の世を出た、此の世の外の物である。此の世の物と關係を結んで傳道しようとは、己の私情私慾である。若し自分が妻を有つとすれば、是

非とも自分と志操を同ふする基督信者でなくてはならぬ。一切を抛ちて、傳道に身を獻ずる女でなくてはならぬ、自分に妻が有るべきであれば、古人が「妻を娶るに良媒無きを恨むる勿れ、書中女あり 顔玉の如し」と云つた様に、傳道の中に良妻があるはずである。又單に吾が一身の資格上から言つても、我は少くとも早稻田大學の法學士である、然様自ら輕蔑したもので無い。此の立場から云ても妻を得るに困難を感すべしとも思はぬ。況や故郷にも一たび歸れば、親戚中に候補者は澤山ある、何だ、餓鬼の搏飯を求むる如く、自ら身を屈し手を下げて、縁故も無い人の袖に縋つて、好んで匹偶ても無い女を娶らうとはする、女冥利に盡き果てた身でばしあるか。

彼は此の家に来て、茲に始めて確實な常識の上に立つた、否、墮落以來全く喪つて居た常識を回復した。彼は更に斯様思つた、從來富岡の言に隨つて、成るべく基督教を秘して居たけれども、是は中心甚だ疚しい次第だ。昨夜「基督教か神道

か」と、英子から問はれたとき、「まあ其様な物です」と胡魔化したのが、何様も不愉快で禁らぬ。寧ろ昔の人の如く、基督信者と告白して殺された方が潔いと思ふ位。然様だ、是から斷然態度を一變せねばならぬ。何も殊更我は基督信者だと叫ぶには及ばんが、然し基督信者かと問はるゝとき、之を隠してはならぬ、然りと答へんければならぬ。然り、固く基督の道に立たねばならぬ。』
彼は床から出離れて、被物を被て下に往つて、面を洗つて、再び吾が室に歸つて例の如く聖書を読み、祈禱を捧げて、其から例に無い讚美歌を歌つた。胸の中が喜び躍つた。是から毎朝必ず此の通に實行するのだと固く誓つた。
際しもお春は例の如く、お鉢に膳を乗せて来て、給侍をしつゝ、
『先生前刻お歌ひになりましたお歌は、あれは何のお歌でムいますか。』
和泉の胸はガツクリした、が是所ぞと思ひ切つて、
『あれは耶穌教の歌です。』と口調が少し改まつて居た。お春は別段氣づく風でも

無く、

『あゝ然様でムいますか、……此の土地にもねえ、五年ばかり前、耶穌がムいましたつけが、既う今わムんせんです。』

『何様したの、』

『散々に巷の人に苛虐られさせてねえ、東京に還つてしまいましたの。』

『何様云ふ人が苛虐たんです。』

『寺のお住職や巷の主だつた面の方々の後援で、……宅の大旦那様なんぞも、随分となすつた方でムいます。』

『然様ですかい。』と和泉は胸を打たれたて黙つて了つた、唯飯をかきこむ限である。

而て彼が讚美歌を歌ひ初めて、又殆ど三個月ばかりも立つた。老偉人の歸宅して居る間にも、彼は其の讚美を廢めなかつた。唯必ずしも形式的に朝の禮拜の際に歌ふとは限らず、興の促し來るとき、若くは精神が倦態して、鼓舞作興を要する時に歌つて居た。同時に又奥向への訪問をも、既や縁談の目的を以ては、基督信者の他を慰藉する義務として、繼續して居た。而して別段新しき問題の興るでも無く、又舊い問題の急に進行すると云ふでも無かつた。然し唯斯様云ふ新事實を老母の口から聞いた、『生家の兄もヤハリ先生の様に書くことを爲て居ります。』和泉は之を役場の代書人だらうと推して、二種異様な感に打たれた。心が俄に冷切つて了つて。然けれども又、其は其の人の罪で無く、唯成辰の瓦解の犠牲となつた憐むべき遭難者であると思つたとき、前より一倍の同情が湧き溢れた、

福音は先づ此の如き不幸の家に傳へられねばならぬ。若し救ふことが出来るんなら、結婚に由つても救はねばならぬ。我は斷じて犠牲の犠牲であらねばならぬ」と然様思つた。

毎日三回必ず運動する、彼に取つては、田園の作物の上の時候の變化も、別段珍いことも無いが、彼が此の地に來て、始めて見た麥も芥子も大根も皆逐次に刈られた後には、梅雨が降つて、一面の青田となつた。空に囀つて居た揚雲雀も霞と與に何處にか去つて、一時田から田に囁々と蝦蟇の聲が、限も無く連續して居た。今は既う其すら交尾期を経て沈黙に歸して、衝い此間まで野道に堆かく盛つて居た其の卵が、田中に落ちて、お玉杓子と孵つて、ヒヨロヒヨロと泳いで居たが、既う又立派な一人前の蛙となつて居る。『早い物だ、自分が來て既う小半年になる、』と和泉は今更月日の立つのに驚いて居る。

『盆だ』と村の若者は近所の農家の廣い乾場で盆踊を初めた。和泉は盆踊と云ふ

名は疾うから聞いて居たが、未だ其の實物を見事が無いので、是非一遍後學の爲に見て置きたい物と思つて、月が暗かつたのを幸に、闇に紛れて往つて見た。女も男も手拭を蒙つて踊る、其の手を開く、閉づる、足を差し出す、後へ引く、體を俯向くる、反り返す、と云ふ態度で、恰も相摸踊と云ふ體裁である。如めは若い男女唯七八人が踊り起す、其の他は周圍に立並んで見て居る。段々其の態度が整ひ、調子が會ふにつれて、我も我もと二人づゝ三人づゝ漸々に釣りこまるる、尋て興味が乗つて來て、全體が夢中になつて、一人が動く様になつて來ると、初めは冷笑して居た老婆連が、既う禁らなくつて、我を忘れて、舞ひこむと云ふ有様、既う然様なる傍觀者は無くなつて、盆踊が庭一杯に擴がつて居る。是から後が一刻千金だと云ふことであつたが、彼は恨を遺して夜の更けぬ内に歸つた。其の翌日の後午の事であつた、和泉が運動から歸つて來て見ると、見慣れぬ二人の婦人が、主屋に見えて居た。年の若い方の壁數寄屋の帷子を衣た婦人が、團扇

で半面を隠しながら、彼を目で迎へて居て、『はらね』とか何どか云つて老母を見た。和泉は自分が彼の婦人の噂に上つて居ると見て取つて、厭な様な、羞い様な而して又嬉しい様な、感を懷きつゝ、梯子を昇つた。其の二重障の優しい眼色と、生際の尋常な額が、何様しても彼の寫眞の實物其の物で無ければならぬ、と斯様斷定したのであつたから。年増の女を彼は斜面に見たので、善くは見なかつたが、唯面の皮の皮剥けてたと思つた限、特色のある女とも思はなかつた。彼が一息吐いたと思ふと、お春が二階から顔さし出して呼んで居る。

『先生、一寸來らしやいませと』。

『誰方が。』

『奥様です。』

『畏まりましたと言つてお與れ。』

『今直ぐですつて。』

とお春までがにやにやと笑つて彼を見て居る。

「何でも唯事では無い、何事だらう。」大に危ぶみ疑ひつゝ坐を起つて。「何か詮議がかかりさうだぞ。」

主屋に入つて辭儀をすると、先づ老母の紹介で、若い婦人が果して吉野嬢、年増は「蠣殻町に居る婦人」とあつた。問はずと知れた老偉人の妾である。和泉は其の面を正面に見て、「彼れほどの人にしては、望の低い物だなあ」と稍案外に思つたのである。

「先生」と豊子は笑顔の眉根を揚げて、希い大氣焰でも吐きさうな氣勢、是迄ど打つて代つた力のある語調で、「先生は里見學校校主の女で、悦子さんと云ふ婦人を御存しで在しやいませう。」

「いゝえ、其の儀ならばと云ふ風で和泉は些も驚かない。

「あら」と云た吉野嬢の笑面に、「彼様な空を切つた顔をして、」と言ふ表情が溢

れて居る。

「先生既う知らないと仰しやつても、既う徒目ですよ、歴とした證據人が控えて居ますから。」

「へえ、多分人違でムいませう。」と和泉は中々落着いてる。

「其様な事はありますまい。」と吉野嬢が始めて和泉に向つて直接に口を利いた。

「僕其の本人を知つて居ります、其の本人と云ふのは僕の友人でムいます。」

「先生好く御友人が在つしやるんですかね、」と豊子は既う其の手は喰わぬと云ふ面構である。

然し貴方がたが僕を御疑ひなるのは、御尤な次第でムいます。」

「既う大概に何も彼も御白状なさいましな。」

「其理由を一通申し上げませう。」と和泉は早稲田大學卒業して、半込から本郷方面に轉ずるとき、里見女學校の寄宿舎の正面の下宿屋に居た、堀田磯太と云ふ友

人の室に一泊したこと、其時堀田が一婦人から遺されたと云ふ紫服紗に包んだ艶書と金の指輪とを彼に示して、其の處分方に就て、彼の意見を諮ふたことから、彼は若し彼か其の女と結婚しようと思ふのなら、宜く之を受くべきこと然もなく、唯一時他の神聖な愛情を弄ばうと思ふのならば、須らく然る罪深き考を去て、潔よく一切を返却すべしと勸告したこと、彼が之に應ずるやう告白したことを語つて、「此様云ふ譯ですから、僕を御疑なるは御尤ですけれど、事實然様でない事が、立派にお分りなすたらうと思ひます。」

『あら然様でしたか知ら』と吉野嬢はサツと羞ぢかんだ。

『然しと和泉は語を次いで、其の友人と思つた堀田磯太なる者は、實は泥棒根性な男でして、其の後本郷で此の男と同宿して居た僅半年計の間に、僕は三度此の男の爲に金品を奪られました。』

『あ、其れで分つた事があるのよ』と吉野嬢は母に向つて小聲で、『其の服紗と手

紙は返つたけれど、金の指輪だけは返らなかつたわ』

『ぢや全く取られたんだね。』

『然様なのよ。』

『でも先生が其様仰しやつたお蔭で、悦子さんが幸と弄られなくて済んだんだね。』

『然様なのよ。』

『何様も先生相済みません、先生の様な眞直なお方を御疑ぐり申しまして、』と豊子は赤らいた笑顔で詫を言つた。

『何様致しまして恐れ入ります、唯御疑さへ晴して頂けば、其が何よりの幸でムす。』

『まあ先生は御見上げ申した方で在しやいますのねえ、本當に實のお在りなさるんですねえ、』と豊子は痛く感心し切つて、『而して其の堀田とやら仰しやる方は、

本當な泥坊なんですかねえ。」

「何様も泥坊狂なので、遂に其の義理の兄から巢鴨の瘋癲病院に打ちこまれました。」

「其で先生のお金や品物は返りましてすか。」

「返りませんです。」

「失禮ながら何如程な御損害でムいます。」

「三遍合はせて五十圓許です。」

「五十圓でムいますッて。大變な御災難でムいましたかねえ。」

「何に致せ、此方に上ります支度金を盗られましたので、大弱り致しました。」

「然ぞねえ、然様でムいましたらう、本當に酷い人もあつた物でムいますのねえ。」

「いや既う痛い目に逢ひました、でも御宅に上りまして御親切にして頂きますんで、何も彼も既う忘れて了いました。」

「御言葉で痛み入ります、一向不行届でムいますけれども何様かねえ御遠慮なく何でも仰しやつて頂きたらうムいます、何様か御不自由を御見せ申したくないもんですかねえ。」

此で悦子婦人の情夫詮議の一段落を告げ、其の後は雑談となつた。吉野嬢が其の學校生活の一斑別して學校參觀と稱する嫁子見の絶えぬ事、女子の方で落選した者、男子の方で拒絶を受けた者の誰彼だど云ふ事を語り、同級生中、萬里小路、三條、等の華族の令嬢、其の他某某の紳士、紳商の令嬢が、逐次に結婚して、残る者は漸く數の少くなること、自分と誰彼とかは、誓つて卒業まで學校に止まる決心であるなど云ふことを語つた、其から談話は漸次に此の土地の事柄に及び、豊子は和泉に、

「先生、昨晩盆踊御覽なつたそうでムいますが、如何でムいました、究らない物ごしたらう。」

「非常に面白く見ました、始の間は然様整はないのが、段段と整つて来て、遂に庭一杯の盆踊が宛で唯一人で踊つて居る様でうりました。」
「流石は先生の御眼の付け處が至ッ切り違つて在しやいます、先の原本さんは既う唯究らない、究らないとばかり、仰しやて、頭からお腐しでうりましたのに」と豊子は又更に感心の種を發見した。
「ぢや妾も盆踊見に往かう、」と吉野嬢が甘つたるい調子で、圓つこい頷を胸に落して和泉の面をチラと見た。

二十一

何様云ふ潮合に一座を辭して、何様云ふ足取で梯子段を登つたのが、一切夢中で我に返つたときは、既に二階の吾が机に凭れて居るのを發見した。而して猶夢ではないかと思つて居る。いや夢のやうに思つて居る、恍惚として居るのである。

「ぢや妾も盆踊見に往かう、」と吉野に瞥と見られときは彼は紫雷の閃きに打たれた心地であつた。
嬉しいごも何とも思ふ間も無く、彼の心は唯其の一時に奪われて了つたのであつた。克己の石垣も奮闘の陣立も吉野嬢の其の一瞥に疾くに潰れて了つて居る。
何の奇も無い、青葉見た様な現實界に居た彼は、忽ち百花爛熳たる理想界の關門内に一躍に飛こんだので、「夏の眞晝」に、醒めつゝ夢を見て居るのである。理想の夢には此とも現實の實感などは伴はないものであるが、彼のも正に然様であるつた。
愕くりと彼は夢から驚き覺めた自分が、此の家に來る當坐を思つた、富岡が此の娘に就いて警戒した言を思つた。自分が彼に對して固く誓つた言を思つた。瓦落瓦落と舍利を碎いて車を乗りこんだ老偉人が居たことを思ひ起した。自分が頼無い傳道師の志願者であることを思つた。

「はあ」と彼は苦しい太息を衝き出さざるを得なかつた。

「然様だ」と殆ど一時無感覺の中に滅入つて居た彼は、俄然として頭を昂げた彼も一時、此も一時、と云ふことが有る。傳道師の決心も一時である。富岡に誓つたのも一時である既う此様なつては百年目、懐に入つた鳥を捕るまでよ。疑ふことかは恐るゝことかは。誘惑であらうが、悪魔であらうが、何であらうが既う管はぬ。行く所まで行つて見る。盆踊で遇つて見る。

斯様思ひ來る途端、彼は嘗て「伊達騷動記」と云ふ繪本で見た少年原田甲斐が事を思ひ興した。原田甲斐が一日山路を往いて居ると、足許から十歩ばかり隔つて、世に類る物もない奇しい羽色を帯びた小鳥が地に下りて居る。甲斐は其に心を奪られて、寂と往つて手を揚げて捕まうとすると、ポツと立つて又十歩許の距離に留る、又往つて捉ようとする、又十歩許の處に遁ぐる。十歩十歩と追つかけては其の小鳥に誘はれて思いもよらぬ深山に迷ひこんで、何とも名を知らぬ猛獸に出

會つて一命危い目に遭つたと事ふ事を思ひ起した。『ふむ、自分の場合も其の美しい小鳥の誘惑かも知れん……』

『然し一生に一度である、自分も何様か何様な美しい誘惑に懸つて見たい、否既に懸つて居る。生命を賭しても追つかけるだ、追つて居る内には必と捉へる。』

『何だ何だ原田甲斐など持出す必要なんかありや爲ない。彼は餓鬼大將と小鳥との場合である。此は相愛して居る男と女の場合である。男と女と互に出合つて傍り合つて握手をする接吻をする、而して結婚する。一體になる。此の如きは戀愛其物の約束である、其を誘惑ぢや、戀愛即誘惑ハツハツハ馬鹿げた論理だ。』

『然し老偉人が結婚を許諾するか。』彼は千鈞の重石に壓し潰さるる様な心地『いや何様な頑固な親だつても、子に甘いのは親の心ぢや、彼様な恐しい雷親爺でも何様なに須摩子に優しいか。而して我にも彼様なに優しいではない……乎。』

『はあ』力の無い論理の末が吐き出す長い太息である。又もや減入りこまうとす

る、梯子段にバタリバタリと小さく緩ッこい足音無論須摩子の其である。

『究らないなあ、吉野嬢でも一處に追いて来れば善いになあ、』と彼は怨しさうに空を眺めた。

空には何の異も無い、唯青いばかりである。然し昨今土用あきの日射が猛烈なので、其の青空の宇宙に、白い光が充ち亘つて居て、僅に南に廻つたと云ふ耳、暑は今が峠である。殊に屋根の瓦が焦がされて、其の熱氣が天井から蒸し下すので彼が慢性脳病を有つた頭がもやもや逆上せて、而して額から汗粒がだらだら鼻柱に流れかゝる。然れども肉體の煩熱ぐらいは何でも無い。心の中には今情火が炎々と立ち騰つて居て彼は其に惱んで居る。

『暑いわねえ此處は。』

『ほー、吉野嬢の聲だ』と見ると吉野が二階に上つて居る。

『スワ大變』と和泉の胸はワツクワツクと大波打つてる。

『姉ちゃん此方へ行きませう、此方へ、』と須摩子は吉野の手を執つて和泉の方面へと引張る、否でも無いらしい吉野がそろそろと引ばられて来るのである。

『愈大變若し直接に物を云はれたら何様返事をするのか、いや氣易立に云ふかも知れん』と愈氣は氣で無いのだ。之に反して吉野は吾が内の二階ながら客行に来た者が、其の内の者に導かれてかの如く、須摩子に引かれて、餘儀なささうに窓際に来て、先づ泉水を見下すのであつた。

『須うちやん御覽なさいな、噴上が眞直に下りやうとして、おかしく難がつていとよ。』

『あれあれむツくり、むツくりしてる』と窓敷居に兩手をかけて、須摩子のお河童が佳愛らしく俯向いて見て居る。

『何故でせう姉さん。』

『風が無いからさ、些とも風の無いことよ。』

『不思議な様に。』

『其様なよ、本當に不思議の様だわねえ、あツつい、』と一寸和泉の方を向く、故どらしく無い様に。

『姉さんお話があつてよ。』

『何にお話ッて。須うちちゃんのお話？。』

『らむ。』

『須うちちゃんのお話聞きたいこと。』

『話しませうか。』

『早くお話しなさいな。』

『ねえ猫と錦魚と先生のお話、』此が今須摩子の十八番になつて居て、誰にもこれを振回すのである。

『然様、早く聞きたいわねえ。』

『ねえ、此の間ねえ、もう先月の事、』須摩子は古い事は何事も先月である『内の黒があの一等大きい錦魚を啣はへて、持つて行つて食べようとしたのよ。其ん處を先生が早速飛び下りてね、黒を追つかけてね、錦魚を救つて又泉水に入れて下すつたの、ねえ先生。』

『え、』と和泉は須摩子に答ふる拍子に吉野とチラと目を合はせた。

『あら然様、善けない黒だわねえ。』

『鼠は取らずにさ。』

『本當よ、あゝ暑い、早く日が暮れば善いけど。』

『日が暮るゝと何様するの。』

『……………』

『何様するの姉さん、』

『何様も爲ないのよ、納涼でも爲ようわ。』

『須うちやん晩になつたら盆踊見るの、姉さちやん盆踊いや？』
『いやでないこと、姉ちやんも行つて見るわ。』
『エッヘン』と聲づくろひをしてお春が茶菓を持つて來た。
『おや既うお八刻だよ、さあ須ウちやん下りませう。』

二十二

其の晩彼は例に依つて裏手の田道に運動に出た。
今宵八月十六日である、大陰曆が恰も一月後になつて居るので、十六日の月が正面の小山の社の神杉の眞上に圓盆の如く出て居る。一面の平田の上には、ポーツと淺霧が浮いて居て、何處までも限が無い。月の光が明るいので晝かの様に見える。彼が恒も往く川添の小路をホ、ラ温い風に送られて、ノツサリ、ノツサリ暢氣さうに行いて居ると、際々側の稻の葉末を滴だつた夜露がキラキラッと煌

めく、其が如何にも涼しいのであつた。

其から彼は例の池に行つて暫く漣波の激瀧に月の動いて居るのを觀て居た、而して何時とも無く心は吉野の上に戻つて居た。

『妾も盆踊見に往かう。』姉ちやんも行つて見るわ、吉野嬢の心が何様して然様盆踊に在るのだらう、疑もなく自分が盆踊の妙を彼の前に説いたからだ、然し自分が始めて其の妙を感じた盆踊が毎年見慣れた嬢の目に俄に面白く映ずる理は無い。果して然りとして見ればである、嬢の心が盆踊に在ると云ふのは、吾が想像して居る然り、正真正正目我に在るのぢや。盆踊を見に往くと、親の手前、須ウちやんの手前を言つて置いて、實は自分に逢いたいのだや、別言すれば自分と一處に手を握つて、其して其の盆踊を見たいと云ふ彼の女の腹の底ぢや。決してお安い價でない。』と月を見上げてニコ／＼笑つた。

『でも』と和泉は俄に面を落した。彼は夕方老偉人が其の妾の後を追ふた譯でも

あるまいが、突然歸つて来たことを今思ひ起したのである。若し老偉人の歸つた爲に、折角と吉野嬢の心の底に芽を萌いた戀草の芽が此の不意の落雷に打たれて忽ち粉微塵に碎けて居るではあるまいか、盆踊には出て来ないぢや無いか、ハテ氣が、りだなあ。』

『然し』と彼は稍元氣を恢復して、『老偉人彼自身から既に戀の奴隷で無いか、自分が戀の奴隷であつて、娘の戀を緊束すべき理由がない。苟も其の子女の戀を禁遏しようと云ふには、家庭の王たる彼自身が痛く自ら緊束して。絶えず家族の風紀を振肅して居なければならぬ。自分が眞先に妾狂をして置いて他を束縛しようとしても他が服せぬのを爲様があるまい。現の證據、吉野嬢が他から見れば、彼様な雷親爺を戴いて居て非常に嚴格であるべき家庭に育つて居ながら、其で自由の心の底から戀草の芽を萌やして、剩へ、憚も無く自分の二階に登つて來ると云ふ、大胆な態度に出たのも、屹度親が親だからぢや無い乎。其れだ、其れだ、

其れで無ければ幾何父親が居なかつたにせよ、母親が子に甘いにせよ、兄もあれば姉もある、遠慮せねばならぬ人は澤山ある、其で居てあゝ遠慮が無い、處を見ると……は、あ、で無ければ何様しても大胆過ぎると思つて居た、如何に自分が老母の權内に在る身にしてもがだ。……へへ成程人の家も見えすいた物だ。だから必と盆踊に出て來るから見て居ろ。』

『ガラガラガラ』と堤の上を、空荷車て駆けて往つた者があつた。魂を潰して其の後影を見ると、月の光へ隠れて了つて、得ら見えな、尋て車の音が微になる

と、今度は頓狂な聲か歌ふ。

『盆の十六日踊らぬ奴は、

孕み女か癩搔か。』

『へッへッへッへ』行つてゐるわい、どれ行つて見やう、盆踊が既に必と待て……れば善いかなあ。』

彼は今車の行つた跡を跟いて、真闇い森の中を通りぬけ百姓家の間を潜るやうに縫い歩いて、楠の犬木の蔭に如乎と立つた猿田彦大神に突き當つて、右に曲ると其處に數戸の百姓家を取り巻いた土廣い共同乾場があつて、其の中で既う盆踊が始まつて居る大分興が乗りかけて居る。

『思ひ思はれ添うのは縁よ、』

親のそはすは縁ぢやない。』

『忍び逢ふのは打出の小槌、』

はれて逢はれぬかくれ蓑。』

『房州男にや命も遣るが、』

上總男にや氣も遣らぬ。』

『可愛男よどうしてくれる、』

腹は七月かくされぬ。』

彼は其の猿田彦の裏面の楠木の根本に驚立んで、吉野嬢が何處にか來て居ないかと闇中から眼を四方に放つて見た。然れども何處にも見えない、迂路つく男や女の影は澤山あるが。

『ぢや未だ來ないのか知ら。』

猿田彦の側面から道路を隔てた真正面に、かなめ垣結ひ廻はした加藤家の墓所がある。盆踊が丁度此の墓所の正面に當つて居るので、其の墓所の中に前刻から吉野がお春を伴れて來て居て、垣の隙間から盆踊を見物して居て心で和泉を捜して居る。

『お嬢さん。』

『何だへ。』と吉野はお春の小聲に恟りした。

『お嬢さん御覽なさいましお常どんが踊つてますよ、あら彼處に。』

『何處に。』

「ほら彼處です、此の眞向に、」と指をさして「ね、ほら大きな男の人の後に、ねほら。」

「うむ、うむ、お常はお常だ、でも中中巧く踊るわねえ。」

「でも妾なんか更と好く踊りますわ、」とお春は見る見る浮かれて居る。

「お前往つてお踊り妾此處で一人で見て居るから。」

「お嬢さんが遊ばすんなら。」

「お、厭だ。」

「何故でムいます。」

「恥かしくツてさ。」

「でも前に遊ばしたぢやムんせんか。」

「小兒の時だもの。」

「今だつて可いぢやムんせんか。」

「厭だわ、お前一人で踊つてお在、妾一人で善いんだから。」

「お嬢さんごで無けりや否でムいますよ。」

「ぢやお止しな。」

「止ませう、……御覽遊ばせ、お常どんが夢中になつて、厭なお常どんぢやムんせんか。」

「おかしなお常たわねえ、」と云つて、吉野は更に聲を細めて、「でも彼れには譯があるのよ、妾知つててよ。」

「あら然様でムいますか。」

「あのねえ、今日家の先生がねえ、前刻晝間盆踊が面白いツて、非常に稱めて居らしたのよ、其の時にね、お常が内庭に来て居たの、だから必と彼れは先生に見せて、稱めて戴く積なのよ、必と然様だよ。」

「あ其れです、其れです、必と其に相違ムせんです。お常どん初ツから先生に逆

上あせてますもの。』

『あら然さ様』と吉野はおかしく笑わらつて。

『外ほかの人がお流なが爲して上げませうものなら、口くちの内うちでふつふつと何か獨ひとりで言いつて怒おこつて。おかしな人ひとぢやムんせんか。』

『厭いやなお常つねだ。』

『だから今こん晩ばんも必まづとお嬢ぢやうさんの仰おつしやる通とほり、先せん生せいに見みせる積つりに相さう違みムんすま
すね。』

『必まづと然さ様さうだよ、必まづと然さ様さうだよ、でも佳あ愛あひさうでもあるわねえ。』

『及およびッこ無なしでムいますからねえ。』

『でも先せん生せいの方ほうで何どう様さうか知しら。』

『些ちども其そ様ような事ことはお在ありなさいません、其それこそお氣きの毒どくさま見みた様ようでムいま
すの。』

『徒た目めだわ、先せん生せいがお見みえなさらんから。』

『あやお見みえになりませんか。』

『前ま刻ときなんども仰おつしやらなくッて。』

『何い時ときでムいますか。』

『夕ゆ飯はんの時ときさ。』

『いゝえ何なんとも。』

『お見みえなさいませんかねえ。』

『更まと廣ひろ見みに出でて見みようか。』

『然さ様さうしませう。』

二人は墓はかど所ところから出でて見みると踊おどは愈い々よく妙めう境きやうに入いつて、輪わに並ならんだ百しやくにも近ちかい男をとこ女めんな
の手ての上げ下さし、足あしの駈かけ引ひきが、宛さなら一ひと條ぢうの絲いとを引ひいて同どう時じに動うごく人じん形けいの如ごとく
で而そして全ぜん體たいが水みづ車ぐるまのやうにくると廻まつて居ゐる。

『向ひ小山のしら百合の花。』

好くも咲いたよゆらゆらと。』

『好いた花だがありや氣が高い。』

野暮なわたしの手ぢや折れぬ。』

和泉は此の歌の美しいのに氣を釣られて、つい二人が今し猿田彦の表面に移つて來たのに感附か無かつた。

『好いた花だかありや氣が高い、野暮なわたしの手ぢや折れぬ。』いや折るのは容易が根こぎにして自分の花坪に手植に爲ようと云ふ、其が困難なのである。其の百合が彼の雷親爺の頑固な荒岩に根さして居る、無理に引けば根が切れる寧ろ先づ其の荒岩の心から打ち碎かなければならぬ。其が到底も出來さうもないのである。

『イツソの事に折つて了ふ乎、萬事は然様した上である。世間普通は其れさ。然

し頑固親爺に對するとしては愈彼を怒らすのである。耳でなく其様な無慚な手段に出ては彼の慈悲深い老母に濟まぬ。自分を信じて與れて居る富岡君に對して濟まぬ。第一最愛しい吉野嬢の生涯を微塵に破壊して了ふ。同時に吾自分の身も破滅である。思ふて見ると自分は今非常な危機に臨んで居るのだ。

『今晚吉野嬢が見えないのも、ヤハリ父親を憚つた物であらう、子としては然様もあらう。到底も親を棄ても戀を爲る、然様な強い女では無からうから。だから何様か初ツから愛して貰いたくないもんだ、何様せ成らない中だからなあ。其を猶ほ嘘偽にやもちほやと言はるゝと、到底もと諦めて居る自分の心がヤツバリ動く。嬢の方でも成ない物と知り切つて居て、猶何かと優うして與れるのは其こそ自分を迷はすのだ。有り難い様で情ないのだ。嬉しい様で怨しいのだ。其こそ本當の誘惑だ、人の心を弄ぶと云ふものだ。弄ぶ氣ではあるまいが、結局其様云ふ結果になるのだ。だから此際斷然と其の戀草の芽を打ち切つて貰つて置か

ねばならぬ。

『ヤこれはしたりだ誰も我を愛すると言ひも爲ないに、戀の一人相撲を取つて居るのだ。今晚出て来ないのを見ると、先方は何でも無かつたんだ、其を此方の慾目でのみ見て居たんだ……』

『然し出来ない中なら出来ない中で、ヤハリ愛して貰らつた方が嬉しい。出来なからつて頭から素ッ氣なくされようもんなら、何様なに悲いか知れや然ない。』
『いや然様でない、其れが實際身の爲だ。然様なれば人は人、我は我、一心不亂に神學を勉強するさ。何様せ此の世は棄てた物だ、逢は無い前と諦めて既う何にも思ふまい、出来ない戀は、其を強いて追ひ求めようより、思ひ切る價値の方が尊いのだ、然様だ、之を尊い經驗として、一切の婦人に超越することが出来たら、又何時か又意外な好い配偶に出會する様な機會もあらう。然様だよ、然様だよ、……然れども然様云ふことになつて見ると、今日の晝間のは全く黄梁の

一夢かなあ。

『どれどれ歸ろ、何爲に今迄茲に居たんだ、』とやをら楠の根を離れようとするど、摘まれて居た様な、迷つて居た様な、薄馬鹿らしい様な、裏悲しい様な種々な思緒が一時に胸に湧いて来て、しよんぼりと闇の中から光に出た。

『あら先生が、』とお春は先づ其を見つけて吉野に、『お歸りでムいますわ。』

『早くお呼び早くお呼び、』と吉野は咄嗟にお春に逼つた。

『先生』とお春は低く鋭く呼んだ、和泉は俄に振り回つた。

『先生』とお春は二聲呼んだ。

和泉は竊と眼を凝して猿田彦の陰に居る、お春の後に、今一個お春のよりも稍白く大きい面を認めた。

『ラヤツ』と思つた一刹那、彼は忽ち打つて變つて有頂天になつて了つた。

彼はソーツと又楠の根に引返した、盆踊は一切夢中で。

『月はいみじき闇こそ好けれ、

忍び姿の面見えず。』

猿田彦の側面の角越に、吉野と和泉と面を合はせて、敵のやうに見入つて居る。

二十三

慢性脳病患者である和泉は、一體が朝疾坊の癖を有つて居るが、今朝は殊更朝寐をして、目を覺したのが七時過、日はカンカン窓の戸に當つて居た。お春が來て戸を繰ると蚊屋の中まで光がピカと射しこむので、否でも起きねばならなかつた。目がチカついて、頭が痛くて、身體が重くて、氣持が能くない、睡眠不足の結果である。お春の面を見て見ると、物は言はぬが、彼の面を見てニヤリニヤリ笑つて居るので、彼も羞ぢらつて笑つて居る。

『今晚も益踊に入らしやいますか、』とお春は蚊帳を收げつゝ云ふ。

『何様か分らん、』と和泉は楊枝を啣へて口の内へ、『お春さんは何様です。』

『何様でムいますか』と是も布團を持つて赤くなつた。

其の内に手水も使い食事も済して、而て昨夜の事を思つて見る。

『月はいみじき闇こそ好けれ、

忍び姿の面見えず。』

實の處、昨夜の一夜が千夜にも萬夜にも永劫にも爲て欲しかつた。猿田彦の裏表に相向つて、忍び姿の面が餘所には見えないで、思ふ同士見合つて居た。一刻千金とは昨夜の一時間の價であつた。二重險の優しい眼肉附の尋常な頬、クツキリと白い生際其から頬にかゝつた鬢のほつれ毛、日中では眩しくて得見えないものが、月光の闇の中で、神經も些は手傳つたらうが、額の肌理の讀まるゝまでも、鮮麗と見え通つて居て美しいと思つて居ると、何處からともなく傳はつて慄とするほど戀風が身に染みる。忽ち寒くなるかと思ふと又ポツと熱ざして亢すると云ふ始

末。彼方でも然様だつたと見えて、

『おやお嬢さんお寒いのでムいますか、』とお春が氣がついて聞くと、

『いゝえ寒かないけど、』と吉野は曰つた。

『でも顫つて在しやる様ですもの、』とお春が曰つた。

『彼れが戀風と謂ふものだらう、すると彼の熱くなるのは何だらうか。』

『然し考へて見ると險呑極まる、若し誘はれて手折る、……らぬとした所で萬一家の人否頑固親爺に感づかれでも爲ようものなら、其こそ萬事休すであると思ふと、臆夜風と云ふ風がスーッと戀風と直に變つて、夜の痛く更けぬ内にと、コッソリ以心傳心の目を見あつて、頭附き合つて、別を告げて、一足先に歸宅した。歸つて見ると急に口惜しくなつて來た。何故一息に吉野嬢の手を握つて引よせて思ひ存分何故手折らなかつた。彼の美しい白百合を。』

『今一度往かう』と周章たゞしく梯子にかゝつて、半分下ると裏口入る下駄の音

繼いで吉野の聲として、

『唯今。』

『へ、お歸り遊ばし』と乳母の聲が迎へた。

『徒目だ徒目だ千載一遇の機會を逸した既う徒目だ』と彼は機會を前髪のみあつて後頭は赤禿の怪物に比へた自助論の比喩を思ひ起した。我は其の前髪を攫み失した、後の悔は既う前には立たぬ。』

『何様だつたへ盆踊は、』と豊子の例のゆとりある優しい聲。

『面白くつてよ』と答へて吉野の聲は忽ち低く『ねえ家のお常も踊つて居るの、おかしくつて、』と前刻お春に話したお常の戀をお春から聞いた事實を交へて豊子に語つたので、一坐大笑になつた。然し和泉が此の事實を知つたのは今晚が始めてであつた。

『其様聞けば思ひ當る節もあるが、然し其れは多分お春や吉野嬢の想像だらう』

と彼は先づ其様思つた。

『然し若し事實だとすれば不憫な話だ』と彼は一擲の同情を惜ま無かつた。但し餘所の事實の様に思つて居るので。

『春や二階にお床を展べてお上げ、』と豊子の命令。

『はう。』

恠りして和泉は梯子を駆け上つて座に復つて而して空ばくれて居た。

お春は始終ニヤリニヤリ、笑つて床を展べて居た、何とか言ひたいが言ふ語を知らぬと言ふ體裁、尋て蚊帳まで弔り濟して、

『お休みなさい、先生今少し居らっしゃれば好うムいりましたのに』と笑つて辭儀をして去つた。

和泉は唯一人ボツツリと石油燈に向つて坐つて居る。光の透かして居る蚊帳の中を見ると、自分の枕が唯一個淋しさうに床の番をして居る。彼は思はず太息を吐

いて腕を組んだ、僅々二十分前に失つた機會が惜くて惜くて禁らぬのである。

『吉野嬢がちよつくらちよつと此の二階に上つて来て、自分の前に坐らないかなあ。小説家などに日はせたら、此の石油燈の圓笠が其のまゝ、吉野嬢の面に見ゆると云ふたらうが、何様も自分の神經の鈍慢な所爲か然様巧く行かんわいハツクシ、あゝ充らん、寂寞孤獨だな、』

彼は燈心を下げて蚊帳に入つた。頭が充血して、眼か冴へて、寢附かれな。寢ようとするほど愈腦が熱して来る。段々と神經が充ぶる。すつと疲勞が益して来る。漸らうつらとしたと思ふと、恠りとして忽ち醒める。奥の梯子に人の来るやうな音がする。

『確かだ確かだ。』

家の内は森として居て、鼠の走る音もしない。正に寢入端と云ふ幸な時刻である。彼はソロツと頭から身を起すと蚊帳の外に吉野が来て坐つて居る。

『ハッ』

ど彼はブルブル顫へて、ソーツとばかり蹙り傍つて、出て見ると誰も居ない。

『何だ吾影かあ』と彼はガツカリ床に落ちた。暫く寝ようと努力しても、ヤハリ奥の梯子が気がかりである。心を澄まして耳峙つるとポトリポトリ、人の昇る足音がする。彼は寝て居て待ち切れん、再びガバと頭を起して、蚊帳を出てソーツと梯子の方面に摸つて往つた。スースー息の音がして居る。佇んで伺つた。自分の息の音であつた。

梯子の上り口……誰も居ない。

『はてな』と彼は梯子段を極めて臆病に一段下りた。其でも尙其の人に遇はない、ソーツと今一段下りて其でも尙誰にも遇はない、三段四段と終に廊下まで下りて見た、其でも人に出遇はない。

『ウ、ーン、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ。』

彼は肝を潰ふした、下りた梯子を蹙り上つて辛うと床に歸つて一息吐いた。

『墮落、墮落、二階から廊下に墮落、あゝ。』

二十四

如上が和泉が昨夜一夜の記憶であつた。

其の内に主人が科業の爲に上つて來た。其の柔和な容貌を見てガクリとした。昨夜廊下に偷んだ彼に、寢反を打つたのは、此の人だと思つたのだ。然し本人は何も知らないらしく、其の平易な態度が些も平素に異らないので、彼は始めて心を胸から下したのである。

科業が終ると主人は去かうとして衝と思ひ出した様に、

『妹が英語の温習を願いたいと云つて居ますが如何でせうか。』

『宜うムいます。』

『ぢや何様か宜しく願ひます。』
主人は其で立ち去つた。

『ソーラ来てぞ、』と和泉は禁らず、一人でホクホク笑ひ溢して居る、『なあ自分
が思つて居た然だらう、其から斯様、其から彼様、其から遂に……と、宛で小説
見た様な、否事實は小説より奇なりだらう。』

此んな獨語を言つて居る内に既に吉野が上つて來た。お互に既う些も遠慮のある
中では無いが其でも吉野は一禮した後で、少し面をポットして、稍甘つたれた口
調で。

『唯今兄から妾の英語の事を御願ひ申して與れましたか知ら。』

『は伺ひました。』

『宜うムいませるか知ら。』

『宜うムいませすども。』

此が二人の面と對つて語を交はした初であるた。

『其れぢや御願申ます。』

吉野は主人の稽古して行つた後の机に就いた。其の机と曰ふのは取も直さず和泉
の机で、長くて狭い桐机であるので二人差し對ふとなると餘程窮屈を感じるの
である。而し實際に其を感じたのは和泉ばかりで、吉野には微塵も其様云ふ心配
が無いらしくずつと机の下に膝を進めて、而して持つて來た二冊の原書を上置き
いて、而してグニヤリと差がんで、

『お恥しいわ、此様な物ですから。』

『何ですか、』と和泉は取り上げて見ると、英文六大家讀本と、フ井スシヤ一の萬
國史であるので、『中々高尚な物ですわえ。』

『あら厭でムいませすわ。』

『戯話ぢやムいませせん、此の六大家が讀めましたら既う英語は何でも無いですか

ら。

『でも何にも出来はしませんですもの。』

『何に其様なことが……何様云ふ工合に行りませうか。』

『何様でも、……何卒ぞ先生に御講義なすつて戴きたいですか。』

『何でも致します。』

乃で講義と事が極めて、六大家文はラムの『ハムレット』萬國史は読み續きの羅馬史を講ずると云ふことになつた。

先づハムレットがら初めて段々と説話が佳境に入つて、ハムレットとオフヘリヤとの情交の一殿に進むと講者も聴者も心が乗つて来て、書物の戀を講じて居るか、互の戀を語つて居るか、分らぬ様になつて来た、吉野は唯夢中で聴いて居るかの如く膝を進め机を推して而して其の底髪の柔かい端が和泉の額を嘗づる迄に逼つて来た。……彼は刻々何様なるとか危ぶんで居る。

『ハッ』と彼は次の一刹那電氣に打たれたやうな心地がした。彼は一時に五體の存在も精神の組織も蕩くるばかりの力を感じた。

彼はバツタリ講義を止めて、書物の轉倒を指して居た手を引いて、眸と胸に組みあげて、ワツクワツクと躍りあがる血を方寸に緊縮して、一心神を念じて居たが、風と思ひ附く所あつて、急に筆を執つて巻紙の端一行駈つて、其を吉野の前に出した、吉野は其を見て頭附いたが、然し其の作様は些も前に異ならない。

『グハッ』と度胸を打つた響に、吉野は恟りと頭を揚げた、老偉人が主屋續の表の寶物藏の戸を開けたのだつた。

吉野が降りて往つた後で和泉は吻と一息吐いた。

『あゝ善かつた。』

親知らずの嶮を幸と駈け抜け得た者は振り回つて何様して彼様な嶮巖と高濤の間を無事に通過して来たかと驚き喜ぶと云ふのである。今や和泉の胸の内が其で

ある。宛然暴風か洪水の様な誘惑の魔力を免がれて、恐ろしい半時間を無事に経過するを得たと云ふのは實は愉快で耐らぬのである。

「昨夜も實は此の恐ろしい誘惑に懸つて居たのを、其の奪ひ去る魔力を披つて罪の陷阱に陥るのも免れたのだ其を口惜い事に思つて我から其の誘惑を追つかけたのは、實に痴情の極であつた。然し今の様に先方から彼様追ひ求められたとき、彼様巧く遁ることを得たのは、實に愉快だ。聊か以て富岡に對し老母に對して、其の知遇に酬ふるを得たのだ。而して實は吉野嬢の神聖をも保存し、自分の過去の罪をも償ひ得たのだ、神に對し世に對して、聊かたりとも面を揚ぐるに足るのである。是れ而しながら吾が力であるんで無く全く神の助であるのだ。此方が先方を追ふ時には、都合よく先方が外れ、先方が自分を追つかくれれば此方が難なく遁ぐるを得る。外るゝのも遁るのも、人でなくて神業だ、自分は神に知られて居る、神の手に護られて居る。再び罪を犯さぬやうに作向けられて居る、口惜い様

で、非常に愉快だ。

「誘惑に打ち勝つた。罪の陷阱を飛び越した。吉野嬢の神聖をも汚さず自分の品性をも敗ら無かつた。否、自ら守ることに由つて、彼の女の神聖をも守つて與つた。如何なる勝利！如何なる光榮！」

彼は暫く感謝の祈禱を捧げた。而して次の讚美歌を歌つた。

身のわづらひも、 世のうれひも、
われとともにわかちつゝ、
ふかきたくみ、
やふりたまふうれしさよ。
ひとはずつれど、 きみはずす、
みめぐみはいやまさらん。
きみはたにのゆり、 みねのさくら、

現世にたぐひもなし。

『然れども昨夜彼様墮落した同じ我が、今日何様して此様精神が確定して、彼様な恐ろしい誘惑に當ることが出来たんか。實に不思議。晝は理性の働く時で夜は感情と誘惑の働く時だ所爲だらうか。但しは外からの誘惑には當り易く内からの欲求には敵し難いのであらうか。何方にも道理がある。すると又夜分になると内からの欲求が起る、理性が隠れて感情が躍る、又もや廊下に墮するののか。』
彼は忽ち氣の抜けた様に暫く茫爾として居たが、風と机の上の巻紙に目を落して、其の切端に目を注ぐと、

『結婚するまでは肉の交を慎みたい。』

『其れだ！』是れが前刻彼の女の誘惑の最中に自分が誓つて吾が腹を見せた誓言である、吉野嬢が之を見て頭附いた。既に頭附いて居る以上、彼は我が精神を諒して居るものと見ねばならぬ。随つて自分が自分の誓文を反古にして今夜廊下に

まごついた處で、彼が待つて居るはずが無い。自個の意志を聲明すると云ふことは、實際自個を救ふ惟一の手段である。

『いや然しである、前刻自分の意志を聲明して、吉野嬢が之に黙頭を示したのにも拘らず、尙誘惑を繼續して居た。爲て見ると彼の女もヤハリ女で、理性では黙頭ながら感情では誘惑して居たのだ。果して然様であるとすると、其の黙頭は當にならぬのだ、其の誘惑が當にな……る……の……ぢや。』

『サア困つた。若し萬一其様云ふ事であつて見ると、今日今日に日が暮れる、晩になる、盆踊になる、寢時になる、人が皆寢靜まる、其の後で自分は内から誘はるゝ彼の女は外から誘ふ、奥の梯子から蚊帳の外まで行つて来る。愈是れは大變ぢや。』

『いや、大丈夫、雷視爺が怒鳴るべく控へて居る、肝心と云ふ時にや必ず怒鳴る、噓をする、ガラビシヤと戸を閉つる。實に桑原桑原だ。如何に吉野嬢が父の愛に

甘ゆるるのであつても、誘惑の蛇の舌の根も得ら出せるこつちや無い。』
『然し實は其の誘惑がして貰いたいのぢや、……厄介な親爺さんだ、早く東京に
往つて了や可いの……。』

『や既う又自分は誘はれてる。斯様な弱い事ではならぬ』と彼は新約全書を開い
た。彼は實は今朝から未だ禮拜を行て居ないのだ、彼は覺えず嘆息をして讀み初
めた。

『……惡魔また彼を高山に携ゆき、一瞬間に天下の萬國を示して曰けるは、此
のすべての權威と榮華を爾に予へん、我之を委任されたれば、我が欲む者に之
を與ふべし。故に若し吾が前に拜伏は悉く爾の屬とならん。イエス答けるに
サタンよ我が後に退け、獨主たる爾の神に拜跪これにのみ事ふべしと録された
り。終に惡魔彼を離れ、天使たち來り事ふ。』
彼は再び祈る爲に額いた。

二十五

其の翌日も吉野は科業の爲に二階に來た、然れども既う昨日の様な事は無かつた。
一時の情熱は幾分か冷めて居た、既や筆談を用ふるまでもなく、互に靜に語らふ
ことの出来るやうに成つて居た。科業を濟してから和泉は小聲で、

『昨晚も盆踊に在ッしやいましたか。』

『はあ一寸、貴方來らしやらなかつたのね。』

『僕も往きたいともつて居ましたけれども、昨夜風を引いて居て、少し熱か出ま
したんで、衝い参りませんでした、残念でした。』

『あ然様、何かお藥召し上つて。』

『いゝえ。』

『ぢや妾何か持つて参りませう。』と、吉野が立ちかけたのを、和泉は止めて、

「よウムいますよ、既う今朝は何ともないんですから。」
「本當、既うお宜しくつて、」

「昨晩夜半に少し發汗しましたので、既う今朝はすつかり治つた様です。」
「然様」と吉野は再び机に坐つて、猶心配らしい様子で「でも何様してお風召しましたの。」

「多分一昨晩引こんだらうと思ひます。」

「あら然様」と吉野はポツと赤くなつて小聲で、「妾も……。」

「あ貴方も、」と和泉は摩り傍つた。

「え、」彼の晩内に歸つて、嚏が出て、何だか頭が重かつたんですわ、其れで葛湯の熱ついのを二杯飲んで寢ましたの、其でポーツと汗ばみましてね、快くなりましたの。」

「善うムいましたねえ。」

「ですから昨晩早く歸つて了いましたわ。一人で宛らなくつて……。」

「僕實に残念でした、然し……ねえ吉野さん。」

「え」と吉野は和泉に面を向けた。

「一昨晩盆踊の歌の中に斯様いのが有りましたねえ、何だツケな、コーツト……然様だ。」

「岩の清水は底から湧くが、」

「さまの心も底からか。」

つて、記へて在しやいますか。」

「え、」と横附に机に凭たれて、髪の毛のかゝつた片頬を和泉の鼻息の障はるまでに傾傍せて、團扇の端で口を弄つて居た吉野は、ジロリ和泉に横眼を使つた。和泉は流石に赤らんで辛と聞ゆるやうな聲で、

「貴方の心も然様でせうか。」

「其の通よ」と緩く團扇で顔を扇ぐと、何とも言ひ知れぬ美しい女の香が、襟頭の邊から和泉の鼻の邊まで通つて来る。和泉は魂も融けるやうな思をして居る。然し昨日の勝利を思ひ起し、凝と心を丹田に落ち着けて、

「ぢや僕と結婚して下さいませうか。」

「父さへ承知してくれれば何時でも。」

「ぢや貴方の心だけでは承知して下さいませうか。」

「え。」

「ぢや前以てお互に約束をして、其の上でお父様に願ふ事に爲たら何様でせうか。」

「え、然様です。」

「ぢや貴方約束して下さいませうか。」

「え。」と返事をした後で、吉野は少し困ると云ふ所見で、「でも約束つて何様な事

を爲るんですか。」

「世間では好く指輪を交換するとか、又男の方から女の好いた書籍を贈るとか云ふ事を爲る様ですが、其様な外面的の事は何様でも可いですが、唯心と心と固く誓つて頂きたいです。」

吉野は黙つて頭づいた、手と手が固く握り交はした。膏のやうな、柔かい温かい吉野の指に、燦めいて居る金の指輪を、和泉の親指が其の肉に喰ひ入るほどに押し附けた。

二十六

其から四五日も経つた後の日の事であつた。和泉は例の老偉人を、既う自分の岳父の様に思ひ做して居るので、愈と其の御機嫌を取る事に方針を極めて居て、好い機会を見て居たが、恰度今日午後四時頃、例する晝寐から醒めた老偉人が、白

禪一個になつて、錦魚にはせを投げて居るのを見て、是れ窟強の好機會と二階を下りて徐と豊子英子、吉野嬢の人々に會釋して椽側に面を出した、老偉人は一寸彼を尻目にかけたッ限、再び錦魚が口を聚めて競ふてはせを吞取る様を暫く見て居て、突如に、

『何様だ和泉さん此の頃は。』

『昨今の暑に困つて居ります然し貴方は何時もお壯で在しやいますな。』

『己等けい、己等あ是で壯な者だ其でもお前さんも此の暑に晝間運動に出かけるなあ感心は感心だ』と、池を離れて新坐敷の椽に腰をかけた。

『此の暑いのねえ、ヤツバリ缺がさず御運動でムいますのねえ、外の方に出來ん事ですわ。』と豊子も其の口に附いて讚めそやした。

『でもお前さん一個好けない癖がある』と語氣の變つた意外な霹靂の一聲を喰つた、當人の和泉は素より傍の人が老人が何を言ひ出すかとハラハラ胸に思つて居

る。『お前さん脳病だてえぢやねえか、脳病の癖に宵引張をして朝寢して居て、其れで腦の養生になるけい。』

『何様も其様云ふ癖が附いて居まして困つて居ります』と和泉は手を附かぬばかり出られるだけ下から出る。

『其の癖が可けねへてんだ、癖が悪いんぢやねえお前さんが悪いんだ。お前さんが其様な癖を附けたんだ、脳病てえもな何ッでも早寢早起をして午飯食つたら已等のやうに三時までなり四時までなり晝寝するだあ。熱くて作事の出來ねえ時分、起て居たつて究らねえだ、其うして涼しくなつて起きて、新しい元氣で其から又作事にかゝるだあ。』

『今から必と其様極めませう。』

『今からぢやねえだ、今迄に然様爲にやならんのだ。一體お前さんが何日でも晝飯食ふとケチ臭へ寢言を喰つてるが、ありや一體何でい、耶穌の歌けい、何でへ。』

『然様です』と和泉は此處が瀨起しだと思つたので、斷然と言ひ表はした。
『其様けい、御前さん其の耶穌けい、』と老偉人は憤然獅子の怒を顯はし鐵拳を握つて板椽を踏み轟かして、和泉の前に逼つて來る。
『二階へ入らッしやい、二階へ入らッしやい、』と豐子始め和泉の身を危んで推し遣るやうにした。何時の間にか來て居た主人郷造も、彼を推して

『速く二階へ。』

和泉は人々の厚意をば感じながら、凝と立つて動か無かつた。『自分に何も打たるほどの罪は無い。耶穌だと云つて迫害するなら、見事迫害を受けて見よう。基督教を告白して迫害を受けるなら本懐だ、光榮だ。』
斯様思つて佇んで居る内、裸體の老偉人は和泉の前に壓迫して來た。

『お前さん其の耶穌けい。』

何様言ふか、何様なるのか、と周圍の人々の眼も心も、和泉の一身に聚注して居

て、『二階へ速く。』

『はい然様です、』と和泉は度胸を極めてハツキリと答へた。『神我と共に在す人我に何をか爲さん』と念じて居た。

『うゝむ、』と老偉人は獅子の唸を一つ唸つて『お前さんは何だ、腹からの耶穌でもあんめへ、先祖代々の宗旨があるべい。其の先祖代々の宗旨だ、日本の宗旨だ、其の日本の宗旨を打抛つて、神佛の御身體や先祖の位牌を偶像だなつて、焼いたり棄てたりする奴があるか。國賊だ、獄道だ。宛で人間の道知らずだ。』

『いやいやお待ちなさい、』と和泉は未だ老人が耶穌教を知らぬと思ふので、一應耶穌教が世界教であることから、偶像破壊の道理まで、徒目とは思ひながら、辯じようとすると、傍から制した。

『黙つて居らッしやい、黙つて居らッしやい、』
老偉人は頭より嚙みつけて、

「何お前さんなんぞに聞か無いでも知つてる、耶穌教は何様な物か己等あ知つてる。耶穌教は善い物だ、ううむ、其は己丁と知つてる。然れどもねえ、和泉さん」天氣が少し變つて來た。傍の心が辛と降りかけた、「善い物だから直ぐに行れ、其様な事は可んぢや、お前さんなんざ年が若くて一人發智だから、何を行つても差支はねえけれど、年を取つて家を持つと、其様な事ぢや可ねへ、早い話が己等あ此の土地に來た耶穌を打ち懲して追つけへして了つたあだ。何あに耶穌が悪くて佛教が善い、其様な事あねえ。佛教は此とも好くねえ、耶穌教は感心だから己等が耶穌教になるつたら、野田を悉かり耶穌に爲て了ふ。其様しなさや已なれないだ。ううむ、だから己丁と善いと知つて居て追ッ拂つただ。唯追ッ拂つたんぢやねえ、其をお前さんたちが彼是云ふなあ、可ねんだ、ううむ、何お前さんが行る分にや構はん、其で酒も飲まん、惡所通も爲ないてなあ其れあ可い。然れども善いと云つて餘り凝るから、腦が悪くなるのだ。凝るのが可ねない、凝るの

が、だから好い加減に行つて身體を大事に爲なくちや可けない。お前さんも見た所然う強さうでも無いから、其だから言つたんだ、腦が悪るさや養生せろつて、何あに憎くて云つたんぢやねえ、お前さんの爲を思ふから云つたんぢや、可しか、分つたか。』

「いや何様も有り難うムいませ、と和泉は勝利的體度を以て答へた。

「ぢや其で宜い、二階へでも往つて自由にお休み、おい葡萄酒一杯持つて來い、

口が乾いて爲やうがねえや、河童の屁だツペ。』

和泉は凱旋將軍の光榮を荷つて二階に返つた。

「恰も疾風迅雷耳を掩ふに暇あらずと思つて居ると、驟雨一過、忽ち光風霽月見たやうに、彼れが雷親爺の雷親爺たる作方であらうか、何様も其の前後の變化の奇々怪々さ今だに猶も不思議に堪へぬ。何様して彼様な恐ろしい見幕が、又彼様な優しい猫撫聲に變つたらうか。爾の善を以て惡に勝て」と云つたる通り、我が善

を以て彼の惡に勝つたのだらうか。若くば自分が基督を言ひ表はしたので、基督我と共に在して彼の志を挫きたまふたのだらうか、左にも右にも基督を聲明するほど弱者の強味は無い、基督を言ひ表はした、此が勝利の基礎であつた、「我等をして世に勝たしむる者は我等の信なり」其れである。」
此様な事を考へて居る中に、豊子が二階に登つて來たので、和泉は痛み入つて辭儀をした。

『いゝえ然様改つて下さつては却て困ります、いえね實は前刻何様なりませう事かど、既う既う其は其れは氣が氣で無かつたんでムいませう、其が那の通に打つて變りましたので、既う既う大安心を致しました。何様も實に不思議でムいませう。皆なが皆な然様申して居ますの、彼様な事は無いつて。先生は全く唯の方では在つしやらないんでムいませうねえ。』

『何様致しまして、決して然様な譯ではムいませぬ、唯僕のやうな者でもやはりお心に懸けて在しつて下さいますかと思ひますと、有り難う存じますんです。』
『本當にねえ先生、』と豊子も眼を濕して『彼様申しました然で、決して裏表のある人で無く、全く先生を思つて居ますから、彼様な事を申しますたのですから、お腹の立つ所もムいませうけれど、何様かねえ御勘辨なすつて下さいませうよ。』
『何様致しまして、其様な事ではムいませぬ』と、和泉は挨拶に困つて居る。

『でも何様も不思議ですわねえ、宅が彼様に人様に優しくなつた事は、是まで無い事なんですもの。』

と豊子は三十年以上連れ副つた老偉人が全く和泉に逢つて特異な態度を示したので、其れが不思議に堪へないで居る。而して老偉人に此の不思議を引き起した原因として、和泉が全く不思議な人物であると考へたので、是迄よりも猶一倍親愛の情を持つて、良人の暴言の謝辭旁々、彼を訪ね來たのであつた。

豊子は猶優しい語の數々言つて和泉の胸に自分の心情を融かしこむやうにして二階

を下りた。

二十七

盆過ぎて、老偉人と主人と前後して東京に出た。今度酒税が増加して一石二十圓と云ふ多額に上つたに就き、全國の同業者が、東京に會同して協議する所あるが爲だと云ふので。

後は番頭と女ばかりで滅多に出来ない生命の洗濯が出来ると云ふ、結構な放生會と来て居る。

生命の洗濯には先づ言ひたいことをいふので、其の晩飯の際からが大騒ぎであつた。其で吉野が何かの會話の次に、學問の出来る人なら誰でも好いと、云ふ意味を語つて、暗に和泉との間を微妙かしたので、忽ち錦の上に花を添へたと云ふ風情であつた。

其から又爲たいことを爲る、其の晩豐子の布令で、表奥、二階臺所の住民を一所に居間に召び聚せて、例年の通り、碁石を賭にズツト昔流行つた遊戯、紙牌の二十一を爲ようと云ふ催である、通番頭の六さんも、詰番頭の平さんも、定公も忠公も、小僧の健も、今一人の小僧の源も、お春も、お村も、乳母も、お山も、英子も、吉野も、須磨子も、揃つて居間に推し聚せた。黒も長火鉢の隅に控えて居る。

『さあ初めましょ』と云ふ豐子の一聲に、一同が退き下つて中を開く、殆ど盆踊の向ふを張るほどの大輪坐、其の主人公は勿論吉野と和泉なので、涼しい椽端を後に内裏雛の様に居並んで居るので、二人の中は直ぐ一坐の公然の秘密となつた。豐子は其を咎めぬのみか、寧ろ甘く見立て、居るのであつた。廻り親の最初が六さんと極つて、碁石を配る、骨牌を切る、其の骨牌を配る、其を一人一人が開いて見る。

「占めた、さあ賭ける。白一個が十で、黒が一だつたつけなあ。」
「徒目だ。」

「おやおや、けちな骨牌越しをつたぞ。」

「見つこ無しだよ、見つこ無しだよ。」

「あ巧い、ダイヤのポイントにスペートの十、二十一、巧いでせう。」

「作様うが無いな、二十五になつちやつたわ。」

「僕も全でお鬘斗附かずの御進上だあ。」

「貴様何様だ。」

「十七だ。」

「今一枚取つて見る。」

「取るべーか、いや止す。」

「さあ皆んな巧く出来た様だな。」と親の六さん骨牌片手に胸して延上つて、

「お春さん何様です。」

「もう止しませうよ。」

「御新造さん如何です。」

「澤山。」

「大變な賭金だあ。」

「白二十だよ二十萬圓だよ。」

「宜うございます。」

「やあお嬢さん其りや餘まりケチぢやありませんか、唯た黒の十粒ばかり。」

「だつてケチな骨牌を越すんだものを。」

「既う可いんですか、其れで。」

「さあ何様しませうねえ先生、」と吉野は二枚の骨牌を和泉に見せた。

「然様ですなえ、パレタ所が多寡が知れた損ですから、山を遣つて、今一枚取つ

て御覽なさい。」

「ぢや今一枚。」

「其れ今一枚。」

「あら四。」

「巧い巧い just です。」

「ぢやもつと賭けとけば好かつた、今から賭けよう。」

「其れ御覽なさいまし、あ可けません、可けません、既う可けません。」

と六さんは和泉に移つて、

「先生如何です。」

「今一枚」

「へいクラブの六」

「巧い」

「は、あ巧く潰れましたな。奥様如何です。」

「既う宜しい。」

「此處も巧く出来てるト、大變だあこれは。」

「さあ親や親だ」と一同が焦き立つた。

「さあ勝負だ」と六さんが骨牌を披けて、ハートの九だ其の次がスヘートの七、

「止さう最う。」

「十六ぢや可けない、十七からだ。」

「然様かあ困つたなあ。六さん頭搔いて居る。」

「早く早く夜が更くる。」

「さあ一か撤か何様だ」と三枚目を開けて見て、「ヒヤア十だ。さあ日本銀行丸潰れ

だ。」

「萬歳々々。」

「お蔭で交綏。」

「さあ白五下さい。」

「さ黒十個ですよ。」

「黒五個、黒五個、ホイ黒五個ですよ、黒五個。」

「エイ八釜しい順順に遣るわい。」

「早く取り附けないと支拂停止を食ふから。」

「何に其れッばかりし、拂へない奴があるかい。」

「おい此に白三個黒十個だよ、抜かしちや可けない。」

「おいよ見えなかつたんだよ。おい次白一個。」

「あら二個ですよ。」

「ずる云つちや可けない。」

「ずるぢやない茲に二個あつてよ。」

「一個は今出したんぢや無へかね。」

「厭だ彼様なするを云つて。」

「ぢや今一個ほら。」

「何様だい二十萬圓あるかい、と英子は得意に面を頻卑めて、

「へえありますとも、おや既う二十無いや、何様も濟みすせん十萬圓に負けて載

させらう。」

「ぢや後十萬圓貸して置かう。」

「何様か然う願つて置きます、さあお嬢さん黒十個、先生はバレてるんでせう。」

「戯談ぢや無いよ。」

「何れ開けて御覽なさい、そうれ二十三です。」

「ぢや交綏にして上げやう。」

「此に白二個よ。と豊子」

『へい白二個此れでお了ひ、ハッ後は黒が唯三粒。』

『お氣の毒さま』と一同笑ふ。

『先生を取り潰さうと思つたものだから、其の罰で資本すつかりすつちやつた。』と六さんの大凹み。

『人を咀はゞ穴二つだね』と、豊子は目鏡を突上げた、『さ今度は誰かへ定かい。』

『へい』と先づ頭を搔いてる定。

『お早く早く』と一同が催促する。

『好し来た己丸儲してやるべい』と、定公は元氣を付けて骨牌を握つて、『申歳や己運が悪いからなあ。』

勝負は再び初まつて、定公がまた丸つさり潰れた。中には甘く丸儲けするものもあるが、何方かと云ふと潰るのが多い、而して英子と和泉が何時も潰す方だもので、自然と先生を取潰さうと云ふ聲が段々と高くなつて来る。勿論丘焼が手傳つ

て居るので。所が和泉は自分の順番に廻つて来るまでに、資本を二倍も殖して居て、隣席の吉野が親となるのに心細さうであるから、其の全産を擧げて吉野と合併して合資銀行と觸れ出した。

『お嬢さまずるい』誰か一聲言つた限だつたので、二人は甘く飯事の夫婦となり濟して、そして和泉が吉野に代つて骨牌を配つて興つた。最後に吉野の爲に骨牌を取つて見ると、二十一、『やあ先生ずるいずるい』と大分反對の聲が起つた。然れども見て開いた譯でなく、自然に其の數に出あつたので、反對も自然に止んだ。而して殆んど丸取りで、二人の膝と膝との間に肉が痛く感するまでに取りこんだ。

『お嬢さま先生萬歳』であつた。

其様なことで、三廻も五廻も親が廻つて、結了したのは彼是十二時近くであつた。

翌日和泉には未だ夜半である四時頃、不圖自分の名を呼ばれた心地で、深い深い睡眠の底から目を開けて見ると、お春が手を付いて蚊屋の外で呼び起して居る。

「先生お目覚になりましたか。」

「う」と彼は非常に重い頭を揚げて「何か御用？」

「奥様が今朝直と御一所に御散歩遊ばしませんか。」

「あ然様」と彼はがばと蹶ね起きて、「今直に参りますつて然様申して下さる。」
お春が往く、跡追つかけるやうに支度をして急いで下りて手早く口を嗽いで面を洗つて、居間に伺候して見ると、豊子は既う儼と長火鉢で一服吸つて、英子と吉野の支度の済むのを待つて居る。其處に和泉が挨拶すると、豊子はブツと吸殻を吹き棄てて、

「どうも朝早くからお起し申して済みません。」

「何様致しまして結構でムいます、大旦那の仰しやつて下さつた早寝早起を實行致しますのに、丁度宜いのでムいます。」

「實は妾も其で思ひ附きましてねえ、ヤツバリ朝起きて運動するのは、體の薬と御醫者さんでも然様云いますから。」

「いや既う書物でも毎度讀んで居ますんですけど、實行が出来なくて居たんですが、此を潮に是非其様する癖を附けたいものです。」

其様な事を言つて居る中に、英子も吉野も髪を梳き上げて來たので。

「さあ参りませう。」
と豊子先づ前に立つて締つて居る表戸の釣金を外して出た。

外はバツと朝霧が立つて居る。
真先に豊子次に英子、次に吉野、次に和泉と云ふ順序で、歩み出した。霧の水分が

微風の様に面から頸にかけて觸るのが、ひやひやとして好い氣持。其に朝起の心のすがすがしさと、吉野同行の嬉さとを併せて、幸福と云ふ感情を、胸の内に組織して居て。前刻床の中で見かけて居た、今全く忘れて居る、美しい夢の續きを見て居る様な念がして居る。

豊子は自分の家の墓所の側から、猿田彦の前を過ぎて百姓家の間をくぐり抜けて、薄闇い森の中に入つて、例の堤の上に出た。

堤の上に出て見ると、出抜けだ森の頭も夢の中の景色の様にポイントと見えて、直ぐに消えて前も後も一様に海を眺むるやうおツ廣い。

四人の順序が何時の間にか豊子と英子、吉野と和泉と云ふ前後二組になつて、七八間の距離を有つて歩いて居た。霧が段々と濃くなつて、其の隙を白く埋むるので、殆ど互に見ゆるか見えないまでになつて來た。

二人は確く握手しあつて霧の紗越に、際々面を合はすのであつた。

『おいおい來てるかい』と豊子の呼ぶ聲。

『え、來てます』と吉野の答ふる聲。

『ねえ吉野さん。』と和泉は始めて沈黙の口を開いた。

『え。』

『お母様は貴方を僕に許して下さつて在らしやる様ですが、全く然ねなんぞせうかねえ。』

『え、然様です。』

『僕、熟と其様思ふんです、お母様何様して僕を其れまで愛して下さるでせうかッて。』

『妾ねえ、必と然様だと思ふことがありますのよ。』

『エ、何ですつて、何様な事ですか。』

『妾必と然様だらうと思ひますの、其はねえ妾の兄が今一人居ましたの、直の兄

が。其の兄が丁度五年前、妾の十六の時に亡くなりました。モ、其の時の母の力落しつたら有りませんでした。本當に佳愛さうな様でした。

「あ、然様ですか、お痛はしい事ですのねえ。」

「えへ、其れですから母は衝い此の頃までも三郎と云つて居ました、其の兄の事ばかり云つてましたの、其の兄が今生きてますと、其様です、二十歳で無くなりましたから、今年二十四になりますから、必と母は先生を見て、兄の事を思ひ出したのだらうと思ひますの。」

「不思議ですわえ、僕が丁度今年が二十四ですが。」

「あ、然様なの。」

「然様です、實際僕は明治十八年の生れですから。」

「不思議だわねえ。」

「而して貴方は二十で在つしやるね。」

「え、」と吉野は羞かんで。

「ぢやお兄さんと僕どが同年で、而して一様に貴方とは四歳差違ですわへ。」

「え、然様なの。」

「妙ですわえ、而して其のお兄さんお母様の思ひ子でも在しつたんですか。」

「え、既う非常に愛して居りましたの、其の兄に分家をさして嫁を貰つて其に懸る積でしたの。」

「あ、然様ですか、御分家なさる御積で。」

「え、。」

「お父様の御意見で。」

「父も其の積であつたんです。」

「其れぢや今では既う其の御分家なさる御望は全く絶へたんで、ムいませぬ。」

「え、母は妾に養子をして分家させたいツて言つてますけれど。」

「あ然様ですか、へへえ」

「で、お父様の御意見も。」

「何様も父が然様で無い様です。」

「貴方を何處へかお嫁にでも。」

「えへ其様な様でムいますの。」

和泉は忽ち推黙つた。重石で胸を壓しつけらるゝ心地がするので。暫くして和泉は再び元氣を振り起して。

「ぢや定めて此れまでに良縁もあつたでせうに。」

「何様ですか……でもねえ千葉の銀行家からと、流山の同業者からと、其様な事云つて参りましたわ。」

「何故お出なさらなかつたですか。」

「父が双方とも餘り好みませんでしたし、妾だつて然うですもの。」

「何故お父様お厭でした。」

「何故でしたか。」

「貴方は何故。」

「でも妾實業家なんて大厭ひ。」

「あ然様、何がお好きで在しつて。」

「妾。」

「は。」

「よう、來てるのかい」と豊子の聲。

吉野が一寸と黙つて居たので、

「來て居ないのかい。」

「來てますよ。」

「何だねえ、ちよつくら返事しないもんだから。」

「来てますよ。」

「宜いよ。」

和泉は再び問い返した。

「何ですか貴方のお好きなのは。」

「……………」

「政治家？」

「いゝえ。」

「法律家？」

「いゝえ。」

「學者。」

「え、然様、……昨晩もねえ、夕飯のとき其様な言曰つたんで、母や姉に、さうぞ擲掄れましたわ。」

和泉は其の手を確と緊る、其を吉野も確と緊めかへした。

「でもね吉野さん、御承知でも無いませうがねえ、學者と云ふ者は世間の貧乏籤を引いた者でしてねえ、細君を時好の綺羅で粧して立てて、交際社會に羽振らせたり、馬車や自動車で寄席や劇場に練りこますと云ふ譯には行きませんが。」

「えへ妾些とも然様な欲望は無いませんの、妾の友達で萬路小路さんや朝吹さんなんざ、随分どハイガツて慈善音樂會だの演劇會だのと騒いで居らしつやるんですけれど、妾大勢の人の中に塗つて騒ぐのは大厭ひ、交際社會大厭ひなの、妾其様な浮いた生活でなく、靜に楽しく暮したいんです。」

『Sweet home。』

「其れだわ妾の願は。」

「其れで満足して下さるの。」

「然様。」

『毎朝此様して一處に歩いて。』

『え、。』

『晩になつたら何様しませう。』

『何様でも。』

『貴方にオルガルを弾て戴く。』

『え。』

『而して僕が其の傍で其れに合はせて歌ふんです、何様でせう。』

『え、Sweet homeだわ。』

二人の足がバツタリ止まつた。

『よう來てるから。』

二十九

現實界から理想界に架け亘した夢の浮橋を往きつ戻りつ、斯様に幸福な日を過すこと、凡一週間程にして、和泉は或朝富岡から一封の書簡を受け取つた。其の内容の主意は、今回當地野田に於て、不日學術大演說會を開き、辨士としては早稻田大學講師某、某、新卒業生富岡自身外一名、千葉新聞記者諏訪啓一の面々乗りこむに就いては、貴君も其の辨士の一に記入せられて居るから、豫め其の心構を乞ひ置くと云ふ通知であつた。無論會主は加藤氏父子である。和泉は此れこそ自分の學問を世間に廣告し、あは好くば老偉人を擲にして宿昔の野心を成就すべき無二の機會だと思つたので、通知の趣に快諾を與へた。

『さあ何を行つたものか、』と彼は戀愛に熱注して居た腦頭を一時間此の方に駆り向けて、彼か此かと演題の撰擇に苦しんだ。

『非自然主義』と聽て風と頭に響いた。『其様だ何かと遠くに求むるよりも、手近く自分の此の平素の持論を發表するに如かんだ。其様すれば既に別段草稿など起

すに及ばん、此の間から書き上げた『自然主義と自然科学』と云ふ論文があるから、單に其の筋書だけを作れば可いのだ。其様心を定むると、重荷はコロリと前に落ちて、力が餘つて、又吉野の事を思ひ出すのであつた。

其の内に吉野が来た、和泉は彼に富岡の書簡、學術演說會の開催、辨士の人物、千葉新聞記者諏訪啓一が自分の同窓であることなど語つて、更に自分の演題に及んで、

『御存知の通今年になつて自然主義の作物で發賣禁止を喰つた書籍や雜誌が陸續あつて、お負けにやあ其の或る作家までが裁判所に告發されて、風俗壞亂の罪名の下に二十圓の罰金を科せらるゝなど、随分と今日の自然主義は世間の問題になつて居ります。然し僕は風俗壞亂など云ふ、其様な淺薄な理由を以て、一層淺薄な今日の自然主義を是非するなんて、其様な淺薄な行り方でなく、ずつと進んだ學者的態度を取つて、直ちに其の自然主義の根據其の土臺石から引つて抜いて、

之を引くり返へさうと思ふんです。學者的に、何様でせう。』

『善いでせう、』と云つた吉野の答は稍器械的であつた。

『ぢや次に僕の演說の梗概を聞いて戴きたいのですが如何でせう。』

『何様ぞ。』

和泉は本箱から『自然主義と自然科学』と細筆に題して約五十頁の原稿の綴を抽出して、故と年表などと挿こんだ處を開いて、一寸目を留めて居て、尋て又其を机の上に投つて、

『實は此の論文を行るんです、此には詳しく科學的作物と文學的作物の比較年表など學者らしく製へて居るんですが、今お話し致しますのはほんの唯梗概だけですから、其の積で聽いて戴きたい。』

『然様ですとも、』と吉野は稍弱つたと云ふ體。

『エヘン』と和泉は大得意、未來の細君に今自分の學者的講演を聞かすと云ふの

で、元氣が全身に充滿して來た。『全體自然主義が由て以て建つて居る其の根據、即ち土臺石と云ふのは何かですな、其の土臺石即ち其れが即ち科學です。否自然科學と云ふのですな。然しです其の謂はふる自然科學と、謂はふる自然主義とが實際何程の關係があるか、別言すれば自然科學の人生觀が、如何ほどまでに自然主義の作物に由つて藝術の上に發揮されて居るか、と云ふことです。謂はふる自然主義の作物と云ふものは、遙に科學の後に瞠若たる物と謂はざるを得ざる次第ですな。』

吉野は額で頭づいた。彼は愈乗り氣になつて、

『何故かと云ふと、今日の自然主義は肉慾肯定主義であるのに、今日の自然科學は寧ろ肉慾否定主義であるからであるのですから子。』

と斯様な様に和泉特有の句法を以て、演説體と談話體とを面白可笑く捏ね交せて、佛のホルバハヤ コント等が唯物論を主唱して、自然主義の父たるバルザックを

呼び起した初代科學は、無論肉慾肯定を明説又は暗示したのに相違ないが、其からずつと進歩した科學、即ち佛のラマルクに主唱されて英のダービンに大成せられた進化學の主張する生存競争、適者生存の大原則は、明々白々に謹嚴な道德主義を指示して居る、否肉慾の奴隷は到底生存競争に耐えぬ、生存を占領する適者で無いと云ふことを、一氣に論じた。無論分らぬことが多かつたに相違ないが、如何にも其の口調の妙なのと、其の熱心な精神に釣りこまれて、吉野も茲で再び頭づいた。

『ですから、』と和泉は吉野の頭の休む間も無く、佛の自然主義の泰斗であつたエミール、ゾラ自身ですら、其の作中には概してラマルクの遺傳的進化を發揮して居るけれども、自然主義を以て祖國救済の唯一法とした彼の眞骨頂は、ダービンの生存競争の大原則の發揮に在つた。ゾラの此の精神を藝術の上に顯したのは、取も直さず帝國の膨脹を諷刺した英のキップリングである。或る自然主義者が彼

を徳の生へた思想を宣傳すると思ふが如きは、自分の自然主義の足場を知らぬのを白状してゐるのだ。其様な歴史論をするのなら、自然主義は何であるか、自然主義は記紀萬葉、即ち開闢以來の古物に過ぎないのだと斷じた、

『まあ此の位にして置きませう。』と長くならぬ内に談義を畢つた。

『まあ、』と吉野は感心した様な、開放を得たのを喜ぶ様な、不得要領な感嘆詞一言を以て答へた。

『いや未だ有るんです、』と和泉は吉野の讃辭に物足りない心地がしたので、是から佛の自然主義者其自身ですら、即ちバルザックでもゴンクールでもゾラでも、決して肉慾肯定でないと言ふ論證に入つて、愈學者的本領を發揮するんです。』

『然様。』

『科業が無ければ行りますけれども。』

『何様でも、』と吉野愈弱りこみの體。

『ぢや又に爲ませう、』と和泉は吉野の心の真相を悟るに至ら無いで中止することにした。彼は自分の智識を街ふことにはばかり熱中して、田舎の聽者の程度を考ふる違なく、現に吉野の態度を目撃しながら其を一般に推擴げて見る目が無かつた。

三十

演說會の前日と云ふ日の朝であつた、和泉は更に他の封書を受け取つた。差出人は郷里の兄であつた。其を手にするから何となく心もとない氣がして開いて見ると、果然父の病氣の報知であつた。勿論心配する程の事では無いとあつて、次に此様云ふ一句があつた。

自然暑氣引にも相成候はゞ御歸郷相成べく候。

彼は胸がドツキとした、彼には此の句が『若し父の生命が暑氣の引き去ると共に引き取る様な事もあつたら、取り返しが附かぬから歸郷せろ。』と云ふ意味に響い

か。二度目打ち返して全く誤解であることを領解した。が不思議などには、其の誤解した意味の方が本當で、領解したと居ふ方が虚偽の様に思はれてならぬのである。

際から吉野が上つて來たので、事情を打ち明けて其の文句を見せて、外から見ただ公平な解釋と云ふものを請ふた、

『此が僕の父の生命を危ぶんだ意味に見えませうか。』

『正か其様な読み方は。』

和泉は吉野の此の一言に常識を恢復した。

『貴方御歸り遊ばすの。』と吉野は稍氣づかはしく、

『いや既に父の生命に關する事さへ無ければ、急に歸る必要も無いです。』

『御歸り遊ばさなくとも宜しいんですか、』

『宜いですとも。』

『でも何んだか氣が、りですわ。』

『有り難う存じます』と吉野の言がしみじみ彼に嬉しく感した。

『僕も實は今年で足掛六年國を出て居ますんですから、今年位は一寸歸つて見たことも思ふです。』

『本當にねえ。』

『父だつても正か今死にもしますまいけれど、随分既う年を取つて弱つて居ますから。』

『然様でせうつて、』と吉野もヒタと同情を寄する。

『其で實は此様な書簡が參りますと、歸るのが本當ですけど、又歸りたいんですけれど。』

『本當ですは。』

『一時でも御別れ申すのが痛くつて。』

「……………」

『お察し下さつて僕の心を。』

吉野は黙つて頭づいて無言で目と目を見合つて居る。

『戀する者は痛い物さあねえ。』

『濟みませんです、』と吉野は俯目になつて、指の尖で書物の耳をいちつて居る。暫くして氣の附いた様に、

『今日は止しにして戴きませうか。』

『然様ですわね、……然し行りませう、若し貴方にでも居て戴かないと、何だか一人で滅入りこみさうですから。』

『でも何だかお氣の毒様ですもの。』

『何に、』と和泉は全身の元氣を振り興して、例に仍つて兩書を講じた。勿論其の調子が如何にも沈痛で吉野の身には、しみ入る様に感せられたので、課業が濟ん

でも、猶ほ俄に立ち得なくて、坐つて居た。

『何故此様なに悲しいだらう、』と和泉は吉野を見ながら獨語した、無論吉野の慰藉を求めて居るので。

『でも正か然様御心配なさる程の事は無いでせう。』

『無い理です、其で居ながら何様も悲しいです、不思議な様です。』

『何様なすつたんでせうねえ。』と吉野も少し持てあぐんで居る。

『僕にも分らないんです、やはり父が死んででも居るんでせう。』

『正か其様は事が。』

『でも無ければ此様なに氣の鬱ぐことは無いんです、此様な事は前に一度も覺えないです、自分ながら怪訝に堪へないです。』

『然様でせうかねえ、』と吉野は怪しんだ様でも無く、暫く眼を反して居たが、尋て又和泉に返つて。

『ちや何様しませう、妾此様な物持つて來ましたけれど、』と六大家の間に居た小さい紙の包を開いた。千鳥形に刻んだ五分ばかりの物が四個五個入つて居る。

『何です其れは。』

『香ですの、是を火に焼くと善い香がしますの。』

『然様、其を僕に下さるですか。』

『え、此様な究らないもの、』と吉野は羞かむで居る。

『はつ是は何よりの物です貴方から父の靈に手向けて下さる物と思ふんです。有り難うございます、』と和泉は眞面目に戴いた。

『あら厭ですわ、其様な事仰しやつちや。』

『でもねえ一樹の影、一河の流、袖振り合ふも多少の縁、と云ふことがムいす。貴方と僕と未だ契約したと云ふばかりですけれども、貴方の手から此様な際に合

つた物を今戴くのは、多少の縁と思はざるを得ないです。』

『でも正か其様な事は……。』

『無からうとは思ふです、畢竟僕の神經に過ぎないでせう、けれども何様も其様な氣がしてならんのです、不思議でたまりません。』

吉野は和泉の扱ひ方に困つて居る。和泉が眞面目で前の様な事を言ふのが、如何にも事實らしいので、氣の毒にもある又氣味が悪いのであつた。其れでも其様なに悲んで居るものを、一人遣して往つて了ふのも何様も愛しい人を、と言つて自分には慰むることも和むることも出来ぬので、何様したら善いかとハタと當惑して居るのであつた。辛と思ひ附いたと云ふのは母に代つて貰はうと云ふ一策。

『ねえ母に然様申しませう。』

『はあ』と和泉は自分の精神が思ふ様に吉野に徹らぬと云ふのを慨がつて、少し悲れ氣味になつて、何様でも勝手に爲るが善いと云ふ氣色。

吉野は其程の事とは氣が付かぬので、衝と起つて二階を降りた、其の後で和泉は一人引入れる、やうな氣がして、了簡に及ばないので机に恚れて鬱ぎこんで居たが、寧その事暫らく寝こんだら又精神が治る事もあらうと思つて、押入から布團を引ずり出して寝て居た、其の處に豊子が訪つて来て、

『おや貴方何様遊ばしたの。』

と和泉の枕許に坐を占めて、氣づかはしさうな面で問く。和泉は起き直るほどの勇氣も無く、寝ながら、

『何様も恐れ入ります、御免下さいまし、何様しましたのですか、痛く氣が鬱ぎますので衝い斯様な状態でムいます。』と起きようとする和泉を豊子は止めて、

『何様か其儘、唯今吉野が申しますには、今朝参りましたお國の御手紙を御覽になつて、急に御鬱ぎこみなりましたつてねえ、何ですかお父様の御大病でも在しやいますか。』

『お尋ね下さつてまことに有り難う存じます、』と和泉は書簡の文句の読み違ひの事、吉野の公平な判断を乞ふた事、其にも拘らず精神がずる／＼と引入れられさうな心地になつて、書簡では然様でも無いが實際には父が死に逼つて居るやうな氣が爲て居ることを語つた。豊子は熱く聞き取つて、

『若し然もムいましたら、直ぐと御歸國遊ばさないではなりません。』

『然です、ですけれども明日の演説の役割もムいますし。』

『でも演説會どころではムいますまい、一刻も早くお立にならんければ。』

『然様です、でも今立つと云ふことになりますと、種々支度もムいますんで。』億効と云ふ風情である。

『然様でムいませうつてねえ、其に生憎な時には生憎な物で忤も不在でムいますんでねえ。』

『然様です、然様です。』

『其で此處からお國まで幾日お懸りになります。』

『早くて四日、先あ五日です。』

『其ぢや到底も御間にお合ひになりますまい。』

『然様です。』

『其ぢや究りませんねえ、其れでも唯一人のお父様の事ですから、お取置のお間にでもお合ひ遊ばすものなら、心残りなく御葬式にお立ち遊ばしたら、お無くなりになりました方は元より、お母様や皆様方が何様なにお喜びか知れませんですわ。』

『其れや其様ですけれど。』何様も歸りたくないのである。豊子は其の様子を見て取つて、

『ぢや此様なすつたら如何ですか、先づ電報か御手紙でも一應お國にお問合になつて、其の間に悉皆御用意遊ばすことになすつては。』

『然様です。』

『既うお見舞状でもお出しなりました。』

『いえ未だ。』

『ぢや其然なさいました、すれば少しでもお慰になりませうから。』

豊子は猶暫らく話して、用のあるときには、何時でも遠慮なく云つて貰ふ事にし去つた。其の後に和泉も彼に此に起き上つて、見舞の書面を認めて若し父の危篤と云ふ場合には、早速打電して與れと云ふ意味を包んで、店の者に出して貰つた。

彼は書簡を出したけれども、其の悲哀は些も減ら無かつた、相變らず床に就いた儘であつた。

主人は午後歸宅した、早速二階に上つて見ると、和泉が此の體裁なので、

『おや和泉さん何様なすつて。』

和泉はガハと起き直つたが、事實を告白するのも氣まづい心地がするんで、
『何に少し神経痛を起してゐるんです、明日の演説會の事は承知して居りますから、是非一席試みる積です。』

郷造は其で安心して、猶辨士の面々も一所に川蒸氣で乗りこんで今逆旅に着いた事、唯諏訪啓一のみが明日時刻までに千葉新聞社から直ぐに來ると云ふことなど、當面の事情を報告し畢つて直ぐと去つた。

其から其の晩にかけての和泉の悲愁と云ふ物は、何等か憑物でも爲かたのやうで、如何にも切なささうであつた。豊子は非常に心配を爲て、或は彼の想像して居るやうに、彼の郷里の父なる人が危篤でもあるかと思ふと、又痛痛しくて耐らぬので、或は西果を裁つて遣るやら、興奮劑と葡萄酒を佐むるやら、按摩を呼んで捫まするやら、其でも猶効能が無く、一向に弱りこんで、夕飯も食はずに涙ばかり流して居るので、醫者を迎へようとまでした、和泉は其の悲愛に感激して決し

て其には及ばぬからと辭退した、我と吾が精神に一大興奮を與へて見たれど、何の事も無い相變らず意氣地なく泣くのみなので、最後に——然様其夜の九時頃、豊子は吉野と一所に來て、此の有様を見て、不憫で不憫で耐らぬので、
『ね先生、貴方が然様お弱り遊ばすと、妾は貴方の親御様のお心を思ひまして、既う既う悲しくて耐りませんの、失禮ながら貴方が宅へ入らした時から、妾は吾が子の様に思つて居ります。失禮ながらお母様にお代り申して、貴方の事を思つて居ります、ですから何様な事でムいませうとも、御遠慮なく仰しやつて戴きたいです。然も無いと反つて御怨に存じますから、ねえ先生。』

『は。』

『其から究らない事と思しめすかも知れませんが、先生が何様か行先御出世遊ばすやうにと、妾は疾うから神佛に祈願をかけて居りますよ。』

『は。』と和泉は既う耐らなくなつて、坊主枕に面打つけて、胸を衝いて叫ばう

とする聲を齒を喰ひ殺して歎歎つた。

『何様して此様なでせうねえ、』と吉野も目を濡らかして言つてる。

『何様云ふものだらうねえ、』と豊子も殆ど持て餘して居たが、尋て調子を改めて、『ねえ先生貴方も男子で居らしやいませう、三百里と云ふほどの遠方から、一人で御出になつて居るでせう、其に斯様云ふお弱い精神で、何様して今迄居らしたんです。よしんばお國許のお父様が御病氣で在しやるにしても第一貴方の精神が御丈夫で在しやら無ければ、お歸りになるもならぬも無いでせう。』

『はう。』

『又明日は大勢の前に立つて、御演説遊ばしませう。斯様してお馴染申した上では、貴方が上手にお行り遊ばしたと、世間の人の賞めますのを聴う聴うと楽しんで待て居ますわ。外の方が善からうと悪からうと、其様な事は何様でも無い、唯先生の御演説の事はかし思つて居ますのに、若し先生が此様な事で明日御出来遊

ばさない様な事がムいましてたら、其れこそ皆な表も奥もガツカリして了いますわ。

『はう。』

『然様でムいませう。』

『はい有り難う存じます何様もお休みなすつて下さい、既う宜うムいます、是から寢附いて見ますから。』

『何様か是非とも其様遊ばして。』

と豊子は猶暫く其の蚊帳越しに枕頭に附いて居て、和泉の鼻息のすやすやと静まるのを見届けて、辛う安堵して、

『あ、好い鹽梅だ』と云つて、其の悲しさうな寝顔を熟々見入つて、

『本當にお佳愛いさうだこと。』

『何様してでせう』と吉野は猶も心配して。

「翌朝和泉は六時に目を覺して見ると、昨日とは打て變つた快活な精神が、胸に躍つて居るので思はず床を飛び起きて、面を洗つて眞先に居間に參つて、豊子と英子と吉野と三角同盟に坐つて居る前に辭儀して皆を驚かした。豊子は

『まあ先生何様なさいました。』

『今朝すつかり直りました。』と先づ昨日から昨夜にかけての豊子の心づかひの禮を述べた。

『いえ其様な事は何でもムいませませんが、先生全く既うお宜しいですか。』

『え、今日は既う日本晴と云ふ心持です。』

『何様なすつたんでせうねえ』と、例の甘つたるい吉野の口吻。

『先生、虚偽の様ぢやムいせんか先生。』とにやと笑つた英子。

『全く然様。』

『際分ち惡つた様ぢやありませんか。』

『何だか憑物の爲し様でした。』

『へえ』と云つて猶英子は『學者にも其様な事がありますかねえ。』

『だから阿様も不思議で耐らないです。』

『まあ其様お治り遊ばして何よりもお目出度うムいます、實はね、』と豊子は昨晩も十時過に心配して二階に往て見た事、今朝も彼の容態が何様であるかと大に心配して居た所であつた事を語つた。

『何うも相濟みませんでした、然し御蔭様で此様なりましたのですから、御恩は死んでも忘れない積でムいます。』と彼は再び心から謝辭を述べて退き下つた。

食事を濟して、禮拜をして、其から今日の演説の筋書を一通り檢閲し濟したので是から一寸町の逆旅を訪ねて、其の教師であつた講師と富岡にも逢はうと思ひ立

たどうする所に、毛立たましい足音が梯子を登つて來ると思ふと、
『やあ』と、往きなり頓狂な聲を立てた富岡、『オレッ』と忽ち太いか體を四這に
して眼鏡をピカピカ光らしてゐる。

『ハ、ハ、ハ』と其の様子が甚だ可笑しかつたので思はず噴出した和泉、『何様し
たえ富岡君。』

『入齒を何處にか飛しつちやつた。あつたア。』

富岡は金の入齒を拾ひ上げて、太いか口を開いて其を前齒の齧に當がふとして、
俄に又思ひ出して『ウワツハ、ハ、ハ、ハ。』

二人は笑つて對坐をした漸う笑ひ濟した所で、和泉は先づ先日書面の禮を言つ
た、富岡は其の事は置いて、

『何様だね君、君が巧く行つて與れるので大に僕も威張れる譯だ。』

『いや君の御蔭様で、此様な善い家に世話して貰つて、僕も大に元氣を恢復しか

けて居る處だ。』

『成程大分血色が好い様だせ、田舎は暢氣で好いだらう。』

『郷里に歸つた様さ。』

『然様だらう』と袂から巻煙草入を出して、其の一本を抜いて、お村が今持つて
來た煙草盆の火の白い灰を其の尖で突き退けつゝ、お村の下りるのを見濟して小
聲で、

『時に君、庇髮が果して歸つて居るぢや無いか。』

『然様三週間ばかり前だつた。』

『ぢや僕の預言が當つたらう君。』

『何だね。』

『英語教へて居るだらう。』

『うむ、君の教訓を服膺して。』

『や何様も艶福。』と富岡は聲高に云ふ。

『君聞こゆる、聞こゆる。』

『あつ失敗つた、』と富岡は巻煙草を挿んだ手で、一遍頭を摩で廻して、『然し何様も艶福だ、實は僕は唯君に想像を言つたまでだつたが、事實だつたら僕自ら當るんだつたなあ。』

『君に代つて貰はう。』

『いやあ何様も……然し君別嬪だらう。』

『君は女を見ることが巧いと思ふ。』

『戯談ぢや無いよあ、些惚氣を聞かせたまいな君。』

『いや其様な物は有りや爲ない、然し僕は些か君に報告して喜んで貰いたい事實がある。』

『其れ見たまへ、然し恐れ入るなあ、お惚氣を唯聞かされるんぢやあ。』

『だから今晚君と一所に寝ても緩くり話したいと思ふ。』

『今聴くよ今、今緩くりと話したまへ。』

『君急ぐだらう。』

『急がぬへよ、然し一日も懸るんぢや困るが、ハツハツハツ。』

『戯談ぢや無いよあ。』

『ぢや今聴う話したまへ、』と灰を落した巻煙草を口にした。

『實は其のね』と和泉は小聲で端緒を切り出した、『彼の女が歸つた翌日であつた。』

『うむ』と富岡は長い耳朶を突き出した。

『君が始言つた然英語の復習をしたいと云ふことだつたから、其を拒絶すること出来なかつた。』

『う成程、お安くない譯だね。其から。』

『其から其の所望に應ずることになつた。』

『うむ其りや分つた、其から、』

『所が君、其の稽古机と云ふのは此の机だね。』と和泉は後にある自分の机を顧み
た。』

『ほう、妙に細長い物だなあ。』

『其様だ其で僕甚だ困つたと云ふ譯だ、君の推察を乞ふのみ。』

『いや何様も耐らないなあ、うむ、其から何様したね。早速自然主義と來たら
う。』

『いや何も其様な猥褻な筋ぢや無い。』

『怪しいなあ、頗ぶる怪しいぞ其りやあ。』

『いや僕は君の教訓があつたから、いや縦令無かつた所が、今度は名譽恢復の責
任を有つてゐるから、深く注意して居たさ。』

『宜しう、其から。』

『所が彼の女は無邪氣に膝を進むるんだつた。又其で無ければ頭が鉢合をしなけ
ればなら無かつたのだ、机が机だから。』

『う成程、面白いなあ。』

『所が其が無邪氣過るに至つた譯だ。其が又理由がある。彼の女が今度歸省したの
は、些脚氣の氣味があると云ふ譯ださうだ、だから僕は無感覺の所爲だと思つた
から、僕は固く退いて僕の主義を守つたさ。』

『う成程、然し無用だつたかも知れんね。其から。』

『所が科業を進つて居ると云ふと、僕に取つては驚天動地の事が起つた。』

『な、な、何だ。』

『彼の女が其の指先で僕の膝を突いたのだ、』と聞ふるばかりの小聲で、而も眞面
目な調子で和泉は言つた。

『む、む、成程、行つつけて了へば宜かつた。』

『いや、いや、其處を耐へて彼の女の神聖を保つたのは實に基督教の力だ、又君の教訓のお蔭であつた。僕は是で聊か今日君に會はす面があると思つた。何様か君も喜んで與れたまへ。』

『うゝむ、や敬服敬服、うゝむ、成程然様なもんかなあ、』と富岡は何か感じて居る體であつた。

『何か子』と和泉は基督教の力に彼が感じて居ると思つたので。

『いや何でも無いがね、』と富岡は自分の言を葬つて了つて、『ぢや君此處の養子になれらあね。』

『馬鹿云つてる』と和泉はニッコリ笑つた。

『いや必と成れる、己橋渡して遣らうか、然し君の方が眞平てんだらう。』

『いや、いや、僕は渡りに船だがね。』

『ぢや可いや僕加藤君に話して遣らうか。』

『おい今少し静にしたまへ、』

『何構うもんか。』

『君の厚意は有り難いが、僕のやうな傳道志願者が此様な内の養子になれようかねえ、』と和泉はそろ／＼本音の緒を吐き出した。

『其奴は徒目だ其奴は、耶穌は止さなきや徒目だ。』

『其れ止めたら望めようか。』

『其れなら知れない、然し其様なるとヤツバリ隠居に相談しないぢやね君、加藤君ぢや徒目だ、』と富岡は和泉が戯談に乗つて來たので體よく老偉人を待出して遁げた。

『然様か。』と此で和泉の野心の蛇の舌の根が引こんで了つた。

『時に君。』と富岡は稍實着を口調で、『其は第二の問題として、第一を極めやうぢ

交る其の竹垣に往來して、形勢を觀望しては、豐子に報するのであつた。

第一席が富岡澄男、第二席梁川亨、第三席和泉修三、第四席諏訪啓一、其から二人の法學博士と云ふ順序であつた。最初二人とも相應の感動を與へて壇を下つた。第三席和泉に至つて。一家の注意は擧げて之に聚中された。所が様子が些ども分らぬ、御堂の内がウともスウとも言はない。皆案外に思つて居る。英子の如きは耳痒く、齒痒く、口惜しく感して、『何様したんだらうねえ』と悲れてる。長い長い、約一時間も経つた思ふと、少し許の拍手があつて、其の結局を告げた限であつた。豐子も何様したのかと心配し切つて居た。吉野が説明の任に當つて、彼は學者らしい演説、非常な綿密な研究の結果であるから、東京の講壇でも無ければ、此の田舎の百姓たちには、到底も分らない。分つた所で拍手喝采など中途で受くべき種類の物で無いと、流石は當生女學生だけの見識を以て辯じたので、豐子は内の先生も自分の娘も見上げたものだと思つた。英子も一應成程とは思つ

たが第四席の諏訪が始から喝采を以て初め、ヒヤ、ヒヤ、大笑を以て打ち通し最後に大喝采を以て終つた其に傾倒して居る。無教育な田舎者に分るやうに話して、彼様笑はせるのが坐を見て法を説くの理に適つて居る。『何様な事を云つて彼様大勢の人を笑はせるのか、自分も往つて聞いて見たい。學問は學問だけれど、彼様人を動かす技倆が中々豪い、』と其様思つて居る。演説は午後五時過に濟んだ、七時から町の料理店で親睦會があると云ふのであつた。

和泉が歸ると間も無く諏訪が尋ねて來た。彼は丁稚の源に導かれて、二階を昇つて來た。金縁眼鏡、白羅紗の背廣、十分とハイがつてジロリジロリと二階の隅から隅を胸して和泉を今見附けたと云ふ風で、

『何だ君や此様な處に居るんか。』
聲からが氣障に聞えて、而して揚げたのか抑げたのか分らない語法を用ひたので、

和泉は初から癪に障つたが、親友の一人と思つて直に打ち消して、

「善く来て與れた。未だ親睦會には一時間以上あるから、緩くり可いだらう。」

「うゝむまあ好い」と諏訪は坐布團の上に曲膝書いた。

「何様だ一體君は此様な處に引込んで何様する積だ、」と十分に捻り揚げた口髯を、更に同じスタイルに捻りつゝ、頷突出して稍輕蔑した口調で言つた、

「いや遠からず東京に返る筈で、其の時期を待つて居るのだ。」

「東京に歸つて何様する。」

「神學校に入る積。」

「神學校、や其れは思ひついたりだ、何故其様なケチな事行る。」

「僕は生涯を傳道に獻ぐる積だ。」

「傳道、君か。」

「うむ。」

「へへ」と愈輕蔑した口先で「君は元來下宿屋の女などに關係した男ぢあねえか。其で傳道が出来るのか。耶穌の傳道師は皆其様なもんか。」

「だから傳道で罪を贖はうと云ふのだね。」

「成程僕は何も君が耶穌坊主になるのを止めはせん、然し三年間の政治學を何様する。」

「いや別段政治學を棄つるには及ばんから。」

「然様ぢや無い、政治家にはならんかと云ふことだ。」

「僕は成功の望を絶つて是から神に奉公する積。」

「へへ、ぢや君は早い話が下宿屋の女と關係した結果、全く挫折して了つたつてんだね。」

「いや君から見たら挫折と見ゆるだらう、僕の方から云へば『神の値遇に答うふのだ。』」

『神の値遇、希しい事を聞くもんだ、何か神は其様有り難いもんかねえ。』
『いや僕には有り難いさ。』

『其の有り難い所を些と聞きたいもんだ、然うすりや僕も耶穌になるわい。』

『いや君が聞くと云ふなら語らう。』

『いや聴く、大に謹聴する、』と諏訪は膝に肱杖衝いて、更に髻を捻り出してセ、
ラ笑をして居る。

『君は僕が例の墮落の對手な婦人を救はうとして誤解を招いて、郷友中の基督信
者から撲られたの聞いてるだらう。』

『いや聞かない今始めて聞いた。何か、君が其の下宿屋の女を救ふ、へへえ、何様
して。』

『基督教に導いたので。』

『其で撲られた？。』

『うむ。』

『其が何か、神の値遇か。』

『いや其れは其様ぢや無い、其の時神の審判だつて僕を打つた男だ。其の男が無
政府主義の書物の秘密出版の廉で監獄に入つて、獄中で死んだんだ。』

『其か神の値遇が。』

『然様だ、其の時僕は「復讐を我に委ねよ」と云ふ神の言に復讐を委ねて居て、其
が神の約束然になつたのだ。』

『妙な言を云ねへ君は、全體志士たる者が當時の政府の壓制に反抗して、獄中に
死するのは志士の本懐さ。名譽な話さ。其の志士の名譽が下宿屋の女を犯した者
に對する神の値遇、妙ぢや無いか、論理に合はない。』

『其様かも知れん、僕の意志が君に貫徹しない様だから、既う止す。』と和泉は諏
訪が頻りに『下宿屋の女』と云ふのは十分に自分を侮辱して居ると思ふので、心

中に憤つて居る。

「いや怒つちや困る。僕は君の言ふことが分らんから、分らんと云つたまでさ、怒つちや困る。」

「いや怒るんぢや無いが、僕の意志が君に貫徹し無いから止すと云ふだけだ。」

「然様かと」諏訪はにやりと笑つて、仰向いて青つばい剃り立ての頷を撫で「いや宗教も善からう君が好んで行ると云ふなら『人各有能有不能』で。」

「所で君」と彼は俄に面を和泉の前に投げ出した様にして目を細く笑つて、

「此の内にや別嬪が居ると云ふぢや無へか。」

「うむ一人は居る」と和泉も忽ち感情を和した。

「何様なだう。」

「面か。」

「無論さ。」

「僕に形容なんか出来ないなあ、摘んで云つたら眼の優いのが特色だらうよ。」

「然様か、ふむ、……おい和泉、和泉、君の事だから既う唯置いちや居まい、些

惚けちや何様だ。」

「馬鹿言つてる、其様な物ありやしない。」とニコニコ笑つてる。

「いや何様だか分らんぞ貴様の事だから、何様だ白状しないか。」

「いや白状するが物は無いが然し」と彼は此の内非常に深切にせらるゝこと、

又畧吉野が自分を愛して居ること、自分が深く警戒して過去の醜名を幾分か雪ぐことを得たことを、手柄顔を語つた。

「フーン」と諏訪の面は忽ち輕蔑から他の嫉妬とも見るべき一種異様な反感的表情に變つた、「ぢや君や此の家の養子になるんだねえ。」

「其様な事無い。」

「いや其様云ふ凄い手際は君に限る、此家や餘程の金満家ださうだから、君は餘

程甘い事をする。』

『其様な事無い。』と諏諏の容貌の險惡を感じた和泉は頻りと彼の猜疑を打ち消すに努めて居る。

『ふうむ君や中々鋭い、いや君に限るだ』と諏訪は尙頻りに刺つて『君其の別嬪と金幾何貰ふかね。』

和泉が何とか答へようとする途端、トントン梯子を駆け登つて、半身を顯はした主人、

『諏諏さん御一緒に参りませう、和泉さん如何ですか。』

『ちや又聞かう、』と諏諏か立つた。

『綾羅紗のモーニングゴートを羽織つて居た和泉も、一緒に立ち上つた。』

三十二

演説會は縣下を巡回するので、翌日辯士の一行は松戸に趣き。其から又其の翌日日流山と云ふのであつた。

然るに和泉は前夜明治學院から試験の期日を通知する端書を受けたので、彼は一行に加はることを辭した。

其の朝和泉は久しぶりに受験の準備に返つた。實を言へば此の一個月以來吉野の戀に奪はれた以後の彼は、唯うつらうつら爲て居て、些も精神を凝して思想を纏めると云ふことも、讀書に已を忘るゝと云ふことも出来ない、寢ても覺ても吉野の面ばかり目にチラつき、其の戀のみが氣にかゝつて居るので、受験の準備などは疾うに放抛されて居たのであつた。だから期日の通知書を得た一刹那愕然として夢から始めて覺めたのであつた。

然れども彼の心は實際豊子の愛と吉野の戀とに奪はれて居て、夢から覺めたくないものである。恰も眠に沈んだ人が遽に呼び起されて、僅に眼を開いて、己を起し

た人の面を見て、忽ち又眠に沈むが如くである。

「養子となる、其は出来ない相談だらう、然し吉野との戀愛が何處まで繼續せらるゝか、吉野との關係が不幸にして斷絶した曉にも、豊子の慈愛は猶ほ繼續する。而して豊子は自分を、多分其の生家と思はるゝ二人の娘の其の一に懇望して居る、前途の希望の蒼が満ちてる、其の希望の蒼に今少しく接近した上で神學校に入るとしても遅くは無い、多寡が一年延ばせば可いのだ。

斯様考へて居る處に、豊子が昇つて来て、常にも無く弱つたと云ふ容態で和泉の前に坐を占めて先づ太息から吐いて。

「先生妾今日は既うガツガツ致しました。」

「何様なさいました、と和泉は痛く驚いた。

「既うねえ、望も綱も切れ果てました、既う既うスツカリ力を落しました。」

「何様してでムいますか。」

「先生、今迄黙つて在しつて、妾宛で欺されて居たやうでムいますわ。」

「何の事です、と和泉は魂を消して居る。

「何の事かと仰しやんですねえ。此まで些とも何とも仰しやいせんから、三年でも五年でも、在しつやて戴けることかと思つてましたら、貴方既う直と妾どもをお見棄なさるつてんぢやありませんか先生。」

「あ其の事ですか、と和泉は始めて氣が附いたほど、富岡に頼んだことを忘れて居た。

「其の事なら既う御心配下さいませすな、既う止にする積ですから。」

「いえいえ然様ではムいますまい、然様仰しやつて置てお出し扱になるお積でムいませう。其なら其ど仰しやつて載させんと、何様なに御恨申すか知れませんよ。」

「いや何様も」と和泉は大弱りに弱つた。彼は最初其の考を以て來たけれど、

今は豊子の慈愛と老偉人の親切に感じて、今年も置いて貰いたいと思ふて居ることを話した。豊子は漸う安堵した様子で。

『其れならば可うムいますけれど、今朝其の事を倅から聞きました時は、胸が潰れて食物も喉に入らんほどムいました。ぢや其に御相違ムいせんか。』

『ムいせんです。』と和泉は強く断言した。

『でも何様もねえ。』

『唯此れだけの事があるです、此の九月から入らうと思つて居ました學校に願書が出してありますから、言ひ譯に試験を受けて捧に振つて了はうかと思ひます。』

『お落第遊ばすんですか。』

『然様です。』

『でもお落第なざるんぢやねえ、然様なお名折になるやうな事で無く、何様が一年でも御延ばしになやうな御工夫はありませんか知ら。』

『然様ですないやあるかも知れませんが、有りさうですから然様しませう。』

『何様か其様な事に爲て戴いて、せめて今年でも御滞留になつて戴きたいものです。』

『今ぢや僕から然様御願ひ申すんです。』

是で豊子は漸う面色を直して去つた。

三十三

二三日経つて九月三日と云ふ日、彼は東京に出立した。彼は此の地に來た當時の様で無く、段々ど日曜日の出京も怠つて、吉野の歸つて來てからと云ふものは、唯の一度も野田から出離れなかつた。久ぶりに東京に出て見ると、世界は駭々と進んで居て、自分は恰も舊世界から出て來た人のやうな氣持だ。

次の日が日曜日であつたので、殆ど二ヶ月も欠席した教會に出て兄弟姉妹の輝

く面をも見、問安の辭を交へ、有り難い牧師の説教をも聴聞した。見る物聞く物皆自分の怠慢と轉退とを責むるやうな心地がして、延期の相談を牧師に提出するなどの勇氣はガラリと抜けて、此際是非とも受験入學を斷行しなければ、神と人との相濟まぬと云ふ氣に駆られたのであつた。

月曜日が試験の期日であるので、彼は指定の時間に明治學院に出頭して、試験を受けた。問題はアブラハムからタビテ王に至る、猶太史中の重なる出來事を英文で録せと云ふのであつた。彼の怠慢の功が茲に顯はれて僅に其の三分一も書いたかと思ふ頃、理事が來て、既う時間ですと、用捨もなく書きかけた答案を浚つて行つた。彼は唯アツケに取られた。時計を見ると一時間しか立つて居ない、彼は初め時間を限られ無かつたので、悠悠閑閑と構へ込んで居たのであつた。不合格こそモツケの幸だと、彼は燒氣味で立ち去つた。

三十四

和泉が野田に歸つたのは、其の日の夕方であつた。彼が店頭から二階へ上らうとするとき、開放してあつた居間の中から、チラと彼を見たのは、主人郷造の目であつた、其の目が何となく平生と變つた反感の光を放つて居た。其の障子の内には、老偉人が居て、何事かヒソヒソ談合して居る様子であつた。彼は稍氣味悪い感を懷いて梯子を昇つたが、其れは唯一時であつた。彼は直ぐと衣服を替ふると、湯に案内さるゝ、湯から揚ると食事となる、何を考ふる間も無かつた。彼は今食事を濟して机に向つた。

『首尾善く落第して來たから、今一年間此地で暖かい夢が見らるる、早く老母に語つて安心させよう、吉野嬢も内々心配して居たかも知れん、早く知らせ安堵させたい。然し既う九月も五日、孰の學校も開校する頃だ。……然し吉野嬢は未

だ脚氣が全治しないから、最う一ヶ月ぐらゐは休養したい、何様せ初一月ばかりは正な授業は無いから、と言つて居たから今一ヶ月位は吉野嬢とも戀を語れる。』と斯様な事を考へてる折柄、豊子が登つて來た。

『入つしやい』と和泉は待ち構へて居る。

豊子は例の坐に就いた、見るから面も青ざめて元氣と云つたら抜けて了つて居る、と云ふ風情。

『お疲れでムいうせう、御試験の方は如何でしたか。』

『好い加減に行つて來ました。』と和泉は欣欣然として『ですから、其の方は既う御心配下さらぬ事に願ひます。』

豊子はグツと言が喉に詰たやうで、

『ぢやお受けになりませんでしたか。』

『受くるも受けないも同じ様な事にして來ました。詰り最う一年間、御厄介にな

れる様に、』

豊子は黙つて俯向いて暫く掌を額に當て、指で臍臍を抑へて居た。其れが頭痛に耐えぬと云ふ際にする豊子の習慣なのである。其を見たり和泉、始めて前刻の主人の目視を思ひ出して、何か容易ならぬ事件が身の上に出來したと氣が附いた。而し彼は心て其を打ち消して、

『何様か今迄の然に相變りませず。』

『其れがねえ貴方。』と豊子は既うには黙つて居れないと云ふハメになつて、『飛んだ事に成つて居まして……。』

『え』と彼も既うには愕かざるを得ないので『何様な事が起りましたか。』

『貴方何事か富岡さんか諏訪さんにか、お話しになりはしませんか。』

『いゝえ何にも』と云つた彼が面は眞青になつた、『尤もお宅で御深切にして載くだけの事は話しましたか。』

『唯其れだけの事でムいますか。』

『唯其れだけの事です。』

『富岡さんは其様な方で無いのは、妾好く存じてますけれど、諏訪さんてえ方が、何様な方でムいますかねえ、ヤハリ貴方の御親友で在しやいますか。』

『親友ですけれども、少し好か無い男なんで。』

『然様でムいませう、何様も彼の方に相違ないと思ひます。』

『諏訪が何様致しました。』と和泉も胸が轟いて居る。

『彼の方ですか何方ですか、分りませんが、貴方のお舊い事を伴に仰しやつた方がムいますんでね、其で既うねえ。』

『然様ですか』と彼は天國の斷崖から不測の淵に突き落された心地、呼吸も胸も塞がりさう。

『其の又話し方が如何にも憎體らしいんでしてねえ。』

『へえ』と既う彼は返事する勇は氣すら無い。

『貴方は大層彼の男を信じてお在になる、養子にまでなさるさうです、いやお目出度存じます、なんて其様云ふ作向でスツカリ伴を怒らして置いて、伴の方から是非とも貴方の事を尋ねなければなら無い様にして、其れぢや言はふと作方なしにお話しなると云ふ装置で、既う然様なりますと、伴も正直な方だもんですから、其様な方ならと云つた様な次第でしてねえ。』

『然うですか』と彼も彼此の作方に勃つとして、『ぢや何様でも爲るが可い、』と心では思つて居て、『何、人が悪いんぢやありません、僕が悪いんです。』

『決して然様云ふ譯ではムいません、お若い内に一度や二度や何様な事遊ばしたつて、當り前でムいますわね、でも其が其様云ふ行きが、りになりましたもんですから、實にお氣の毒さな事に……。』

『はあ』と和泉は唯面目なさに俯向いて留息を吐くのみである。

『でも其れなら其れと御試験前にも然様になりましたなら、先生の御都合ぐりも御在り遊ばしたんでせうに生憎な時には生憎なものでムいましてねえ。何ですか既うお取り返しは附か無い物でムいますか。』

『駄目です』と如何にも切ない胸の苦痛を吐いた。

『でも先生は學問はお在りなさるし、世間はお廣く在しやりませうから、何様にか道が御附きになりませうから、』と他を勵ますやうな自ら遁げかけるやうな口吻。

『何様にかなりませう、然し今何も見當が無いのに困ります。』と失望落膽の體裁し『困りましたねえ』と豊子も殆ど言の出ようの無いのに困つて、暫く互に留息の附合を爲て居たが、『其れとも又今夜の中にでも伴の氣が變るかも知れませんか、まあお氣を落ち着け遊ばして在した方が宜うムいます。妾一寸ねえ、然様言ふことになりさうでムいましたら、其の時に驚き遊ばさ無い様に、前以て

申し上げて置かうと思ひまして。』

『ぢやまだ其様極つたぢやありませんか。』

『まだ確と極つた譯ぢやムいせん、孰れ其様と極りましたら、明日伴から御挨拶申し上げるでムいませう。』

『いや何様も有り難う存じました。』と彼は猶頼ない老母の未了の一語に一縷の望を繋いで、幾分か常識らしい挨拶を爲し得た、豊子も辛う是で立つ瀬を得て、

『ぢやまあ御疲れでムいましたらうから、緩くりとお休み遊ばせ。』

豊子が二階を歸つて一太息附く間もなく、健が不足税附の封書を以つて來た。郷里の兄から出したのであつた。先づ其の分量に驚いて、胸轟きつゝ、披いて見ると。

『父上事兼而病氣の處養生不_二相叶_一。九月一日午後九時事切れ候。』

『何だ何だ何だ、九月一日午後九時、』丁度演説の前夜に當る、ぢや其日終日泣いたのも、ヤツバリ父の死ぬると云ふ虫の知らせ、神經の直覺であつたのか、吉野

嬢か千鳥の香がヤツハリ手向の香であつたか。』

彼は再び其の書簡に返つた、十二行の罫紙に三四枚に亘る細書で、先づ年老いた父の二三年來の容體から、病み附いてから死に至るまでの容體、愈々其の起たないのを知つてから、急に彼に遇いたいと言ひ出した事、修は未だ歸らぬか、修は未だ歸らぬか、と死ぬるが死ぬるまで呼びつゝけた事を記してあつた。和泉は已の不孝の罪に打たれて胸も張り裂けさうであつたのを、強いて堪へて讀んで往つた、最後には葬式の前後の模様が目掛六年別れて居る彼に、遇つて語るやうに事細かに書き記して、中に筐の寫眞が入れてあつた。其の寫眞を取り上げて見ると、彼が國を出づるときとは打つて代はつてスツカリと肉が落ちて皺が見えて顔面が如何にも哀しうな表情であつたので、和泉は唯一目見てツツとばかり、机に面を打つ附けた。彼は暫く泣いて泣いて泣いた後で、筆を取つて巻紙に、

わが父上は死にませり。

わが父上は死にませり。

た、一ひらの面影を、

此の世にとめて逝きませり。

ふる里遠くさすらへる、

不孝の我をおもほして、

かなしくなりし其の御顔。

あはれになりし其の御顔。

其のあはれなる御顔さへ、

ふたゝびおがむ方もなく、

わが父上は死にませり。

わが父上は死にませり。

彼は泣いては書き、書いては泣き、書きあげて、

「際も際として此様な悲しい場合に、此様な悲しい事が起ることか。」と又音を抑へきれなくて咽せ返つた。尋て彼は手づから押入から夜具引出して、蚊帳を釣つてコロリと寐て枕の上で泣いて居た、老母も吉野も訪ねて呉れぬ。

三十五

翌日五時頃から目を覺まして、枕の上に茫やりとして聞いて居ると店の方で多人の聲、

『御機嫌宜う。』

と云ふと忽ちジャリジャリと俥が砂利の上を走り出す聲、彼は院居でも又出京するのかと思つて居ると、暫くして晝箋紙の巻いたのを手にした豊子が奥の二階から上つて来て、蚊帳の内を見透して、彼の目を開いて居るのを見て、

『おや御目覺で在しやいますか。』

『は』と和泉は蹶ね起きて、豊子の止むるにも拘らず衣物を被た。好く寐こんだので、氣持が好いのだ、豊子が妙な物を有つてるので其に心が牽き起されたのであつた。

『何か御用でムいますか。』

『いえ唯今ね吉野が急に學校に歸ることになりました。是非先生にお目にか懸つてお暇乞を申し上るんですけれども思ふ様にも成りませぬので、甚だ失禮でムいますけれど此れは』と豊子は晝箋紙の冬景山水の大作を展べて、『妾が満點を取つたんでムいますから、此れを先生に差し上げて紀念して戴くと申し

まして妾から上げて與れるように申して往きましたので、究らない物でムいますけれども、何様ぞお取り置きを願ひます、と云つて又巻いて和泉の上に差し出した。花鳳と云ふ雅名の下に落款が打たれて、其の上に『美』と云ふ朱文字が記されてあつた。

『有り難う存じます』と云つて戴くは戴いたが些とも有り難いとは思はなかつた。自分の欲しいと思つたのは、此の畫の作者自身であつた。此を貰つたつて何に成る物かと思つて其の人が見えも爲ないので慨しさに、

『既う神にも人にも棄てられて了つたんですねえ。』

『其様な事はムいますまい、』と豊子は胸にコタふる所があつたので。

『僕の父がヤハリ國で亡くなつたんです、丁度演説會の前日の晩に、』と和泉も父の喪に其の怨を紛らした。

『あやまあ、ヤツバリねえ、』と豊子は魂を潰ぶして、『まあ何て不思議な事でせ

う。』

『時が時でムいますから、一倍ガツカリして居ります、』と愁然として居る。

『誠にお察し申します、生憎な時と云ふものは、生憎な物でムいましてねえ、まあ其れは其れは、嗚お力落で在しやいませう。』と豊子も限りなく、佳愛さうな事に思つた。然れども外に慰めやうが無いので、

『何ですか既う餘程のお年で在しやいまして、』

『五十七。』

『ぢやまだ其れほどの御年でも在しやらないのに、御残念でムいましたねえ。』と猶ほ平生の容體から病名など聞いて、表し得るだけの同情を表して、『後でまた伺いますから、まあ御緩くりと御休み遊ばして在しやいまし、また今朝は早うムいますから。』

豊子は一旦辭して去つたので、和泉は再び寢轉がつた。

「あゝ既う徒目だ、故郷の父には死れて了ふし、第二の故郷と思ふ此の家からは追ひ出さるゝし、戀人からは棄てゝ往かるゝし、明治學院の試験には落第して了つたし、是に至つて萬事は休すだ。今日までは此の家に居らうが、明日は何處に往くことやら、……神よ前途を導きたまへ。』苦い時の神頼み、彼は始めて久ぶりに眞實な祈を捧げた。

六時を過ぎたので左にも右にも、起き上つて貰つた書箋紙を收つて、揚枝も使ひ、面をも洗ひ、飯をも食つた。

待つても無い、待たぬでも無い主人郷造が上つて來た。果せるかなと和泉は思つた、教科書を携へて居ないからであつた。尋て坐を占めた彼の面目は、平素の柔和に返つて居て、剩へ幾分か氣の毒なと云ふ表情さへ見えて居た。

「先日富岡を以てお話になりました一件ですが、實は僕の方では今一年間もど存じて居ましたが、折角と思召立になつた所を、お留申すも何でげすから、御話

の通お請致しましたから、明日でも明後日でも、何時でも御隨意に御引取なすつて下さいまし、何様も長長お世話になりました。

「いや其の方は既う止めました。』とも正か言はれないので、「あゝ然様でムいませるか、御無理な御相談を申しまして済みませんでした。』

「何様か前程母から伺ひますれば御尊父様御無くなりなつたさうです、誠に御心中お察し申します。』と主人は心かららしい同情を表した。然し今一年在しつたらとも何とも云はなかつた。

「有り難うムいませ、長々御厄介になりました、今日だけ置いて戴きまして、明日引取することに致します。』

「えへ既う三日でも五日でも緩くりなすつて入つしやいませ。』

其様云つて主人は下つた。其の後で和泉は熟ぐ人情の酷薄なを感じた。此様云ふ残酷な目に遇うのなら、此方にも爲ようがあつた。寧ろ吉野嬢の誘惑を受けた

時、其に應じて、思ひ存分爲たい三昧を爲て、「傷を抜き付けて往くんであつた、……へへえ傷を附くるところか、疾うに傷物になつて居るんだからこそ彼様大な但な誘惑を試みたんさ。彼れが未通女で出来ることか、其れ其れ、富岡が「其んな物かなあ」と云つた一言テツキリ之を言つて居たんだ。うむ、其れで分つた。彼の女は唯自分を一時の色情の食ひ物に爲ようとしたので。戀愛の神聖だの、結婚だの、貞操などの考が、髪毛ほども無かつたのだ、だから二言目には父がと遁げ、今朝も遁げて往つたのだ。然様だ。

「否、否、其様な事は思ふまい、傷物であるか無いかは人の事だ、自分の傷痕を彼の女に與へなかつた其の一事、彼の愛を受けて其の誘惑を拒絶して、其の肉體の神聖を存して遣つた、唯此の一事が、明日此の家を立ち退く吾がせめてもの置土産である……。」

「然し考へて見ると究らない目に遭つたもんだ。」

斯様な事を思つて居るとき、豊子が再び訪ねて来た、手に寫眞を持つて居るし

「如何ですか、少し御氣分が落ち着きましたか。」

「既う徒目です、と怨めしうに豊子を見た。」

「先生然様仰しやいませすけれど、妾の方が先生よりも更と力落して居ますよ、と太息を吐いて、「失禮ながら先生を吾が物と思つて居ましたのに、其れがガラリ外れましたんで。」

和泉も唯太息を答ふる外は無、豊子は猶語を繼いで、

「實は先日から姉の方へ姪の寫眞を越すやうに申して與りましたところが、昨晚送つて参りましたの、然し斯様な譯になりましたので、既う先生にお目に懸け申した所で徒目だと思ひまして、實は控へて居ましたけれど、先生とお別れ申すのが何様も惜くてなりませんで、一度でも御見せ申して、見て戴きたいと思ひまして、と膝の上の寫眞の表紙を抜きかける。」

「何様か拜見を願ひたい」と和泉は頓に元氣づいて。

「既う古いんですけれど、」と其を和泉の手に渡した。姉妹一所の寫眞である。和泉は一時萬慮を忘れて寫眞に見入つた。姉の方は肉の削けた苦勞面、妹の方は目鼻だち、全く吉野に似て居る稍下ぶくれのした快活な表情を有つて居る。

「其の姉の方がねえ、極靜な性でムいますから、其に先生の様な優しい方だと思つて居ましたけれど。」

「へえ、妹御さんの方は好く吉野さんに似て在しやいますねえ。」

「え、幾何かねえ。」

「お幾歳で在しやいます。」

「此れが一昨年の春寫つたんですから、もう姉が丁度で、妹が十八になります。最う早く身が固まりませんと、お婆さんに成つて了いますんです。」

「へえ」と和泉は上の空で返事を爲て居て、唯吉野に似た面に耳見入つて居て。

「十八だと丁度宜いなあ。」と思つて、

「此のお妹御さん方を頂戴することは出来ませんか知ら。」

「最う何も彼も徒目になつて了いました、御縁が無いんでムいませう。」と豊子は愁然として膝に乗せた手の甲を指尖で擦つて居る。

「然うですか」と和泉は寫眞を。パタと投げるやうに地に置いた。僅に復活した熱火もバツタリと滅へたのである。「ぢや何か、唯見せびらかしに来たのか、此の家は見せびらかしの流行る家だ、吉野の戀も見せびらかしだ、出来ない物ど知つて居て、其して一寸見せびらかしたのだ。其して自分が躍起となるのを見て面白がつたんだ。早く言へば自分の心を弄んだのだ。此の老母だつて然様だ、徒目なら初手から見せないが善、見せて置いて自分の心を十分に誘つて置いて、與れと云へば徒目だつて、宜い加減に人の心を弄んだのだ、弄ばれた自分こそ好い面の皮だ。」

彼は常識を失つた人の様に、吉野の戀も豊子の情も、斯様云ふ見當に了解し來つて、然して故意と今一度「然様ですか。」

「ですから最う御目に懸ら無い前と思つて何も彼も諦めたいと思つて居まして、其れで諦められませんか」と又例の手を額に當て、顛腦を抑ふるのであつた。和泉も今は稍豊子の心中を了解して悪い事を言つたと悔いた。然し猶自分の絶望の嘆息が胸一ぱいに塞がつるので人を慰むるなど云ふ餘裕なんか、一呼吸も出無いので、唯黙つて居た爲めに作方無しに豊子の方から又口を開いた。

「先刻作が何と申しましたか。」

和泉は前刻宣告を受け然に話して、猶緩くり休息して往けとの厚意をも附け加へて言つた。豊子は故に一時間でも長居して貰いたいことを言つた上で、

「東京は何方にお越遊ばしますか。」

「何方と云ふ見當なんか有りやしません、」と和泉は獨ほ怨みがましい言を云つて

『でも泊りつけの下宿屋が有りますから其の家にでも暫時居ませう。』

「何様せお近く何れへかお落ち着き遊ばしませうから、是非其節には御書面を下さいまし、」と豊子はせめてもと云ふ容貌。

「畏りました、」娘は遁がすし、姪は與れ然いと云ふし、其の上自分に何の用が有るだらうと、彼は妙に思つて居る。

此様な事で豊子も遺憾無く離別を宣べて、二階を下りた。

然て和泉は明日出立する用意に取り掛つて、先づ桐机の抽斗から空け始めた。彼は此の机に分るゝのが痛かつた。

支度が出来、十二時になる、午餉済まして午睡をする、是れは老偉人の教訓を實行し來つた習慣なので。

彼は四時前に覺めてフイと出た限り、歸らない、入湯時分既に過ぎて夕飯時分にさし掛つて猶ほ歸らぬので、豊子は正かと思ひながら、内心で心配して、お春を

尋ねに遣つた多分野池あたりだらうと云ふ見當を與へて。

お春が息を切つて野池の邊に往つて見ると、彼は果して其處に居た池に浮けてある田舟に乗つて、竹竿を兩手に持つて一生懸命と舟を行る、舟は行かずに、池の真中でぐるぐると車のやうに轉つて居る。

「先生さん、先生さん、……先生さん。」

お春が三聲呼んだので、始めて和泉は氣が附いた。

「何か用かね。」

「お夕飯です。」

「然様かい、やあ日が何時か暮てるな。」

「え、奥様大層御心配なすつて居らつしやいますんです。」

「然様かい其れはお氣の毒さま、僕は一生懸命だつた、面白いもんだねえ。」
彼は感情を通り越して居る。

「舟がぐるぐる廻つてるぢやありませんか先生。」

「うむ轉つてる、乗つて見ちや何様だ。」

「目が轉りさうですもの。」

「然様かい、僕なんか腦が轉つてるから、眼なかんか些とも轉りや爲ない。」

「何が轉りますんですつて。」

「腦よ、頭顱よ。」

「頭顱か轉るんですか。」

「ハツハツハお春さんの頭顱は大丈夫。」

と和泉は船から岸に上つて、

「サア往う往う、御馳走があるか知らん。」

「澤山ムいますよ。」

「其れや有り難い、急いで往かう、駈つくら爲よう。」

「今駢けて参つたんですもの、」とお春は猶ほ息をはづんで居る。
 「ぢや緩くり一所に往かう、ねえお春さん。」
 「参りませう。」

彼等が酒藏の裏手まで歩いて来たとき、手拭蒙つたお常が、城戸の外に立つて打ち守つて居た。是も豊子の命を奉けて、和泉を見に出た者らしかった。

三十六

翌朝彼は加藤家を辭して野田を立つた、ポーツと鳥の立つ様に、何處に棲まると云ふ目當も無く。其の日の暮、老偉人は大熱を發した。

自 白 完

明治四十一年七月四日印刷
 明治四十一年七月七日發行
 正價 金六拾錢

著作權所有			
著 者	發 行 者	印 刷 者	印 刷 所
宮 崎 八 百 吉	東 京 市 日 本 橋 區 下 槇 町 十 二 番 地 今 津 隆 治	東 京 市 京 橋 區 日 吉 町 四 番 地 渡 邊 爲 藏	東 京 市 京 橋 區 日 吉 町 四 番 地 民 友 社
發 行 所 東 京 市 日 本 橋 區 下 槇 町 振 替 貯 金 口 座 六 四 三 五 番 如 山 堂 書 店			

小島烏水君新著

山水文

已に無聲の詩に山水畫あり、有聲の畫に山水文なかるべけんや。

紀行文家として將た山岳研究家として著名なる島水小島先生が、自然の美に接觸して興味湧く毎に、椽大の麗筆を揮つて、天地の大觀を描寫されたるもの茲に

「山水文」一巻あり。

自然に憧憬する人、この一幅有聲の畫に對して雅懷を行ふ亦可ならずや

發行所

如山堂書店

如山堂出版圖書目錄

一二葉亭主人著

小説



第四版

函入全一冊

正價金八拾錢

郵税八錢

近時の文壇を震撼せる大傑作

「平凡」は小説である、然し唯の小説ではない、表は自然派の小説である、裏には自然派を諷刺した小説である、だから自然派の缺點と認められる、點がこの小説で手に取るやうにわかる、自然派の好きな人も嫌ひな人も共に見ねばならぬ小説であらうと、手前味噌ではあるが版元はさう思つてゐる。

如山堂書店藏版

如山堂書店藏版書目

小説の部

田山花袋氏著 春川装

村の人

全一册 正價金七十錢 郵税八錢

塚原澁柿氏著 古徑書

石堂兄弟

全一册 正價金六十五錢 郵税八錢

須藤南翠氏著 半古書

榎木淵

全一册 正價金七十五錢 郵税八錢

水谷不倒氏著 清方書

千軒長者

全一册 正價金七十五錢 郵税八錢

一九が膝栗毛は、名作なりと雖も、今日の世態、人情、風物、と異り一種の骨董視せられて感興を惹く事尠し。告天園主人は覆面せる知名の文士也、親しく各地を跋渉觀察する事多年、其輕妙洒脫の筆を以て、先づ奥羽旅行記を物せら

告天園主人著 新刊

新膝栗毛

名取春川畫 挿畫多數

頗正 價金 四十錢

東京

如山堂 發

日本橋

る、諸諷願を解き奇談屢々讀者を驚かす、加ふるに、朝日新聞紙上藤村、二集亭諸家の小説挿畫に、大喝采を博しつゝある、春川畫伯の揮毫を以て、錦上に美花を添ふ、眞に天下一品の滑稽的紀行文として、娛樂書の上乗なるもの、竊に、家庭に無聊を慰し、世の不景氣を醫する無二の清凉劑なり。

如山堂書店藏版書目

小説の部

馬場孤蝶氏著 原作家肖像

泰西名著集

全一册 正價金七十五錢 郵税八錢

匿名子著 清方畫

松風村雨

全一册 正價金七十五錢 郵税八錢

岡田八千代女史著 米齋畫

門の草

全一册 正價金五十錢 郵税六錢

生田葵山氏著

小俳優

全一册 近刊

如山堂書店藏版書目

脚本の部

山崎紫紅氏著 清忠畫

史劇七つ桔梗

全一册 正價金四十錢 郵税六錢

平木白星氏著 爾畫

釋迦

全一册 正價金六十五錢 郵税六錢

如山堂書店藏版書目

新詩の部

與謝野晶子著 中澤弘光畫

舞 姫

全一册 正價金七十錢 郵稅六錢

平木白星氏著 基督復活圖

耶蘇の戀

全一册 正價金三十五錢 郵稅四錢

平木白星氏著

清耕 忠濤 紅兒 畫

中心おさよ新七

全一册 正價金三十五錢 郵稅四錢

あやめ會編纂

マックス 非弘 水畫

あやめ草

全一册 正價金六十錢 郵稅六錢

如山堂書店藏版書目

新詩の部

前田林外氏著 和田英作畫

花 妻

全一册 正價金四十錢 郵稅六錢

平木白星氏選

山比古

全一册 近刊

平木白星氏選 阪井紅兒畫

新體 詩選 七つ星

全一册 正價金三十錢 郵稅四錢

國語の部

飯田季治氏著

業平全集

全一册

正價金壹
郵稅八

錢圓

與謝野寬氏
與謝野晶子氏 共著

短歌心得草

全一册 近

刊

如山堂書店藏版書目

林襄臣氏著

日本語原の研究

全一册

正價金七十五錢
郵稅八

歴史及地理(紀行)の部

伊藤銀月氏著

日本女性史

全一册

正價金五十錢
郵稅六

小島烏水氏著

富士山大觀

全一册

正價金四十五錢
郵稅六

小島烏水氏著
三宅克己書
中澤弘光書

增訂 不二山

全一册

正價金四十五錢
郵稅六

淺岡誠氏製圖
二十萬分一

東京近縣圖

全一册

正價金二十錢
郵稅六

如山堂書店藏版書目

如山堂書店藏版書目

文學の部

伊藤銀月氏著

つき影

全一册 正價金四十錢 郵稅六錢

島崎松琴氏著

分類評釋 川柳名句選

全一册 正價金三十錢 郵稅四錢

伊藤銀月氏著

百字文選

正續全二册 各正價金二十五錢 各郵稅四錢

其角堂機一氏著

俳句新入門

全一册 近刊

雜書の部

篠山克己謹著

雲井の雁

全一册 並製金二十八錢 上製金三十五錢 郵稅各册四錢

雲井の雁、竹の園生、合本

こゝの重

全一册 正價金七十五錢 郵稅八錢
雲井の雁は「今上陛下」の御事一切
「竹の園生」は「兩陛下兩殿下」の御逸
話一切を輯め奉る

篠山克己謹著

竹の園生

全一册 並製金二十五錢 上製金三十五錢 郵稅各册四錢

マスター、オ木村重治氏著

東交際の葉

全一册 正價金六十錢 郵稅六錢

如山堂書店藏版書目

如山堂書店藏版書目

雜書の部

瀧澤秋曉氏著

愛の解剖

全一册 正價金三十五錢 郵稅六錢

自適生著

話の種

全一册 正價金廿五錢 郵稅四錢

落合浪雄氏譯

樂世觀

全一册 正價金三十錢 郵稅四錢

萬朝報所載

机の塵

第一輯 正價金廿五錢 郵稅四錢

如山堂書店藏版書目

音樂の部

西歐樂聖十二大家作曲
上田敏乙骨三郎作歌
石倉小三郎近藤逸五郎作歌

獨唱名曲集

全一册 正價金八十錢 郵稅八錢

シユートベルト作曲 西歐名曲
近藤逸五郎作歌 第一卷

子もり歌

全一册 正價金六錢 郵稅貳錢

シユートベルト作曲 西歐名曲
近藤逸五郎作歌 第二卷

野ばらの花

全一册 正價金八錢 郵稅貳錢

シユートベルト作曲 西歐名曲
近藤逸五郎作歌 第三卷

つはもの

全一册 正價金六錢 郵稅貳錢

音樂の部

シユーマン作曲
石倉文學士作歌
西歐名曲
第四卷

流浪の民

全一冊 正價金十五錢
郵稅貳錢

東儀哲三郎共編
近藤逸五郎

ヴァイオリン名曲集

全一冊 近刊

如山堂書店藏版書目

宮崎湖處子著

基督教大系

定價四十錢
郵稅六錢

本書は、**希臘文**と**天國的****地獄的**の經験の賜なり、**破天荒**の聖靈の權を以て、**使徒的**の正統的なるかを見よ、其の三位一**誘惑**の聖靈の權を以て、**威墮獄**の恐怖の**經驗的記述**として、白人偉なる乎**黃人**偉なる乎んで之を判せよ

宮崎湖處子譯

アウガスチン 懺悔錄

上製定價八十五錢
郵稅各八十錢

肉慾の甘樂、罪惡の**哀別**、離苦、花**大泣哭**、而して後**聖徒的**の苦悶、人生の**獨身**、生活の呼聲、血あり肉あり良心ある代**見神**、在り、信者不信者之を讀んで其の**自個寫眞鏡**なるを

山崎湖處子著

宮崎湖處子譯

新約
聖書
(私譯)
羅馬書

定價十二錢
郵稅二錢

此書の原書は獨乙の聖書協會の出版に係る最も新にして又最も古き希臘文原書なり目下聖書改譯は基督教界の希望にして彼の難讀難解を以て有名なる羅馬書の如き殊に其必要に逼れり是れ之の私譯の出る所以なり譯者は希臘語の修養を積みて靈火の啓導を感じ聖書研究に従ふこと十年一旦此原書を得茲に聖書改譯の端を發し先づ筆を此書に着け盡く從來の晦澁不曉を一掃し前人未發の微妙を摘發し添ふに新舊譯筆を異にせる主なる聖句の對照は隱微なる羅馬書の宗教意識を抉剔し出し斬新警拔なるパウロの死生觀を論述せる羅馬書管見の一篇を以てせり

東京市京橋區
警醒社書店 發兌

